

---

# 西国の巫女

あすかK

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西国の巫女

### 【Nコード】

N9892X

### 【作者名】

あすかK

### 【あらすじ】

北の国が、西の国の「巫女」を誘拐した。??西国の最高権威「巫女」になるべく『力』の修行を続けて来た少女。少女のことを命にかえても護ると誓った獣人。北国の次期皇帝でありながら、軍の人形と化した強大な『力』を持つ皇太子。??『力』に翻弄されるのは、軍か、国か、あるいは彼ら自身か……

## 序、獣人の子

少年は、鬱蒼と草木の生い茂る森の中を、がむしゃらに走っていた。少年は靴も履いておらず衣服さえも纏っていない。一糸まとわぬ全裸の状態だが、そんなことを気にしている場合ではなかった。とにかく、走らなくてはならない。ひたすら逃げなくてはならない。背後から追っ手の声がする。大の大人が幾人も、十にも満たぬ少年のことを追いかけて迫ってくる。大人たちは斧や刀など武器を抱えて少年のことを追っていた。捕まったら最後だ。もう、命はない。

少年は、鮮やかな赤い血の滴り落ちる利き腕を押さえながら、死にもの狂いで走っていた。この傷はたった先刻、森の外、村の外れで村人の一人の投げた石槍にあたっただけのものだ。少年はその村人の名前を知らないが、顔を見たことはあった。その程度の知り合いだ。何故って、少年は生まれてから今までずっとその村に住んでいたのだ。当然住人の顔くらい知っている。名前はわからなくともそれが自分の住んでいた村の人間なのだというくらい、わかっていた。

村人たちは、昨日までは、少年にも優しくかった。他の少年少女に接するのと同じように、村の子供として可愛がってくれた。しかし何故だろう。今日になって、突然、彼らの態度が豹変した。「あいつを、殺せ」と言う。「このまま放っておいたら村の災いになる」と。「あいつは化け物だ」と。

捕われて殺される寸前だった少年を、村から逃してくれたのは、他にもない少年の母親だった。母親は、村人たちの目を盗んで少年を拘束していた縄をほどくと、両目にたつぷり涙を溜めながら「ごめんね」と謝った。少年にはなにがなんだかわからない。どうして自分がこのような目に遭っているのか、どうして母親が泣いているのか。何も知らない少年は、当然母も一緒にこの村から逃げ出してくれるのだと思った。自分を連れて、二人で逃げてくれるのだと思

った。しかし、母は町外れの森までくると、少年の手を放した。  
「?? お前は、私の手にも負えない。傍にいてやれない母を許しておくれ。」

母の言葉が、胸へと突き刺さる。

どういうことだ、と少年は目を丸くした。少年には父がいない。故に、ずっと母と二人暮らしだった。今までずっと、二人で傍にいたではないか。それなのにどうして突然、離れなくてはならないのか。

愕然とした少年が母の元を去ることができずに突っ立っていると、村の方から大人たちの「いたぞ!」という声が響いた。母ははっと息を呑んで、「はやくお逃げ!」と少年の背中を押した。少年は首を振る。いやだ。母と離れたくない。すると、母は少年を渾身の力で突き飛ばすと、叫んだのだ。?? お前は、人間の村にはもうおれぬ。早く逃げなさい。

どういうことなのだ、どうして自分が人間の村にはいられないのだ。混乱する頭を抱えて、少年は母を振り返る。その背後から、大勢の大人たちが血相を変えて走ってくるのが見えた。手には武器を握っている。化け物を殺せ! と大人たちが叫んだ。少年は目を見開く。何故、自分のことを彼らは化け物と呼ぶのだらう。

大人の一人の投げた武器が、少年の腕を掠った。巨大な石槍だった。右腕に激痛が走る。服が裂けて、その下から皮膚と傷が見える?? はずだった。しかし、少年は、自分の腕を見て、啞然とした。破れた衣服の下から覗いたのは、人の皮膚とはおおよそ思えない、まるで熊のような黒いけむくじやらの毛皮だったのである。それは、紛いも無く獣の腕だった。否、化け物の腕だった。

早く逃げなさいと、母親が叫ぶ。どうしていいのかわからずに、少年は森へと向かって駆け出した。このままでは殺される。何故かはわからない。しかし、村人の言うように、自分はあたかも化け物のような腕を持っている。

そして、森の中へ逃げ出す寸前に、母親の懺悔するような嘆きを、

聞いた。

「??ごめんね。本当にごめんね。獣人なんぞに産んでしまつて、本当に……！」

獣人、という響きが、少年の耳に残つた。初めて聞く言葉だ。それがなんであるかなんて皆目見当もつかない。しかし、その「獣人」とやらのせいで、自分は殺されんと追われているのだろうという予想はついた。村人らの言う「化け物」とは、「獣人」のことを示しているのだ。そしてそれは、少年のことである。つまり自分は今までずっと人間だと思つていたけれど??人間ではなかったのだ。

それから何時間も、少年は森の中を走り続けた。息が切れても、どんなに苦しくても、走り続けていた。足を止めれば大人たちに捕まってしまう。捕まれば、殺されてしまう。

森を走る間に、いつのまにか纏つていた服は裂けて、少年は全裸になつていた。走るだけで裂けるほど柔な服を着ていたつもりはない。しかし、まるで体が突然変化でもしたかのようにみるみるうちに膨張して、もとの少年の大きさからは考えられないほどに巨大化してしまつたのだ。ゆえに、少年の服はもう、纏うことがでなくなつた。かわりに少年の体は、熊のような黒くて堅く分厚い毛皮に覆われていた。

村の外れで斬られた腕の傷が痛む。大量に血が流れた。走つても走つても村人たちを巻くことができないのは、恐らく森の中に点々と血痕が残つているためだろう。傷のある右腕は痺れ始め、感覚がない。そろそろ自由には動かせないほどに傷が進行していた。たくさん血を流すと、やがてはそれが原因で死ぬのだという。そのためだろうか、先ほどから走っているはずなのに、走っているという感覚さえしない。まるで夢の中にいるみたいだ。頭がふわふわと浮いていて、そのまま気を失つてしまふようなほど。

少年は、木々の間を抜けて、森の中に、湧き出る泉を見つけた。こんなところまで来たのは初めてだった。もう帰り道はわからない。

もちろん、わかったところであの村へ帰られるわけもないのだが。

ちよろちよると水の流れる音がして、自ずと足がそちらへと引かれた。血を流しながらも走り続けたせいで、体が水分を欲している水が飲みたい。本能的にそう思った。

少年は泉の縁に腰を下ろすと、無我夢中で水の中に顔を突っ込んで喉を潤した。本当に獣みたいだ。だが仕方が無い。手を使って水をすくおうにも、両腕は化け物のそのように変化しており、もはやこれが人間の手と同じ役割を果たせるのかもわからないからだ。

少年はひとしきり水を飲むと、息継ぎのためによやく顔をあげた。ぼたぼたと髪の毛を伝って水滴が水面に落ちた。波紋が広がっていく。その波紋の中に、少年は化け物の顔を見た。

一瞬、わけがわからなかった。

昨日まで、自分は母によく似た東国風の顔立ちをしていたはずだった。綺麗な黒髪を持つ、素朴な少年の顔をしていたはずだった。

しかしながら、その泉の水面に映る姿は、どこからどう見ても人間のそれではない。白い、白骨化した頭蓋骨のような顔に、黄ばんだ白の長い髪の毛が生えている。ぼたぼたと雫が、この白い毛から滴り落ちて泉に波紋を作った。目は、頭蓋骨のそのように暗くぼんでいて、どこにも瞳など見えなかった。そして、白い毛の間からは、二本の雄牛のような角が生えている。化け物だ。これがもし自分の姿ならば？？自分は化け物だ。

少年は、己の姿に恐れおののいて、ふらふらと立ち上がろうとした。しかし、足に力が入らず、その場に転倒した。ずしん、と重みのある音がその場に響き渡る。小さな少年の倒れた音ではない。野獣の倒れたような重低音だ。腕から流れ出した血が、泉の澄んだ水をどす黒く染めていく。少年はそれを虚ろな視界の中で見つめていた。

嗚呼、力が入らない。立ち上がって逃げることも、できない。逃げたところで、こんな姿ではどこにも行けない。人間は化け物に救

いの手を差し伸べてくれないだろう。かといって森の中で一人で生きていく自信もない。八方ふさがりだ。

森の奥の方から、大人たちの怒号が聞こえた。彼らは少年を殺しにくるのだ。このまま生かしておいては村の災いになる。それはそうだ。だって少年はもう、人間ではないのだ。

このまま自分は死ぬのだろうと、遠のいていく意識の中で少年は思った。血を流して真っ赤に泉を染めて、干涸びるように死ぬのかもしれない。あるいはそうなる前に、村人に見つかって、首を切られて死ぬのかもしれない。だが、もう???どちらでもよかった。なんでもいい。このまま化け物として生きるくらいなら、死んだ方がいい。人間は恐ろしい化け物の命を絶えず狙うだろう。人に怯えて生きて行くことなど、まだ十にも満たぬ少年には、できなかった。

少年は全てを諦めて、全身の力を抜いた。すると少し気が楽になった。逃げろと言ってくれた母には申し訳ないが、もう逃げる必要はないのだと思うと、一気に疲労が体を支配した。天国はどんなところだろうかと虚ろな意識の中で考える。いや、化け物には天国など用意されていないかもしれない。では、向かう先は地獄だろうか何も悪事を働いた覚えなどなかったけれども、獣として人々を脅かしてしまつたからには甘んじて地獄に向かうしかない。だとすれば、獣となつた自分は、地獄に向かうために生まれてきたのだろうか。それはなんと虚しい生涯だろう。己を人間と信じて生きて、最後は獣となりさがり殺され地獄へ向かう。こんなことなら、生まれてこなくて良かったろうに。悪戯な生涯を送ってしまった。

朦朧としながらもそんなことを考えていると、ふと、目の前に人の気配を感じた。さく、さく、と遠いどこからか、草木を踏み分ける音がする。大人たちがようやく少年の存在を見つけ出したのだろうか。そう思ったが、あの怒号が聞こえない。もしも村人ならば、「化け物!」と叫び、「殺せ!」と喚くことだろう。しかし、近付いてくる人間は、至極静かだ。??では一体、誰だ?

少年は、一度閉じた目を開いて、ゆっくりと頭を持ち上げた。こ

んな森の奥に、一体誰がいると言うのだろうか。ここは人間の住まうような場所ではない。だとすれば、少年と同じ化け物か??あるいは、妖精の類いだ。

そう予想してから見上げたために、そこに立っていた者を見てまず少年が思ったのは、

??天女だ。

その一言だった。

少年が今まで一度だつて見たこともないような美しい着物を纏った少女だった。年の頃は、少年よりも若い。五つか、それくらいではないだろうか。しかしその容姿は、五歳かそこの齡でありながら、村一番の別嬪と言われていた娘よりも美しかった。絵に描いたような美少女だ。

そのような美少女が、こんな森の奥に現れるわけもない。だからやはり、人間ではないのだ。この少女は天女だ。そして、自分をあの世へ迎えに来たのだと、少年は思った。

「三の君……!」

天女の後ろから、別の女の声がした。慌てたように森の奥から現れたその女は、天女よりもずっと年上だった。少年の母よりは若く見えるが、恐らく成人しているだろう。天女の付き人だろうか。

「勝手に馬車を下りてはなりません……」

付き人はそう天女に告げてから、ようやくその場に汚らしく転がる少年の姿に気付いたようだった。はたと息を吞んで、汚物を見たかのように顔をしかめ、いかにも上物とわかる服の袖で口元を押さえた。

「獣人……!」

獣人??。その名は、自らの母の口からも聞いた。獣人なんぞに産んでしまってごめんなさいと、母が言った。ゆえにそれは少年を差し示す言葉だ。付き人が「獣人」と呼んで汚物のように忌み嫌っ



ているのは、少年の存在そのものだ。天女の付き人にさえ忌み嫌われる自分は？？やはり地獄へ落ちるしかないようだ。

そう悟って苦笑を浮かべ、少年は再び目を閉じようとした。どうせ天女は天国へは連れていつてくれない。ならばこうして彼女を見上げていても仕方が無い。しかし、そう思っただけで瞋目した少年の方へ、さくさく草をかきわけながら近付いてくる足音がする。「三の君、近付いてはなりません！」と付き人の声がした。ということは、近付いてくるのは天女だろうか。うっすらと少年が目を開くと、予想した以上の至近距離に、天女の姿が見えた。間近でみるその美しいかんばせに、息が詰まりそうになった。

「このままでは、彼は、死んでしまうわ」

天女が初めて声を発した。鈴の鳴るような、愛くるしい声であった。五歳かそこらとは思えないほどはつきりとした物言いで、天女は呟く。

「彼を、連れて帰る」

どういうことだ、と少年は天女の姿を穴の開くほど見つめた。彼女は自分を、天国へ連れていつてくれるというのか。付き人さえ忌み嫌うこの化け物を、連れて帰るというのか。

付き人は信じられないとばかりに首を横に振って、「なりません」と叫んだ。

「そのような穢らわしい化け物を、仮にも聖女様ともあろう方の横に置くわけにはまいりませぬ！」

「穢らわしい化け物ではないわ。獣人よ。私には仗身がないもの。仗身にするわ。それならいいでしょう。聖女の仗身は獣人と決まっているのだから」

仗身、と少年が聞き慣れないその言葉を呟くと、聖女は微笑んだ。

「護衛のことよ。私のことを、守るの」

「いいえ、なりませんわ、三の君」

付き人が厳しい声をあげた。この「三の君」というのがどうやら

天女の呼称らしい。名前ではないだろう。天女の世界にはきつと複雑な決め事があるに違いない。

「仗身となる獣人は、生まれたその時から聖女様の仗身となるために訓練させられるもの。しかしその化け物は育ち過ぎております。すでに獣の姿に変化してしまっているのに、これから仗身に育てあげるなんて危険なこと、できませんわ」

「それは、私の力次第でしょう。彼なら大丈夫??だってほら、こんなに優しい目をしてる」

天女はそう呟いて屈むと、少年の顔に触れた。少年は目を見開く。村の大人たちがぞぞって「化け物」と呼んだこの顔を、少年自身泉に映った自分の顔を見て悲鳴をあげそうになった、この顔を、天女は少しも忌むことなく撫でた。そして、少しも怯むことなく、少年に問う。

「貴方、名前は？」

初対面の人間が質問するならば、あまりにも当然な問いかけだ。それなのに、何故か少年は泣きそうになった。泣きそうになるほど嬉しかった。

「……ゆたや」

ぼそりと答えると、天女は目をぱちくりさせた。やがて、花の咲き綻ぶような笑みを見せる。

「ゆたや……そう、貴方、東の国の出身なのね。嬉しいわ……私もね、東の出身なの。かぐわって言うのよ」

「三の君！ 獣人に名前など……！」

付き人が悲鳴に近い苦言を吐いた。しかし、少年の耳には届かない。??東の出身。ということは、彼女は天女ではないのか。人間なのか。こんなにも美しい人間がこの世にいるのか。まるで天女のような人間が、存在しているのか。

「ゆたや……貴方さえよければ、私の仗身になってくれないかしら？」

そう呟いた天女のような少女の頼みを、少年は一生涯忘れること

はないと思った。このような化け物の姿になってしまった自分を、少しも忌み嫌うことなく求めてくれるならば、自分とてどんな求めにも応じようと。この瞬間に、誓った。

それは他の何よりも堅い契約で、少年をがんじがらめにして離さない。しかしそれこそが彼の幸福となった。

彼は己の命を、この少女に捧ぐことを誓った。

## 1、聖女カゲワ

世界は何故創始されたのか。理由なく世界が始まったのだとしたら、その存在に意義はあるのか。今尚存続するこの世界に生まれた命に、意味はあるのか。我々が何故この世に生を受けたのか、理由はあるのだろうか。もし理由なくして生まれてきたのだとしたら、我々は理由のない生の中で、何かを成すべきなのであるうか。その中で、自分勝手な理由付けをして、生きながらえようとしてもいいのだろうか？？。

長々と世界と世界に生きる命に関する疑問を陳列させた古文書が読まれなくなり、何百年という月日が過ぎた。かつては貴人の教養であった書物は今では非生産な虚言と呼ばれ、一部の哲学者が研究の対象とするのみとなった。

人心が、世界の起源を知りたいとは望まなくなり、数百年。絶対王政の布かれた西国エウリアは、繁栄を極めていた。しかし、第二十五代国王のトゥアイド・ギル四世の治世十二年の頃の秋、突如国王が逝去した。享年三十四歳、若すぎる死であった。不自然な急逝の知らせに、国中がざわめきだった。国政の重鎮のうちの誰かの謀策だったのではないかという様々な憶測も飛んだ。が、死人に口はなく、真相はわからず終いであった。

エウリア君主国では第二十五代国王の急逝に伴い、大々的な葬儀が執り行われ、他国からも賓客が招かれることとなった。そしてその絢爛な儀式が終わると、次に待ち構えているのは次期国王の就任式であった。次帝になる権利を持った皇太子は、たったの二歳になったばかりであり、国政の如何のわかつはずもなかった。宮廷では連日国会という名の騒動が開かれていた。

また、国政とは直接関係こそないが、先帝の崩御によって混乱を生じている場所がもう一つあった。国の中央に置かれた王宮の西側、海に面した広大な土地に広がる俗世とは切り離された世界、「後宮」である。

エウリアにおいての「後宮」とは、国王の妻の住む宮を表しているのではない。この国には、政治の最高権威である「国王」とは別に、宗教の最高権威である「巫女」という権力者がいた。巫女は最も神に近い存在と言われ、神の言葉を国民に代弁する高貴な存在であった。巫女は、国王の代替わりと共に代替わりをし、その時の王の治世を神の代替人として見守った。そして、時の王が倒れると、次の王の治世のために新たな巫女が選ばれる。その候補となる女たちを、聖女と呼んだ。その聖女たちが俗世から切り離され、いずれ巫女となる日のために修行する場所が、「後宮」である。

聖女の中から選ばれた巫女が、最初に行く仕事は国王への宣下、そして次の代の巫女の候補となる聖女を国中から十人選ぶことであった。そして次の巫女は、その十人の中からただ一人選ばれる。その選定の儀は、国王でさえ見ることの適わない極秘裏の行事であった。

民衆にとっては雲の上にも等しい後宮においての騒動を知る者は、数えられるほどしかない。聖女たち自身、彼女たちに仕える従者たち、そして存在するともわからない神のみである。女たちは、自らが巫女に選ばれるために奔走しはじめていた。

高く透き通った蒼穹の中に、小さな雲がぼつかりと浮かんでいる。上空では風速もないのか、ゆっくりと流れて行く様はのどかだ。視界の端に映る黄色の木の葉が、風の吹き抜ける度に揺れた。一陣の大きな風が通ると、白いワンピースのような薄い着物の裾がめくれあがり、木の葉が数枚枝を離れて舞った。あちらへひらり、こちら

へひらり、と宙で迷った後、黄色のそれは少女の胸元に落ち着く。純白の衣装が汚れることも気にせずに、少女は木の葉を退けることもせずに、仰向けになって空を見上げていた。

外を歩いただけでも汗ばむような真夏を越えて、ようやく秋の色が見え始めていた。冬にはまだ遠く、心地良い風が吹いている。本当は少し考え事をしようと思つて散歩に出たはずだったのに、あまりにも心地良くて眠つてしまいそうだ。少女はゆっくり瞬きを繰り返してから、目を閉じた。

外界から隔離された後宮の地は、ひよつとすると他とは違う時間の流れの中にあるのかもしれない。物心ついた頃からこの場所に住んでいる少女には、外と比較する術もないが、たまにそんなことを思う。

己の瞼で視界を遮ると、一瞬、何も見えなくなる。太陽の光の効果で橙色一色に包まれるが、やがてそれも薄れる。精神を統一し、意識を未来へ向けて眠りに落ちると、時折現在より先の出来事を見ることがある。先見の技と呼ばれるこの能力は、巫女の修行で覚えさせられる技の一つであり、彼女はこれがあまり得意ではなかった。

無言で目を閉じて、先見の技に力を注いでいるその時である。不意に彼女の第六感が何者かの気配を感じ取った。気感と呼ばれるこれも、巫女の技の一つである。目を閉じていても、ある程度の範囲で近くに誰かが来ると、それが誰であるかを言い当てることができる。少女は、これが得意であつた。特に、この気配を間違えたことはない。

「……ゆたや？」

小声でその名を呼ぶと、「御意」と低い答えが返つて来た。少女は目を開く。日光が瞳に突き刺さり、目眩を引き起こす。彼女は目を細めると、光から逃げるように寝返りを打った。ころころと二回転すると、端に当たる。此処??四阿の屋根の上は彼女の昼寝専用の寢床であり、昔は寝ていて危うく落下しそうになつたこともあつ

たが、今となつては例え夢の中にあつても、感覚のみを頼りに寸前で踏みとどまれるまでになった。少女はうつ伏せになるとそこから身を乗り出して、下を覗きこむ。すると、慄然とした面持ちの男と目が合った。

「毎度毎度、口を酸っぱくしておりますけれど……突然いなくならないで下さいますか？」

眉間に深く皺が寄っている。何か挟むことが出来るんじゃないかしら、と少女は思った。

「殿堂を出る時は、私かロマーナに一言くださらないと困ります、かぐわの君」

少女??カグワは、首を竦めた。

この広大な後宮の地に住まう十の聖女には、それぞれ一の君、二の君、と後宮入りした順番に番号が振られている。カグワというこの少女は、三番目に選定を受けたので、通例であれば三の君と呼ばれるはずであつたが、本人がそれを厭うために、本名であるカグワと呼ばれることも少なくなかつた。折角名前があるのだから、お互いにそれで呼び合った方が親しくなれるのではないかというのが彼女の主張である。しかしながら、最終的には巫女の座を競う相手にしかなり得ない聖女同士が親しくなる必要性などそもそもないというのが、他の聖女たちの解釈であつた。

「でも、ゆたやは、いつも私を探し当てるじゃない」

カグワは欠伸まじりに言う。ユタヤという青年は眉をひそめ、四阿の屋根を片手で掴んでよじ登つた。片腕の力のみで軽々と屋根の上まで自分の体を持ち上げることの出来る彼は、超人のようにも見えるが、実のところ人間ではない。

「今日のところはこの四阿にいらつしやつたからすぐに探し当てられたものの……常々私が、貴女を探して後宮中を走り回っていることを知らぬわけではありませんまい」

青年は乱れた祖末な服の裾を直しながら、渋い顔をする。黄ばんだ白の布一枚で作られたその服は、装衣とも草衣とも呼ばれ、彼ら

仗身の平服であつた。

「それに、今日くらい大人しくしたらどうです？　国王陛下が亡くなつたというのに……」

ユタヤの語尾が消えていく。国王トウアイド・ギル四世逝去。？  
今朝方、唐突に後宮を駆け抜けた知らせは、静かな波乱を起こしつつあつた。

国王の死は、すなわち巫女の死も意味している。前の巫女がいなくなれば、次の巫女が選ばれるというのもまた慣例だ。聖女たちは突然の知らせに心構えもままならず、それぞれ慄いていた。ただ一人、三の君を除いては。

「そうね……亡くなられたのね」

三の君、カグワはゆっくりと起きあがると長い黒髪をかきあげる。巨木の影から空を見上げて、彼女は目を細めた。葉の合間から見えるのは、空気が澄んでいると肉眼でもわかるほどの晴天だ。

「……でも、こんないい天気なのよ。ひなたぼつこの一つでもしたいじゃない」

「ひなたぼつこならいつでも出来るでしょう……他の君々は、慌ただしくしておいでです」

「ま、何のために慌ただしくしてるの？」

「何って……選定の儀は、十日後に決定したそうですよ。それまでに巫力を高める修行の一つでもなさっているのでは？」

「巫力を高めるねえ……。私たち、後宮にきてから十二年、そのための修行ばかりやってきたわけじゃない？　それをこれからの十日に詰め込んだところでぐんと伸びるとは思えないけど？」

聖女たちが巫女の技を使いこなすために必要とする基礎能力のことを、巫力と呼ぶ。もともと彼女たちは、聖女に選ばれたからには人並み以上に巫力を持っていたということであり、これは修行によつてさらに高まると言われていた。そして、巫女を選ぶ際の基準も、これの高低が大いに関係していると言われている。とは言え、どれもこれも単なる流言でしかない。実際のところは誰も知らないのだ。



カグワは再び欠伸をこぼすと、眠い目を擦った。隣でユタヤはどこか不満気な顔をしている。

「それはそうでしょうけども、調整したりする必要はないのですか？」

「調整してどうにかなるようなものでもないでしょ。いくら練習したって、先見の夢なんかほとんど私、見たことないんだし」

「ですが、かぐわの君がたまに見る先見の夢は百発百中で当たります」

「まあ、そこそこね。出来るときは出来るし、出来ないときは出来ないものなのよ」

「だからこそ、調整が必要なのでは？」

「調整如何の問題じゃないと思うんだけど……だってほら、ネイディーンはきつと修行なんてしてないでしょう？」

「一の君は……そうですね、私がかぐわの君を探して走っていると、毎度大変ねと声をかけて下さいました」

後半の厭味は聞こえなかったふりをして、「やっぱりね」とカグワは頷いた。

一の君、ネイディーンは、国から聖女として選ばれた中でも随一の才能の持ち主であった。巫女の基本技の中に不得手な物などなく、佇まいも美しく、聡明で利発な女性である。

「ネイディーンは、調整とか、修行なんてしても無意味だってわかってるのよ」

「一の君の場合は、もうこれ以上高める必要がないというだけではない？」

「もしそうだとしたら、今更他の聖女が頑張ったって追いつけないじゃない」

「それでは選定の儀の意味がありません」

「最初から結果は見えてるってことだものね」

「そうですよ」

「でももし、巫力の高低で測るんだとしたら、ネイディーン以上の

聖女はいないし……巫力が関係ないんだとしたら、今更修行してもやっぱり意味がないわ」

「意味がないことはないでしょう」

「そんなことよりも、巫女になるにしろならないにしろ、あと十日で後宮を追い出されることになるんだもの。今のうちにひなたぼっこしておかなくっちゃ」

カグワは大きく伸びをすると、ころりと屋根の上に転がった。木漏れ日がきらきらと輝いて、まるで宝石のようだ。十二年慕ったこの光景にも、あと十日で別れを告げなくてはならないのだと思うと、切ない。王が死んだと言われるよりも、この慣れ親しんだ居心地の良い場所に二度と来られなくなるのだと思う方が、事は重大に思えた。

カグワの隣に屈んでいたユタヤはしばらく苦い顔をしていたが、カグワに動く気がないことを知ると、諦めたようにその場にあぐらをかいた。ちらりとその仏頂面を見上げれば、彼は無言で腰の刀を抜いた。研磨する気なのだろう

「いいですよ。かぐわの君がその気なら、私もお付き合致します。こうやってこの四阿の上で刀研ぎなんぞするのもこれが最後やもしれませんから」

「かもね。貴方いつつも此処にいる時、刀研いでるものね」

「かぐわ様が眠ってしまうので、他にやることはないんです」

「そうなの？ 暇だったら何処か他行つてもいいのに」

「いいえ。貴女の隣にいるのが私の役目ですから」

きっぱりと言い切つて、ユタヤは背中背負った太刀も屋根の上に下ろすと、刀を抜いて並べた。銀色の刃が二本、陽光を浴びてきらきらと輝いている。

ユタヤの役職は仗身と呼ばれ、カグワ直属の護衛であつた。聖女たちにはそれぞれ一人につき一人の仗身が付いており、そして必ずそれは獣人であることが決まっている。彼らは、一見人間と変わらぬ姿形をしているが、自在に獣の姿に変化することができた。その

自由な変化を可能にしているのは、それぞれの聖女の巫力である。仗身である獣人は首から巨大な数珠玉を下げており、これに聖女の巫力が込められていた。これの力によって、彼らは獣の性を封印しているのである。

カグワは、彼の首からぶらさがった質素な数珠玉に、なんとなく手を伸ばした。立ち上がった状態で彼の腰の高さまであるそれは、あぐらをかくと太ももの上に乗ってしまう。カグワは仰向けになつたまま、鶏卵よりは小さいそれを手の中どころと転がして、もてあそんだ。ユタヤは全く気にもせず、黙々と研磨材でまずは腰の直刀から磨き始める。無言のまま、風に木の葉のこすれ合う音だけが響きわたる。

このようなカグワとユタヤの関係性は、他の聖女たちのそれと比べると、異様であつた。仗身は、聖女の従者の中で最も位が低い。と言つのも、聖女の身に危険が生じた場合、仗身は命を張つて主を守らなくてはならない。いざという時には命を落とす、捨て駒のような存在なのである。本来獣人は、成長とともに人の心を無くして獣になってしまうので、幼いうちに処分されることが世間一般では慣例であつた。そのため、捨て駒にするには最適な存在だったのだろう。また、いかに獣の心を封印出来るかは聖女の腕にかかっているということもあり、巫力の鍛錬にもなつた。だが、その元が畜生類であるため、自分の仗身とはある程度の距離を取りたがる聖女がほとんどであつた。毛嫌いこそしないものの、例えば同じ部屋には置かない、会話は最低限に済ませる、一緒に食事は取らないなどの制限をしている。ところが、カグワとユタヤの場合は、始終隣に寄り添っているばかりか、仗身の身分であるユタヤが主に苦言を呈する始末である。今のようにカグワが一方的にユタヤにちよっかいを出しても、ユタヤが反応を寄越さないような状況など、他の聖女と仗身には到底あり得なかつた。

「……眠い」

「寝たら良いではないですか」

刀剣を研いでいる時のユタヤの返事は大抵素っ気ない。彼は、カグワの身を守るための剣なのだから丁寧に手入れするのが当然だと豪語するが、実際は細かい作業が好きなだけなのだろう。と、カグワは思っている。

「枕が欲しいな」

「寝殿に戻ればありますよ」

「面倒くさい」

「なら我慢して下さい」

「ゆたや、変化してよ」

「……今ですか？」

ユタヤの、研磨材を握る手が止まった。

獣人の獣の姿は各々によって異なるが、ユタヤの場合、胴体が巨大なほ乳類に似ているために、寝具に丁度良いのである。そのため、カグワは度々彼に封印を解くことをせがんだが、殿堂の奥にいる時以外は大概渋られた。

「今は、困ります」

「どうして？」

「どうしてって……此処は三の宮ではありませんよ。誰が通るともわからないのに」

「いいじゃない、誰が通ったって」

「……別に私は構いませんけどね。また東の君は、と貴女が言われるんです」

獣人が変化を解いた姿は、凡人には正視し難いほど野蠻で恐ろしいらしく、見るのも嫌がる者も少なくなかった。実際、過去に何度もカグワは、危機的状況でもないのにユタヤを獣の姿にさせていたことで不平を言われている。「東の君」というのは、彼女のことを粗野だと非難した呼び名であった。

「別にいいわよ。東の君って呼び名、私は嫌いじゃないし」

「かぐわ様がよろしくても、私が嫌です」

「私は構いませんけどね、って言いたくせに。嘘つき」

「ではもうそういうことでいいです。私の姿のことでかぐわの君の評判が落ちるのは、私個人の見解として、我慢ならないのです。これでよろしいか？」

「よろしいか、ってなんなのよ。押し付けがましい……」

そう言ってカグワは口を尖らせたものの、それ以上はせがまなかった。最初から、さほどの期待もしていなかった。ユタヤが小言を言うのは、何よりカグワのためを思っていることだとカグワ自身知っている。その彼が自らカグワの評判を落としたがらないのはいつものことであつた。??だが、カグワは彼の献身さをあまり好ましく思つてはいなかった。もつと自分は彼と対等にいたいのに、と思う。これも聖女の中では異様であつた。

再び、二人の間に沈黙が落ちた。秋の日差しがぼかばかと体を暖めてくれる。眠気が再びカグワを襲い、全身から力が抜けて行く。瞼が重たくなり、ゆっくりと眠りの世界へと落ちようとしていると、不意に、近付いてくる誰かの気配に気付いた。敵意のあるものではない。よく知つた気配だ。眠いので、無視することに決める。カグワが目目を閉じて寝たふりを決め込むのと、ユタヤがその気配の主に気が付くのはほぼ同時であつた。

ユタヤの刀を研磨する音が止む。彼はカグワの方を伺つて、彼女が目目を閉じているのを見ると眠っていると見なしたのか、あるいは寝ているふりをしていると気付きながらも放っておいてやろうと思つたのか、静かに首を横に振つた。四阿の下に近付いて来たその人は、彼のことを見上げて首を傾げる。

「カグワ様、そこにいるの？」

「寝ている」

ユタヤは小声で返事をした。四阿の屋根の下から彼を見上げる女性性は、風になびく長い赤髪を手で押さえながら、戸惑うような表情を浮かべた。

「起こしてよ」

「今寝入ったところなんだ」

「どうせ私が来たから、面倒なことだと思って狸寝入りしてるんですよ。私、わかるんだから。カグワ様、起きて下さいな！ カグワ様！」

女性の、甲高い声が響く。脳の中まで共鳴しそうな大声に、カグワは顔をしかめた。このまま狸寝入りを続けていると、叩き起こされかねない。仕方が無いので、のそのそと亀のように這いつくばって移動して、屋根の下に顔を覗かせた。

「なによ、もう……」

「ほら、やっぱり起きてらした！」

腰に両手を当てて見上げた笑顔は、勝ち誇ったように明るい。ロマーナというカグワ付きの女官は、この後宮内でも一二を争うほど底抜けに明るく、そしてはつらつとしていた。そうでなければ、後宮―自由奔放な三の君の女官長など務まらないのかもしれない。

「ユタヤはカグワ様を甘やかし過ぎなのよ。狸寝入りだつてわかってたくせに」

「本当に寝てたって、そんな声で叫ばれたら目が醒めるわよ」

主の辟易した様子にも、ロマーナは動じない。彼女は「そんなことよりも」と言つて軽く手のひらを打った。

「さつき、全聖女様に対して招集がかけられましたわ。なんでも、十日後の選定の儀の前に一度全員で顔を合わせておこうということらしくて」

「なあに、それ。皆で顔合わせして何を話すつて言うのよ」

「それは私にはわかりかねますけれど……とにかく、そんな軽装では他の聖女様方に示しがつきません。一度殿堂に戻つてお召し物を着替えましょう」

「いいわよ、別に……こんな時に全員で顔合わせしたつて気まずいだけじゃない。発起人はどうせダイアンかアネットでしょう？ 周りがどう動いてるのか気になってしょうがないのよ」

カグワは自分の腕を枕にし、仰向けの体勢に戻った。

ダイアン、アネットはそれぞれ五の君、六の君の称号を持つ聖女

だ。気が合うのか、珍しく聖女同士で仲良くしているように見受けられるが、互いに互いのいないところで相手の陰口を叩いている姿も目撃されており、本当に親しいのかどうかは定かではない。

彼女たちの思惑は知らないが、一体誰がどのようにして巫女に選ばれるのか、聖女たち自身にも先が見えず、疑心暗鬼を生じている現段階で、聖女全員が顔合わせをすることは却って混乱を招くと思われる。例えばカグワに先見の力がなくとも、面倒臭い座談会になることは目に見えている。わざわざ精神を削るため、そんな会合に参加する気はさらさら起きなかった。

カグワの思考を読み取ったのか、ロマーナは無理に連れて行くことはせず、だが当惑している。

「まあ、カグワ様の思案は尤もですけど……でも、この先どうなるのか、全くわかっておられないわけでしょう？ 皆様のご意向も伺っておいた方が、この先のためかと……」

「この先どうなるのかわかってないのは、みんな同じよ。勝手な憶測ばかりで会議したって仕方ないじゃない？」

「それはそうですが」

「前に一度選定の儀を見たことがあるっていう人がいるなら、その人に聞けばいいけれど、そもそも後宮内にはそんな人、一人もいないじゃない」

後宮の中は、新しい巫女が決まる度に、総入れ替えされる決まりとなっている。下働きの女官から、聖女まで、誰一人同じ人間は残らない。そのため、今の後宮での常識がかつて常識であった確証はなく、それを比較することの出来る人物もいなかった。もちろん、選定の儀についてもそうである。

すると、それまで二人の会話を黙って聞いていただけのユタヤが口を開いた。

「一人……おられるのではないですか？」

彼は刀を研ぐ手を止め、研磨材を懷にしまい込む。そして、抜き身の刀を鞘に納めてカグワを一瞥した。

「最西端の変わり者……彼は四十年以上、後宮の最西端に居座り続けているというではないですか。自称、ですけれども」

「ああ、ケニーの爺やのことね」

なるほどカグワが顔の前で両手のひらを合わせると、ユタヤは静かに頷いた。

一から十までの聖女のそれぞれに宮殿が与えられている後宮の敷地は、とてつもなく広大である。端から端まで移動するためには馬車を使わなくてはならず、歩いて移動しようとするとい日あっても足らなかった。その敷地の外れ、最西端の場所に、一つの矮屋がある。同じ後宮内にある他のどの建物と比べてみても、尤も粗末な作りをしているその小屋の中には、一人の老爺が住んでいた。彼の名前をケニーと言うが、その名前を知っている者は少ない。どこなく不気味な雰囲気を持つ彼の住居に、大抵の人は近付きたがらなかったし、「最西端の変わり者」という異名の方が有名であったためだ。

そして、この後宮内ではやはり変わり者であるカグワは、ケニーと親しくしていた。親しいとは言っても、気が向いた時になんとか彼の小屋を訪れて他愛も無い雑談をするくらいで、彼女にも彼の正体は見えていない。ただ、彼のことを不可思議な老爺だと思うことはあっても、不気味だと思うことはなかった。それが、彼女が変わり者と呼ばれる所以なのだろう。

「そうか……爺やなら、何か知ってるかもしれないわ」

カグワは口の中で呟くと、起きあがった。

「僕はここにもう四十年以上も住んでいる」というのは、何かとケニーの零す口癖であったが、それが真実であるという証拠はない。偽りであるという証拠も、また然りである。確かなのは、彼がこの後宮の中では一際面妖であること、そして他の誰より物知りであるということだけであった。

よしんば、彼が四十年以上此処にいるというのが嘘であったとしても、何も知らない聖女たちが集って憶測を働かせるよりは、彼に



話を聞いた方が良く。そう判断したカグワは、四阿を支える柱を伝つて、地面に降り立った。彼女を追つて、ユタヤも身軽に屋根より飛び降りる。彼は、二本の刀をそれぞれ腰と背に装い直すと、カグワの顔を覗いた。

「これから、最西端まで行かれるおつもりですか？」

「そのつもり。思い立った時に行かなきゃ」

「なら馬を用意しましょう」

「いいわ。歩いていく」

「これからですか？ 着く頃には夕方になってしましますよ」

「平気。……だって、爺やのところには、ペグがいるでしょう？」

ペグというのは、ケニーの飼っている巨犬のことである。ケニー以外には懐かないというが、不思議なことにカグワには大人しい。だが、カグワの乗って来た馬には容赦なく襲いかかり、これまでも何度が彼女の馬が被害にあっていた。

「……ペグでもなんでも構いませんけども、結局、聖女様方の会合には欠席するおつもりですね？」

刺々しく口を挟んだのは、ロマーナだ。彼女の険しい表情に失笑しながら、カグワはおずおずと頷いた。それを受けて、ロマーナは深々と溜め息を吐く。

「……呆れた。正統なる聖女の会合を蹴ってまで、ならず者の老爺に会いに行くなんて……。まかり間違つてカグワ様が巫女にでもなられた暁には、国が傾くんじやないかしら」

「そうかもね」

「……認めないで否定して下さらないと困ります」

後宮に入ってから十二年、ロマーナとの付き合いも十二年だ。出会った頃はまだ、ロマーナが十四歳、カグワに至つては五歳にも満たなかったが、今では彼女の苦言にも慣れたものである。そしてロマーナはロマーナで、カグワに振り回されることにはすっかり慣れてしまったようで、

「仕方ありません。私が適当にはぐらかしておきますから、誰かに

見つかる前に早く行ってしまうてくださいな」

「さすが。話が早いわね」

「どうせ、カグワ様は私の忠言なんぞ聞いて下さいませんもの。反抗するだけ無駄ですわ」

などと、身も蓋もないことを言う。カグワの後ろに控えたユタヤもまた、無言でその通りだと頷いていた。ロマーナは、背の高い彼をちらと見上げると、首を振って促す。

「馬が駄目ならユタヤ、貴方が足になりなさい」

それはつまり、獣の姿に変化しろということである。ユタヤは表情の薄い顔に戸惑いを浮かべて、口籠った。

「三の宮の外ではあまり獣として動かぬ方がいいのでは……」

「今はみんな、会合のためにそれぞれの宮で準備なさってるはずよ。誰もこんな外れの方なんて見てないわ」

ロマーナの言い分に、カグワも「そうよそうよ」と賛同する。ロマーナはそんな自らの主の姿を見て呆れた笑いを零すと、「とにかく」と念を押した。

「ささつと行つてささつと帰つて来てくださいませいね。カグワ様が奔放なのは昔からですし、まかり間違つてカグワ様付きの女官になった時からもう諦めておりますけれど」

「……本当に遠慮ないわね、ロマーナは」

「それでも貴女のことを案じておりますのよ。??ユタヤ、選定の儀を前にした聖女様に、くれぐれも危険のないように」

御意、と言つてユタヤが頭を下げた。

木漏れ日が地面にまだらの模様を描いている。もう少し時間が経てば、日が傾き始めるだろう。

## 2、最西端の変わり者

胴は巨大な熊のような形で全身を包む長い毛は黒く、四つ足に見える爪は人の顔ほどの長さもあり、人間の指と同じ役割をしている。頭は白骨に酷似しており、二本の雄牛のような角が生える。目は深く窪んだ穴のように見え、頭髮は白く長くなびいた。体は大きく、後ろ足で立ち上がると、大の男三人分ほどの高さがあった。二足歩行も出来るが、速さを重視する場合は四足で走る。??人形の変化を解いたユタヤは、その背に主を乗せて、馬より速く駆けていた。馬なら半日かかる道のりも、獣のユタヤの足ならば数刻かからない。そしてその速度で走りながらも、彼は抜群の安定感で決して主を背中から落とすような粗相はしなかった。

「久しぶりね、こうやってゆたやの背中に乗るのも」

全身で風を受けながら、カグワはのんびりと呟いた。すると、下の獣から洪い声が返ってくる。

「当然です。そうしょっちゅうあつては困ります」

カグワは首を竦めた。獣人であるユタヤ自身ですらあまり好ましく思っていないらしいこの獣の姿が、カグワは別段嫌いではなかった。他の聖女達は、いや聖女だけではなく多くの人間たちは、獣の姿に怯え、醜いと忌み嫌う。しかしカグワにはその感覚を理解することができない。見慣れてしまったというわけではない。カグワは初めて彼の獣の姿を見たその時から、何故か一種の懐かしさや、仲間意識のようなものを抱いていた。

（化け物というのなら……だってむしろ、私の方が）

カグワはきゅっと、拳を握り締めた。

国王が崩御し、新国王が起つて新しい巫女が選ばれると、巫女の予備軍として十人の聖女が選ばれる。そしてその聖女に選ばれる基準とは、巫力の強さだと言われていた。すなわちこの国で、最も巫力の強い十人の少女が聖女として選ばれる。その十人の中に選ばれ

たからには、カグワにもそれだけの素質があつたというわけで、人々はそれを巫力と呼んで神聖なものと崇めるけれどもカグワには化け物の力のように思えてならなかった。巫力には様々な種類があり、例えば未来を予知する先見の技であつたり、例えば他人の考えを知る読心の技であつたり、他人を操る誘導の技であつたりする。それら全てを使いこなすことができるのなら、それは化け物と呼んで間違いあるまい。それなのに、ただ獣の姿に変化することのできるだけの獣人を、化け物などと呼んでもいいのだろうか。

力あるものは力ゆえに孤独だ、とカグワは思っていた。聖女とてそうだ。聖女の周りの世話役たちは、聖女の言うことなら何でも聞くが、それだけでしかない。それではただの道具と同じだ。たった一人でいつか巫女になれるかもしれない未来を夢見て、延々と修行を続ける日々は、孤高の戦いであつた。故に、聖女は孤独だ。

そして、それ以上に、獣人の孤独ははかりしれない。力を持つゆえに崇められて孤立する聖女と異なり、獣人は力ゆえにうとまれ、孤立する。それを聖女ごときの孤独と並べても良いのかどうかカグワには俄に判断し難いが、とにかく、初めてユタヤを見た時に、カグワは彼の孤独な眼差しに己を重ねて手を差し伸べずにはおれなかった。

「私はただ……傷を舐め合いたかつただけなのかもしれないわ」

ユタヤは己を救ってくれたカグワに恩義を感じ、一生の忠義を誓ったけれども、カグワは彼を救ったわけではなかった。カグワは、自分を救うために彼の命を利用したのだ。

「はい、なにか？」

カグワの言葉を聞き取れなかったユタヤが聞き返す。カグワは慌てて首を横に振った。

「なんでもないわ……あ、西の壁が見えてきた」

カグワは進む先、西の端を示してそう誤摩化した。

広大な聖女たちの住まう後宮は、広大でありながらしかし外の世界から遮断されていた。土地をぐるりと囲んでとても越えることの

できない巨大な壁が立ちはだかり、外に出ることはできない。それは、外の侵入から聖女たちを守るための物なのかもしれないし、聖女たちが外へ逃げ出すことのないように防ぐものなのかもしれないし、あるいはその両方かもしれない。そして変わり者と呼ばれ、聖女の規則など守らぬカグワでさえ、この壁を越えたことはなかった。

高くそびえ立つ灰色の壁の麓に、小さな小屋が見えた。最西端の変わり者、ケニーという老爺の住まう小屋だ。後宮の中は、新国王の即位に伴う後宮の総入れ替え制度により、皆が皆同じ時期に後宮に住み始めるため、後宮の中にいる者同士、互いに知らないことはない狭い世界だと言えよう。その中で、ケニーだけは謎の多い人物だった。誰も、彼の正体を知らない。もちろん、カグワとて知らぬ。

「……かぐわの君」

ユタヤが最西端の小屋をまっすぐ目指して走りながら、小さく呟いた。

「小屋の前に、ケニーの爺が立っております。……あやつ、かぐわ様が来られることを、予測しておりましたな」

「……まあ」

獣の姿になったユタヤは、人智を越える抜群の五感を持つ。故に人間の目では見えない遠い景色も、その絶対的な視力でもって捉えた。カグワにはぼつんと小屋の影が見えるだけでその先に立つ人の姿など見えないが、ユタヤが言うからにはそうなのだろう。

「本当に不思議な人ね……もしかしたら聖女たちよりも先見の技に優れているんじゃないかしら」

「まさか」

「もしそうなら、次期巫女はケニーの爺になるわね」

「ご冗談を」

即座に返される真面目な答えに思わず笑ってしまってから、カグワはまっすぐ最西端の矮屋を見つめた。姿は見えぬものの、確かに

その方角から人の視線を感じた。カグワはあと十日で後宮を出なくてはならない。かの謎の老爺から話を聞けるのもこれが最後かもしれないわけで、なにひとつ聞き逃すことのないようにと、カグワは気を引き締めた。

ユタヤの言った通り、小屋の入り口に腕組みをして立っていたケニーは、二人が来るなり小屋の中へと招き入れた。小屋の外にはペグがうずくまっており、変化をといて装衣を纏ったユタヤを見上げるなり威嚇したが、その後ろからカグワが顔を覗かせると途端に大人しくなった。ユタヤが「犬までもそそのかすとは」と軽口を叩いたので、「一番最初にそそのかされたのは、ゆたやよね」と軽口で答えた。ユタヤは反論しなかった。自分でもそう認めているらしい。

一階建て、部屋の二つしかない小さな小屋の中、暖炉の前に通されると、カグワはケニーに促されるまま火の付いていない暖炉脇の椅子に腰掛けた。ケニーは一人暮らしゆえに椅子がそうたくさんはない。老爺から椅子を奪うわけにはいかないとユタヤがカグワの座った椅子の脇にあぐらをかいて座り込むと、老爺は気にした素振りも見せずにカグワと向き合って揺り椅子に腰掛けた。窓の外からは、少しだけ西に傾き始めた太陽の光が差し込んでくる。ケニーは来訪者を歓迎するでもなく、「喉が乾いたら戸棚にあるコップに、その冷めた紅茶を注いで飲んでくれ」と言った。誰もが聖女に尽くすこの後宮の中で、あまりにも不躰な態度であるが、カグワは気にしない。この老爺がそういう人間なのだとは知っているユタヤも言及しなかった。ただ、黙ってすくつと立ち上がると、コップにカグワの分と老爺の分の紅茶を注いで小さなテーブルに乗せた。「相変わらず、恐ろしく気の利く仗身じゃ」とケニーが笑った。

「……で、今日は何をしにこのような西の果てまでおいでになったのか」

ユタヤの注いだ冷めた紅茶をすすりながら、先に問うたのはケニー

「の方だった。カグワはユタヤが隣に腰を下ろしたのを確認してから、にこと口の端を持ち上げる。」

「やあね、知ってるくせに」

「知るものか。今代一の変わり者の聖女の君の考えなど、儂には想像もつかぬ」

「最西端の変わり者に言われたらおしまいね。でも大体予測はつくでしょう？」

「儂には、とんと」

「予想していたから小屋の入り口に立って待っていたんじゃないの？」

「いんや、なんとも後宮の中央の方が騒がしいから何ごとかと眺めていただけのこと。すると三の君が己の仗身に跨がり現れるものだから、ますます騒がしい」

あくまでとぼけるケニーであるが、今このエウリアの国で何が起こっているのか知らぬわけでもあるまい。

「……国王陛下が崩御されたそうじゃない」

「ふむ」

「次期陛下の即位に合わせて、十日の後には新しい巫女が選定されるそうよ」

「そうらしいのう。風の噂には聞いておるが」

ケニーは澄ました顔で頷いた。やっぱり知っているじゃないかとカグワは小さくむくれる。

「だったら、後宮が騒がしい理由もわかるでしょう？ 私がここにきた理由も」

「はて……。儂はここに住み着いてもう数えきれぬほどの歳月を越えてきたが、国王の崩御だからという理由でここを訪れた聖女の君など他におらんなのでな」

儂に別れでも告げにきたか、と笑う老爺には前歯がない。ぽつかりと空いたその隙間から、暗い口の奥が覗いてかかかと軽快な笑い声を繰り出した。その間抜けな風体を前にして、カグワは脱力する。

まあ確かに考えてもみれば、国王が倒れたからと言ってケニーの元を訪れたところで何が変わるわけでもあるまい。他の聖女たちと顔合わせなどするよりずっと効果的だと思って飛び出してきたが、実際にはそう大差ないなと思ひ直した。

「まあ……そうね。そんなものかもね。ケニーの爺やと挨拶代わりに、くだらない雑談でもしようかと思つて来たのよ」

観念してカグワがそう告げると、ケニーは「そうか」と満足そうに微笑んだ。その暢気な笑顔に、ますます力が抜けていく。国王が崩御されたと後宮中が大騒ぎしていることを馬鹿馬鹿しいとさえ思つていたカグワであるが、ケニーと比べればまだまだ修行が足りない。人が必ずいつかは死ぬように、国王とていつかは崩御する。そんな当たり前のことに振り回される自分に嫌気が差した。

「……後宮は、巫女のためにあるものだから、仕方のないことなのかもしれないけど」

小さな声で言い訳して、カグワはコップを手を取った。なんとも飾り気のないその質素なベージュ色のコップを撫でながら、ちらと対面に座っている老爺を見やる。

「外界はどうなの？ やっぱり……後宮ほどは騒いでいないのかしら」

外界、すなわち後宮の外？？後宮の中の人間は下界とも呼ぶが、カグワはあまりこの呼称が好きではない？？に、ほとんど踏み出したことのないカグワには、外の世界に住まう人々の考え方など予想も付かなかった。彼らは、己の国の王が倒れことを、どのように受け止めているのだろうか。

「ううん……確かに後宮ほどの騒ぎとはならなくとも、それなりに賑やかしようじゃ。新王の即位となれば、城下町は連日祭り続きだからのう」

「へえ……そういうものなんだ」

この外界から遮断された後宮という狭い世界の中で、何故かケニーはいつでも外の世界のことを朗々と語った。その情報をどこから



仕入れているのかは決して教えてくれなかったし、ひょっとしたら全てケニーの虚言という可能性もあったが、カグワにはその真偽を調べる術がない。ゆえに残されたのは、二択だ。信じるか、信じないか??カグワはこの変わり者の言葉を信じていた。故に彼女自身も、変わり者と呼ばれる。

「しかし、最も騒いでおるのは、宮廷内じゃな……国王がお亡くなりになった未明より、政殿が喧しい」

「政殿……やっぱり、国王が変わるとなると、政治の現場もがらりと変容するものなのかしら」

「いや……と、いうよりも、この国王の代替わりを利用しようとする勢力があつてな……三の君は、現在このエウリア君主国の国務参謀を誰が務めているかは存じておられるか」

「ええ、名前だけは……ワイズ・レヴィン国務参謀よね」

後宮にはほぼ外界の情報が流れてこない。が、しかし、皇室の仕組みや、政治の仕組みは別だ。将来巫女になるかもしれない聖女たちが、皇室や政治に昏いのでは困る。そのため、教養として誰が政権を握っているのか、誰がどの役職に就いているのか、名前だけは覚えさせられるのだ。

とは言え、ただ何十人もいる役職とその名前を暗記するのは辛い。カグワも全てを暗唱することはできない。それでもさりと国務参謀の名前を吐き出すことができたのは、それだけ彼の名が知れているためだ。ワイズ・レヴィン国務参謀??参謀でありながら、ほとんどこの国の舵を握っているのはこの男であると、この外界から孤立した後宮の中でさえ、彼の名前は知れていた。

「そう、レヴィン国務参謀だ……あの冷徹な参謀は、頭が切れる。この国王崩御を好機と見た。国王の葬儀に、各国の要人を招待すると言いだしたのじゃ」

「各国……北国、東国、南国の全てから?」

「そう。全ての国の要人を、西国エウリアの国王の葬儀に参列させると言った」

「それは……なぜ？」

「一つは、他国の要人にエウリアの国王の死を悼ませることによってエウリアの国の地位を認識させるためだろう。そして、もう一つは……北国が要人として誰を超越するのか、見ておきたいのじゃ」

「北国……ラウグリア帝国が？」

「そう。北ラウグリア帝国じゃ」

この世界には、東西南北四つの国が存在している。今、カグワたちが住まうのが、此处、西国エウリア君主国だ。そして、その北に位置する国が、北国ラウグリア帝国だった。エウリアと同じく皇室を持ち、王政を布く国であるが、ここ最近では東国と戦ばかりしていると聞いた。恐らく雪の降らない豊かな土地が欲しくて、東国を占領するのが目的なのだろうと語ってくれたのは??それもケニーであった。

「北ラウグリア帝国は形こそ王政を布いているが、その実態はほぼ軍政だと言う」

「軍政……軍隊が政治を仕切っている？」

「うむ。北国が東国に豊かな土地を求めて戦を仕掛けていたことは知っておるな？」

「ええ、もう十年も戦をしていると」

「それが最近では、すっかり東の国の北側の領地は北ラウグリア帝国の領土となってしまうらしい」

「えっ……？ 北国が勝利したの？」

「そういうことになるのう。東を手に入れた北国が、次に思うこと……それは、なんだと思う？」

問われてカグワは少しだけ考えて俯き、すぐに口を開いた。

「……西の国も、占領下にしたい」

「その通り」

頷いたケニーは、ゆらゆらと自分の座っている揺り椅子を揺らす。空になったコップを机の上に戻して目を細め、不気味に皺の寄った目尻にますます深い皺を作る。

「レヴィン國務参謀は、北の出方を見たいのじゃ。要人を招待されて、しらばくれて皇室を寄越すのか、軍人を寄越すのか、あるいは、誰も寄越さず真っ向から対抗してきよるのか……」

「……なるほどね」

「しかし、参謀がいくら要人を招待しようと言っても、なかなか内大臣どもが領かんのが現状らしい」

「え、どうして？」

「各国の要人を呼ぶということは、東国の要人も呼ばなくてはならぬということじゃろう？ 内大臣らは、東の国を蔑んでおるからう。要人を招待などして東と西が同等であると見られるのが我慢なんだ」

「……なるほど」

カグワはしみじみと頷いた。

内大臣だけではない、この西国エウリアには、東国ヤンム帝国を後進国として貶める風潮があった。実際に東国ヤンムは、東西南北四力国の中で最も文明が遅れている。故にそれを野蛮として、中には東国の住民を東蛮人と呼ぶ者もいるくらいだ。

「不思議ね……同じ人間なのに。隣に並ぶのも嫌だと言うのかしら」

カグワがぼつりと呟くと、ケニーは灰色に淀んだ瞳を大きく見開く。

「そっといえば……三の君も東の出自であつたか」

「ええ、そうよ。私は幼い頃に親に連れられて東西の国境を越えた、難民の一人だから」

ケニーの目には蔑みの色などない。カグワはにこりと笑って頷いた。

カグワの生まれは東国ヤンムだ。しかし、親に連れられ国境を越えた西国の東の端、難民の村の中にて幼少期を過ごした。そして、そのまだ片手で数えられる年の頃に、突如現れた王宮からの使いに連れられ、この後宮へと来たのだ。カグワには未だに聖女に選ばれ

る者の基準を計ることができないのだが、少なくとも生まれは問わないらしい。どの国の生まれであろうとも、聖女を選定する時期にこの西国の領土の中にいれば、その対象となるということなのだろう。

ほぼ全ての聖女たちが西の国の生まれである中で、東の出自であるカグワは一人異端であった。しかしそれは、決して出自によるものではなく、カグワの天性の気性ゆえであるはずなのに、後宮の者たちはこの異端な聖女のことを「東の君」と呼んだりする。この際の「東」には、「東蛮人」と同じく蔑みの意味が込められているとカグワとて知っていたが、それでもカグワはこの呼称が嫌いではなかった。カグワは己が東の出自であることに、何の後ろめたさも感じない。

「ゆたやも東の出自よ。ねえ？」

カグワが同意を求めると、それまで主の言葉に一切口を挟まんと貝のように黙っていた仗身が、こくりと頷いた。

「私もエウリアの東の果て、丁度東西の国境当たりの森に倒れていたところを、かぐわ様に拾われた身でありますゆえ」

??それは忘れもしない、今より十年以上も昔の話だ。

聖女として後宮入りをしてまだ間もないカグワには、仗身がいなかった。正確には、仗身がいなくなった。死んでしまったのだ。たった二年かそこの付き合いだった。まだカグワと同じ年の頃、幼い仗身の見習いは、たった五つの年の頃に主をかばって死んだ。カグワは正直言うと、その時のことをよく覚えていない。何故自分がこの危険から隔離された後宮内で命の危機に晒されていたのか、そして何故たった二年そこの付き合いでしかない仗身が、そしてただ己の意思もはっきりしないたった五つの幼子が、主であるという理由だけでカグワのことを己の身を呈してまで守ったのか。ただ、その瞬間だけは泣きたくなるほど鮮明に、覚えていた。??自分を庇って死んでいくその仗身の姿を、忘れたくとも忘れられない。

そして仗身を亡くしたカグワは、新たな仗身を手に入れるために、

東国へ出かけることを許された。本来外界へ出ることを許されない聖女にこの異例な措置が下されたのは、それだけ事態が緊急であったためだと言えよう。仗身となりうる獣人の見分けは、普通の人間には付かない。何故なら幼い獣人は普通の人の子と全く同じ姿をしているためだ。聖女であれば、巫力でもって獣人と普通の人の子を見分けることが可能であった。故に、聖女自身が外に出て、獣人を探さなくてはならなかった。そして、四力国の中で最も獣人の多い東の国へとカグワは旅立つことになったのだ。

??その旅の途中で、彼と出会った。

何故、国境を越える前に馬車を下りたのか、理由は今でも定かではない。今にして思えば、己の中の巫力と呼ばれる第六感が働いて、自分を彼と引き合わせたのかもしれない。森の中に倒れていた彼は、とても孤独で、優しい目をしていた。その目に惹かれて、カグワは彼に手を差し伸べたのだ。??己の仗身になつてくれ、と。

何とはなしにカグワが隣にあぐらをかいているユタヤを見つめると、すぐにその視線に気付いたユタヤが顔をあげた。そして、「なにか?」と言外に尋ねて首を傾げる。あれから十数年が経ち、二人の間には言葉などなくとも意思の疎通ができるほど、強力な絆が育まれた。「なにも」とカグワは首を横に振った。

そんな二人の無言のやりとりを興味深く見守っていたケニーが、老人特有の掠れた声色で呟く。

「ユタヤ、カグワと……東の発音は難しいのう。二人は上手に発音するが、儂にはなかなか真似できぬ」

「ゆたや、かぐわ、よ」

カグワはすらすらと東の発音をしてみせた。

「かぐわは、花や果物のように香りの良いこと、ゆたやは、作物の実りが良いこと。東の古語で、そういう意味よ」

言って、満足気に微笑む。そんなカグワとユタヤは、互いの名前を元の発音で呼び合っていた。これは、本来あるべきその音を忘れないようにというカグワのこだわりだ。しかし、東を好かぬ者にと

つてはこの東の発音自体も好ましくなく、二人が互いをそう呼び合うことを下品だと言った。??そもそも、仗身が主の名前を呼ぶこと自体、異常なのだという。

「珍しいことよのう。仗身が、主の名を呼ぶとは……中には仗身だけでなく、己の付き人共にさえ名前を呼ばれることを厭う聖女もあるというのに」

ケニーの言葉に、カグワはそうねと頷いた。聖女たちにとって名前とはとても高貴なものだ。同じ位である他の聖女に呼ばれるならまだしも、自分より下位の者に名前を呼ばれることなど言語道断という者も少なくない。故に、「一の君」「二の君」と、称号が存在するのだ。大抵の後宮仕えの官吏達は、この称号で聖女たちを呼び分ける。

「でも……折角私には名前があるんだから、呼んでほしいじゃない？」

親の付けてくれた名前だ。初めてこの世に生を受けた瞬間に自分を自分たらしめてくれた名前だ。幼い頃に親元から引き離されて、聖女様、三の君などと呼ばれて育ったカグワにとって、この名前が自分を自分たらしめてくれる唯一の存在だった。今でこそ後宮に住まう全ての人間と自分との関係を維持できるが、ただの称号だけを与えられて宮に入ったばかりの頃は、自分が自分ではなくなってしまうのではないかという恐怖があった。

そんなカグワの考えが通じたのかどうか、「ほう」と面白そうにこぼしたケニーは、肘置きに肘をたてて頬杖をつき、ゆらりゆらりとゆっくり揺り椅子を前後させた。

「三の君は実に趣深いことを言う」

「……そうかしら」

「名前とは呪縛である、という考え方があってな」

「え……？」

思いも寄らなかった切り返しに、カグワはきよんとする。ケニーはいよいよ楽しそうに目を細めた。

「まだ神々が地上におられた、昔のことじゃ。二人の神がおった。一人の神は己の名前を、下等な人間共にも気軽に唱えてよいとおっしゃった。一人の神は己の名前を下等な人間に教えることさえ渋られた。すると、天変地異の起きたある夜のことじゃ。名前を唱えさせた神の元には、大勢の人間共が集い、名前を教えもしなかった神の元には誰一人として人間が訪れなかった。大勢の人間に囲まれた神は、人間共と身を寄せ合い天変地異から身を守ることができ、一人取り残された神は誰に助けられることもなく地の底へと落ちていったそうだ。……ゆえに、名前は人を縛る呪いである」と

「呪縛……」

「しかしその呪縛をどう利用するかはその者しだいだがね。??三の君の生国、東ヤンム帝国に伝わる神話じゃよ」

カグワは思わず己の胸元を押さえ、きゅっと拳を握った。

ケニーは博識だ。後宮の中だけでなく、西国エウリアのことだけでなく、世界中のことを知っている。それに対して、カグワは何も知らない。

隣を一瞥すると、無言で控えるユタヤが、何を言うでもなく外を見つめていた。窓の外にはそろそろ日が西へと傾き、空の赤が見え始めている。そろそろ帰らなくてはカグワを夕餉の時間に間に合わせられないとでも考えているのだろう。彼の世界の中心にはいつでもカグワがいる。

名前とは呪縛であると、ケニーは言った。だとするならば、カグワとユタヤを結ぶのは強い絆ではなく??呪縛だろうか。

国境を隔てた遠い北には戦をしかけてくるかもしれぬ敵がいて、東にはその貧しさゆえに難民の溢れる土地がある。広い世界の中で出会ったことそのものが、呪縛だったのかもしれないとカグワは思う。そして己が聖女として数奇な運命を辿ったことも、また、呪縛の一つだ、と。

### 3、不吉

国王が崩御し、新王の即位にあたって巫女の選定が十日後と聞いたその日から、めまぐるしく時は過ぎていった。今までのようにただ情性的に修行を続けていた日々の中で感じる十日とは、まるで違う。選定の儀式の練習や、後宮を引き払うための準備、そしていつもよりも増強された巫力の修行が一日の中に詰め込まれて、あっという間に十日が過ぎた。住み慣れたこの後宮に別れを惜しむ間もない。己が巫女になるのかそれともただ人になってしまうのか、その二択の突きつけられるあまりにも重大な儀式は、あっというまに目前へと控えていた。

??そして、その日はすぐにやってきた。

ついに儀式当日とあって、後宮の中は前例を見ぬ騒がしさである。朝から襖のために叩き起こされ、冷水を浴びた後に儀式の衣装を着せられて、聖女たちは一カ所へと集められ、選定の儀式に関する詳細を聞かされた。それはとても不思議な空間で、後宮の中に住んで長い聖女たちの誰もが訪れたことのない、円形の間である。詳細を聞かされたと言っても、その詳細を語る相手の姿は見え、頭の中へと直接語りかけてくる「感応の技」を利用しているのだった。ゆえに聖女たちには、誰がこの儀式を取り仕切っているのかわからない。が、総入れ替えの制度により現在この後宮の中にいるほとんどの者たちは儀式を経験すること自体が初めてなのだから、後宮内の人物ではないのだろうとカグワは予想した。

「一刻の後に、儀式が始まる」と締めくくられて、長い説教じみた儀式の説明はようやく終わった。円形の間から外に出ると、そこは見慣れた後宮の内殿の脇、渡り廊へと続いていた。嗚呼、ここに出るのか、と声に出さずに思う。この渡り廊は後宮の庭と繋がって



おり、カグワは何度もここを歩いたことがあるのだが、一体この廊下の先がどこへ続いているのかは、知らなかった。後宮を出なくてはならないというその日に、ようやく知った。これはあの不思議な円形の間へと続く道なのだ。

「あとたつた一刻で運命を定められるなんて……心の準備が間に合わないわ」

ぼつりと呟いたのは、五の君、ダイアンだ。カグワの後ろを歩いて渡り廊を進んでいる。そしてその隣に並んでいるのが、六の君、アネットである。

「そうね……。むしろ、一刻なんて間に時間を置くくらいなら、あの場でそのまま儀式をしてくださったら良かったのに。この一刻の間に緊張してしまうわ」

アネットが言った。円形の間に聞かされた感応による説明によれば、「一刻の後、再びこの円形の間に集うように。儀式はここに行う」という。その一刻の間に儀式の準備を行うためのなかどうか、聖女たちにはそれすら聞かされていないが、一刻という長くも短くもある時間を、外で悶々と過ごさなくてはならないのは確かに精神を削る作業であった。

「だってもし、これで、巫女に選ばれなかったら、選ばれた巫女の世話役として一生仕えなくてはならないのよ」

ダイアンが嘆くように言う。これも先ほど円形の間で聞かされたことだ。聖女たちの最も気になっていた、「巫女に選ばれなかった聖女はどうなるのか」という問いに対して、感応の声は淡々と告げた。「選ばれなかった他の聖女は、選ばれし巫女に一生を捧ぐ。この国を神の使いとして守る巫女を、一生支えていくことが役目となる」と。

「いやだわ、世話役なんて……！ どうして今更誰かに仕えなくてはならないの」

「本当に……。これでもし巫女がアネット以外だったらどうしましょう。アネット、貴女になら仕えてもいいけれど、他にはとてもと

ても」

「まあ、私もよ、ダイアン。もしも互いが巫女になったその時は、お互いを優遇しましょう」

どこまで本気かわからない、薄い契約を交わす二人の声が聞こえる。またいつものことか、とカグワは息を吐いた。アネットとダイアンはいつでもそうだ。本当は心の中では自分が一番でないと気が済まないくせに、言葉の上では互いを配慮して、そして裏では互いのことを貶めたりもする。互いが巫女になった場合は、相手を優遇しましょうなどという口約束も、果たして守られるのだろうか。？？いや、無理だろう。

カグワはふと足を止めて、後ろを振り返った。後ろを歩いていたアネットとダイアンが、突然歩みを止めたカグワにぶつかりそうになり、迷惑そうに顔をしかめる。「きちんと歩いて下さない？」と厭味を飛ばす彼女たちに「ごめんなさい」と愛想笑いで答えてから、カグワは己の歩いて来た道を見つめた。

長い渡り廊である。その先は、やはり、見えなかった。

不思議なもので、確かにあの円形の間から退場してこの廊下に出て来たはずなのに、この道の先には円形の間が見えない。天上は高く、吹き抜けの窓のある巨大な建物だったのに、何故外から見るところとはできないのだろうか。何かしら不思議な力が働いているのだろうとカグワはその方角を眺めて首を傾げた。

「？？カグワの君、貴女も何か、感じるの？」

突然背後から声をかけられて、カグワは後ろを振り返った。そこに立っていたのは、浅黒い肌をした長い黒髪の美女である。いつもの見慣れた黒髪を下ろした姿ではなく、儀式のためにと高く結わえられたその姿がまたとても印象的だ。

「……ネイディーン」

ネイディーン？？彼女は、一の君と呼ばれる。すなわち、ここにいる聖女たちの中では彼女の巫力が最も高い。もしも巫力のみにて巫女を選定するのであれば、間違いなく彼女が次期巫女だ。いや、

もしそれだけが基準ではないとしても、恐らく巫女になるのはネイディーンであろう。ネイディーンは美しくとも飾らず、聡明で柔らかな人物だ。彼女をおいて他に国の頂点に立つ器の聖女はいないだろう、と、カグワは思っていた。

「あそこに控える円形の間……なんとも、不穏な空気を覚えるわ」

ネイディーンが小さく呟いた。カグワは目を見開く。

「……え？」

カグワは何も見えない、おそらく円形の間のあるであろう方向を見つめた。ぽつかりと空いた何も無い空間の向こうに、雲一つない青空が広がっている。清々しいその蒼穹は確かに逆に不穏であると言われればそう感じ得ぬこともないが、カグワには気付けない。

「……さすがね、ネイディーン。私は、何も気付かなかった」

カグワが感心半分、己の力不足への嘆き半分に呟くと、今度はネイディーンが目を見開く。

「あら、なら、どうしてあちらを振り返ったの？ 何かを感じたのではなくて？」

「いいえ、なにも。ただ、この渡り廊からあの円形の間を眺めたいと思っただけよ。？？何も見えなかったけど」

「……カグワの君、貴女はとても勘に優れているわ。それはそれで、間違いなく貴女的能力よ」

ネイディーンは、黒真珠のような瞳を細めて微笑んだ。何故だかその顔に影が生じる。カグワは自分より少し背の高い一の君を見上げ、小首を傾げた。上品な化粧で覆い隠してはいるが、疲弊しているようだ。

「……ネイディーン、貴女も選定の儀式を前にして、とても緊張しているのかしら？」

「え？」

「なんだかとても……疲れているみたい」

思った通りを告げると、ネイディーンは黒真珠を大きく開いて何度も瞬き、それから目を伏せるとふっと笑った。言い当てられた、

と言わんばかりである。

「……貴女は、とても勘がいいわ」

ネイディーンはさつきと同じ言葉を紡ぐが、今回のこれは勘というわけではない。カグワには、彼女の顔色があからさまに悪く見えた。

「珍しいわね……。何事にも動じない、ネイディーンが緊張だなんて。……まあ、巫女選定の一大事だから、仕方ないかしら」

言って、彼女の気を和らげようと笑うと、ネイディーンは困ったように微笑んで、首を横に傾げた。

「いいえ、そういうわけじゃないの……。私のこれは、緊張ではないわ……。自分への戒め、とでも言おうかしら」

「戒め？」

「ええ……。己の失態に、疲れてしまったの……。戒めなくてはならない、失態よ……。あら？」

途中まで言いかけて、ネイディーンの声色が変わった。カグワの方を見ていた彼女の視線が、渡り廊の外、後宮の庭先の方へと移る。遠くを眺めるその眼差しに、カグワもつられるように後ろを振り返った。

「あそこにいるのは、……カグワの君の仗身ではなくて？」

「え？」

ネイディーンに言われ、彼女の示す先を眺めて、カグワは瞠目した。確かに、その庭の茂みには、よく見慣れた装衣姿の男が、隠れていたのである。

「……ゆたや！」

ネイディーンの話の遮ってしまったことも忘れ、カグワは己の仗身の名を呼んだ。がさがさと茂みが揺れる。その気配をカグワが見紛うことはない。なにしろ十年も付き添った、仗身だ。

見つかってしまつて隠れているわけにもいかず、ひょっこり茂みから姿を現したその背の高い男は、それはもう気まずそうな顔をしていた。確かに、本来巫女選定の儀式を間近に控えた主の元へ、仗

身の身分で現れる者などいないだろうから、並大抵ではない引け目を感じているのだろ。う。が、そんなことを気にするカグワではないわけ。

「どうしたの？ こっちへいらつしゃいよ」

周囲の目も気にせず、彼のことを手招きすると、カグワを抜かし、て前を歩いていったダイアンとアネットが、こそこそと互いに何かを耳打ちした。その内容までは聞こえないが、おそらくカグワに対する悪口雑言を吐き合っているに違いない。また東の君が、とか、仗身をこんな時にまで連れて、とか、まあ、予想はつく。

「このような時に、このような場所まで来てしまい……申し訳ございません」

渡り廊の下までやってきたユタヤは、廊下に入ることはせずに、地面の上に膝を付いて深々と頭を下げた。

「一の君とご歓談のところを、お邪魔してしまったのではないでしようか」

ユタヤはカグワの隣にいるネイディーンの方を伺う。そこでようやく、ネイディーンの話の遮ってしまったことを思い出し、「あ」とカグワは口を押さえた。一方のネイディーンは「いいのよ」と柔らかに微笑んでいる。

「儀式まではあと一刻……何をしているともどこにいらとも指示されてはいないわ。もちろん、仗身と会うとも言われていないわけだから、私のことは気にせず」

「ごめんねネイディーン」

今更の謝罪をしてから、カグワは渡り廊の石畳の上に屈み込んだ。石畳はそこそこの高さがあり、地面に直接膝をついているユタヤよりも、若干カグワの目線の方が高い。

「ゆたや、なにかあった？」

それでもなんとか頭を垂れている彼の顔を覗き込もうと首を傾げると、ユタヤはようやく顔をあげた。

「いえ……何があったというわけでもなくて……本当に恐縮なので

すが……」

ユタヤは一度顔をあげてまっすぐカグワのことを見つめて、それから迷ったように視線を泳がせる。

「なんとも……不吉な予感に駆られまして……いてもたってもいられず、つい……」

「不吉な予感……？」

カグワは思わず、隣に立っているネイディーンの方を見上げた。先刻、彼女からも「不穏な空気を感じる」と聞いたばかりである。それに何か関係があるのだろうかと視線で問いかけると、ネイディーンは首を竦めた。

「主が主なら、仗身も仗身で勘が良いのね。??不吉な予感とは、具体的に？」

まさか一の君に問われるとは思っていなかったのだろうユタヤはすっかり恐縮しきつたように身を縮こませる。

「いえ、聖女の君がお感じになるような、高尚なものではございません……私はただ、三の君に何かあつてはと、思っただけのことです」

ユタヤは他の聖女の前では体裁を気にしてカグワのことを名前では呼ばない。三の君、と呼ばれたカグワがきよとすると、代わりにネイディーンがくすと笑った。

「本当に、最後の最後まで献身的な仗身ね」

「最後……？」

「あら、そうよ、カグワの君。この後私たちは選定の儀式に入るのだから、これで仗身とは一生の別れとなるかもしれないのよ。巫女に選ばれば引き続き仗身は仗身のまま付いてくるでしょうけれど……そうでなければ、巫女の世話役になる者の仗身がどうなるのかの説明はなかったわ」

「……そういえば」

カグワは息を呑む。全く、気付いていなかった。まさか四六時中一緒にいた仗身と別れるかもしれないなんて、頭の片隅にもない

考えたつたのである。

「貴女の仗身も、別れを惜しみにきたのではなくて？」

からかうようにネイデーンが言う。「滅相もない」と慌てて首を横に振ったユタヤにはしかし、少しはそういう気があったのだろうと、付き合いの長いカグワには読み取れた。かぐわは、そうか、もし自分が巫女になれなければ、この仗身とも別れなくてはならないのかもしれないのだと、初めて気が付いた。

「私は、結果がどうなるうとも、私の役目を果たすまでですが……」

そうはつきりと言ってのけたユタヤの顔に、思わずカグワは手を伸ばす。少しでも自分より低い位置にいる彼の頬を撫でて、頭を撫でて、されるがままになっていくそれはもう献身的な自分の仗身に、どう言葉をかけていいのかわからない。それはそうだ。突然別離の道かもしれないと言われたところで、今までずっと傍にいたのだ。どうしてそんな未来を予想することができよう。

「……ネイデーン」

口をついて出て来た言葉は、

「もしも貴女が巫女になったら……私は貴女に世話役として一生尽くすし、なんでもするから……ゆたやのことも護衛として雇ってあげられないかしら」

先ほどダイアンとアネットが散々繰り返していた馬鹿馬鹿しい「もしも貴女が巫女だったら」の話よりも、遙かに上に行く虚言だ。何を言っているのだ、と己を諷める冷静な自分もどこかにいて、それが絵空事であることはわかっていくのに、止められない。

「ほら、だって……やっぱり普通の人間よりは力もあるし、ネイデーンの仗身一人よりも二人いた方が……なにかと役に立つかもしれないし」

「そうねえ……でも、もしも私が巫女だったとしても、そういう役職のことは古くからのしきたりに従って決めなくてはならないだろうから、どうなることか」

ネイディーンの答えはとても落ち着いて沈着なものだ。カグワの絵空事を馬鹿にして笑うのでなく、現実的に答えてくれる。

「それに、もしも護衛にできたとして……彼は貴女以外の人間を、命を張ってまで守れるかしら？」

そう微笑するネイディーンの視線の先には、カグワの前に膝を付くユタヤの姿があった。姿勢一つ崩さずまっすぐカグワを見上げるそれは、絶対的な忠誠の証である。

「……そもそも、私が巫女になると決まったわけでもなし」

言っておどけてみせるネイディーンの優しさに心底感謝しながら、カグワは俯いた。

「ええ……そうね。おかしいこと言ってごめんなさい」

こちらを見上げるユタヤが、悲しげな目でこちらを見上げてくるのは、きつとカグワがそんな表情をしているためであろう。彼は時折カグワの感情に同調する。特に、悲哀の情には敏感だ。

そんな主従の目線のみでのやり取りを見て、感心したように呟いたのは、ネイディーンである。

「カグワの君……貴女は本当に、変わった人ね……。己の仗身にも他の聖女にも同じように接する。同じように、一人の人間として接する」

「……それでよく、怒られるわ」

「そうかもしれないわね。だけど、私は……今だから言っわ。私は、とても嬉しかったわよ、カグワ」

私はとても嬉しかった、と再度繰り返したネイディーンのことを、カグワは見上げた。渡り廊の向こう側、きらきら差し込む日差しを背負い、彼女の長い髪を結わえた金色の簪が七色の光を帯びている。聖女一の巫力を持つ、一の君の顔は美しくとも、儂い。

「誰も彼もが私のことを一の君と呼んで、妬み、羨望、畏怖、尊信の眼差しを向ける。一の君としての私を見ても、誰もネイディーンという一人の女としては、見てくれなかったわ。その中で、貴女だけが、私と同等に接してくれた」



「……ネイディーン？」

「私は、とても嬉しかったわ」

さらに繰り返したネイディーンのどこか悟ったような顔に引かれて、カグワは立ち上がる。先刻はユタヤが現れたことにより彼女の言葉を遮ってしまったけれども、彼女は何やらとても思い詰めているようだった。彼女は「これは自分への戒めだ」と語った。だが、なにゆえ己を戒める必要があるのか、まだカグワはその理由を聞いていない。

「ネイディーン……なにか、あったの？」

彼女の顔を下から覗き込むようにして問いかけると、ネイディーンはゆるやかに首を横に振った。

「私は、……誘惑に勝てなかった。それだけのこと」

「……どういうこと？」

全く意味がわからない。首を傾げたカグワに、ネイディーンは淡々と無表情で説明する。

「聖女には、決して覗いてはいけないという禁忌があるわ。それはカグワの君も知っているでしょう？」

「禁忌……？」

「外界に出てはいけない、決して覗いてはいけない、決して見てはいけない」

それは、聖女に定められた禁忌の三大原則である。

確かに、聖女には覗いてはいけないと言われた間があり、見てはいけないと言われた書物がある、という話はカグワも聖女である以上は知っていた。しかしながら、その覗いてはいけない間がどこにあるのか、見ていけない書物がどこに置いてあるのか、カグワは知らない。ゆえに、その禁忌を犯す危険になど全く遭遇せずにごこまでやってきた。

「私は、その禁忌を破ってしまった……」

「一体それは……何？ どこにあるの？」

「言えないわ。禁忌だから」

ネイディーンはにこりと笑った。そして、渡り廊の続く道の向こう、円形の間の方を眺める。

「その所為かしら……とても不穏な空気を感じる」

「不穏な……空気？」

カグワも円形の間の方を見やったが、やはり何も感じられなかった。これが彼女と自分との巫力の差なのだろうか。

「私は自分を戒めなくてはならないわ。カグワの君……貴女は、自分の信じる道を行けばいい」

「……え？」

カグワは目をぱちくりさせた。不穏な空気の気配すら感じられないような自分に、ネイディーンは何故か助言を寄越す。それが一層不思議だ。

「巫女に選ばれようと、選ばれなかつとも……貴女がこの世界を左右するのもかもしれない。そんな気がするわ」

含蓄のありそうな言葉を残して、ネイディーンは踵を返した。彼女の纏う、清々しい青い装束が宙を舞う。きらきらと太陽の光を反射させながら、ネイディーンは渡り廊を歩いて去って行った。まだ、選定の儀式まではしばしの時間がある。

取り残されたカグワは、依然として地面の上に膝をついている己の仗身を見下ろして、ぼつりと問うた。

「……ゆたやも、不吉な予感がしたと言ったわよね？」

「……私にとっての不吉は、かぐわ様の御身に何事かが生じることのみです」

「……そう」

ネイディーンの示す不穏な空気と、己の感じた不吉とは種類が違つとユタヤは言うのだろう。しかし、カグワに至っては何も感じない。

とは言え、当然のように忠義を尽くしてくれるユタヤと離れなくてはならないのだと思えば、それこそが不吉の示すものなのかもしれないとカグワは思った。選定の儀式まであと少し、今更ながら

惜別の時を過ごそうか。

そんなことを考えているカグワは、まだ未来を知らない。時は刻々と迫っていた。

#### 4、選定の儀

?? 貴方さえよければ、私の仗身になってくれないかしら？

そう言つて舞い降りた天女に手を差し伸べられたのは、今からもう十年以上も前のことだ。だが、あの瞬間は色褪せることなく、今でも彼の頭の中に刻み込まれている。彼の心はあの頃から少しも変わらない。この天女を守るのだと誓つたあの日から、少し足りとも変化していなかった。

ついに巫女選定の儀式を間近に控えた己の主と、最後の別れを惜しんだユタヤはゆつくりと気の抜けた足取りで、三の君の内殿を指していた。住み慣れたこの三の宮も、選定の儀式が終われば去らなくてはならない。だが、今ではそれ以外に帰る場所のないユタヤはまっすぐそこを目指していた。もしこれでカグワの元を離れなくてはならなくなったなら?? もう、帰る場所はない。

後宮の中には、中央にある祭殿を囲むようにして、一から十までの宮が広がっていた。三の宮は北西の側にある。日のあまり当たらぬ静かなその宮は、その主には似ても似つかない。三の宮の主である、いや、主であつた三の君はこの後宮の中で誰よりも賑やかしく、そして輝いている。と、ユタヤは思っていた。

三の宮までくると、その入り口となる門扉の横に、一人の女が立っていた。何事かを屋敷の方へ向かつて叫んでいる。恐らく屋敷の中にある荷物の最後の整理を行っているのだらう。?? 彼女をロマーナという。多々いる三の君付きの女官たちをまとめる女官長である。すなわち、最も三の君に近い女官であつた。ゆえに、ユタヤと彼女との距離も、近い。

「おかえりなさい、ユタヤ」

ロマーナはそこに長身の男の姿を見つけると、他の女官たちに荷物の運び出しの指示をするのをやめて、彼を見上げた。ユタヤも彼女の隣にて足を止める。

「荷物の運び出しか……重い物は俺がやる」

「言われなくともそうしてもらうわよ。??カグワ様は? どんな感じだった?」

ロマーナは、荷物の整理の大詰めというこの多忙な時に、突然行方を眩ましたユタヤがどこに行ったのか、ぴたりと言い当てた。ユタヤは彼女に行き先を告げていないが、彼が突然消えたとなれば、行く先は一つしかないと知っているのだろう。

「……特にいつもと変わった様子はなく、緊張してるふうでもなかった。ただ??ひよつとしたらこれで仗身とは二度と会わなくなるのかもしれないと知って、私との別れを惜しんでくださった」

ユタヤが突然屋敷から消え、儀式を目前に控えた主の元をわざわざ訪れた主な理由は、それだ。カグワがその事実を知らなかったように、ユタヤもそれを知らなかった。だが、儀式のために正装をしたカグワが屋敷を去り、空っぽになった屋敷を片付けているときに、なんとも不吉な予感に駆られて、気付いた。ひよつとしたら、これが永遠の別れになってしまうのではないのかと。

「そう……」

小さく呟いたロマーナは、そんなユタヤの心情もいやというほどにわかってくれる。彼女はカグワが後宮入りした時からの専属の女官、すなわちユタヤがこの後宮に来たその幼い頃から、ずっと二人を見て来た。ユタヤにとっても、カグワにとっても、実の姉のような存在だった。

「もう気付けば早いもの……カグワ様も十五になって、貴方も十八ね。もしもこれで仗身をやめなくてはならなくなっても……十八の未来にはたくさんの希望があるわ」

ふざけているのでもなく、真面目な顔をして言うロマーナに、ユタヤは「まさか」と失笑する。そして自分の首にかけられた数珠玉

を撫でた。この数珠玉にはカグワの巫力がこめられており、ユタヤの獣の性を封印している。ゆえに、体だけは獣に変化できても、その心まで獣に食われてしまうことはないのだ。

「俺は、これのおかげでようやく人の世界に生きていられる……かぐわ様に生かされているようなものだ。かぐわの君の元を去らねばならぬのなら……それは死を意味する」

この数珠玉がなくなれば、ユタヤの人間としての心は消滅する。すなわちそれは人間ユタヤの死と同義だ。ユタヤは十八の青年である前に、獣人だった。成長とともに獣に心を食われてしまうことが、獣人の悲しきさだめであった。

それに関してロマーナは何も言わず、否、言えず、黙って門扉に寄りかかると腕を組んでまっすぐ祭殿の方を見上げた。その見つめる先の華やかな祭殿の中では、彼らの主が何を思っているのだろうか。

「……そろそろ、儀式の始まる頃合いね」

ロマーナがぼつりと呟く。ユタヤは黙って頷き、同じく祭殿の方を見つめた。見慣れた後宮の景色のはずなのに、なぜか胸の奥がざわめく。まるでその祭殿の立ち姿が、異世界への入り口であるかのように見慣れぬ物に思えた。

「……不吉な、予感がする」

ユタヤは小さな声で囁いた。それは今朝方、今日が儀式なのだと朝日を見上げたその瞬間から続いている妙な知らせである。

「不吉……ね。それは、カグワ様が巫女に選ばれないとか、そういうこと？」

ロマーナの直裁な問いに、ユタヤは黙って首を横に振った。最初は、このままカグワと離ればなれになってしまうのではないかという不安からくる胸騒ぎだろうと思っていたのだが、別れを惜しんだ後も尚続くとすると、この妙な切迫感のような感覚の正体がわからない。

「なんだろう、わからない……ただ、かぐわ様の身に、なにかがあ

るのではないかと……」

「なにかって？」

「それが、わからない……」

要領を得ないユタヤの答えに、ロマーナは首を竦める。「ロマーナ、この荷物はどうしたらいいかしら？」と屋敷の方から助けを求める他の女官の声がして、ロマーナはユタヤの相手をするのをやめて門扉をくぐり、屋敷の方へ戻ろうとした。ユタヤもいつまでも此処で祭殿を見つめているわけにはいくまいと、踵を返そうとした。

その、時である。

一瞬、祭殿の空が、歪んだ。

あれは一体なんだと目をこらした時にはすでに歪みは見えない。だが、確かに何かが祭殿で起こっているのだと確信した。そして？

？？ゆたや！

ユタヤは目を見開いた。聞き違えるわけがない。確かに、カグワの声が聞こえた。この近くにいないはずのない、あの祭殿で儀式を行っているまさに最中であろう、カグワの声だ。悲鳴によく似た声だった。確かに、ユタヤの名を呼んでいた。

「ユタヤ？」

門扉をくぐり、荷物の手配をしていたロマーナが、ユタヤの異変に気付いてこちらに声をかける。

「……かぐわの君が、危ない」

「え？」

現状を飲み込めずに問いかけて来たロマーナに、詳細を説明してやる暇はない。暇があったところで、この感覚的な危機感をどのよに伝えたらいいのかはわからない。とにかく、主が危ない。なに

があつても、命に変えても守るのだと決意した主が、危機に晒されている。

いてもたつてもいられなくなつて、ユタヤは地面を蹴り飛ばした。祭殿までの道のりは複雑ではない。が、祭殿を取り囲んで広がる十の宮から最短距離で祭殿に辿り着くためには殿を囲む塀を乗り越えるのが最も簡単だ。

「ユタヤ！」と背後から自分の名を叫ぶローマーナのことなど無視をして、ユタヤは塀に手をかけ飛び乗った。そして飛び降りるなり、祭殿の渡り廊にかけあがる。本来ならば、仗身が気軽に乗つてはならない場所であつた。何故ならこの渡り廊は最も神聖なる、「円形の間」に続いている。

ユタヤは当然ながら、その円形の間への入り方など知らなかつた。強い巫力を持つ聖女たちですら、この儀式の時までその円形の間に入ったことはおろか、その円形の間が存在さえ知らなかつたのだ。だが、ユタヤの本能が、その場所を指せと叫んだ。主の悲鳴が聞こえる。その悲鳴が道しるべとなつて、ユタヤを走らせた。

長い渡り廊の上を、ユタヤは全力で疾走した。走るたびに、背中に背負つた大剣が、がしゃんがしゃんと重い金属音をたてた。そんな物いつでも背負つて重いでしょうに、とかつて労つてくれたのは他でもないカグワだ。かぐわの君を守るためにならこんな物、重いうちに入りませんよとユタヤは答えた。が、今はこの重さが邪魔で仕方がない。これさえなければもっと早く走れるかもしれないのと歯痒く思っている間に、ユタヤは前方に二人の剣士が仁王立ちになつて見えるのを見つけた。

それはとても、不自然な光景であつた。十年過ごしたために、顔見知りでない人間などこの後宮にはいない。それなのに、その後宮の中で、見たことのない顔をした剣士が二人、仁王立ちで立っていた。しかも、彼らの立つ奥には何もなし。これがとても不思議だ。渡り廊の先であるのに、渡り廊もなければ、他の建物に続く扉もない。そして、庭のあるわけでもない。その先には、目を凝らしても



見えない「なにか」があるようなのだ。

（あれが、円形の間の入り口か）

ユタヤは直感で悟った。儀式は、祭殿の「円形の間」で行われるのだという。聖女すら知らないその空間は、きつと不思議な力で隠されているのだ。ゆえに、外にいるユタヤの目には映らない。

「何者か！」

剣士の一人が刀を構えてこちらに警戒の姿勢を見せた。彼らは儀式に余所者が入ることを防ぐ門番だ。

「私は、三の君付きの仗身だ！ 中で、何かが起こっている！ ……三の君が危ないんだ、通してくれ！」

ユタヤは切羽詰まって大した説明もできずに、剣士たちを押しつけてその場を通り抜けようとした。しかし、当然その程度の口上で門番がどうぞと彼を招き入れてくれるはずもなく、二人はユタヤに刀を向けた。

「仗身だと……？ 獣人ごときがこの神聖なる祭殿に足を踏み入れていいと思っているのか！」

獣人ごときが、と聞き慣れた侮蔑の言葉にも、今更腹など立たない。むしろ、その言葉の通り、この祭殿に仗身ごときが、獣人ごときが足を踏み入れていいなどは露程も思っていなかった。だが、今は非常事態である。それどころではないのだ。

「違う、今は、それどころではないんだ……！ 頼む、中に、三の君の元へ、行かせてくれ！」

向けられた刀など物ともせず、二人の間を押し通ろうとすると、押しのけられたのではない方の男も抜刀し、刀をユタヤの首にあてた。

「わけのわからぬことを……これ以上進ませるわけにいかない。戻るか、死ぬかだ」

ユタヤの首に当てられた刀は綺麗に研がれた新刀で、いかにも切れ味の良さそうな銀の色に輝いていた。喉元に当てられた刃の部分は冷たく、今にも彼の首を取らんとしている。何人たりとも中にい

れるなと命ぜられているのであろう二人の剣士を言葉で説得するのは困難に思えた。?? いかんせん、時間がない。

(……仕方がない!)

他に手段がないと判断し、ユタヤは首にかけられた数珠玉をきゅっと握った。この数珠玉は、ユタヤの獣の心を、そして獣の姿を封印している。数珠玉そのものが効力を失えば、ユタヤはただの獣と化してしまうが、数珠玉を緩めることによって彼は人の心を残したまま、姿のみを獣と変化させることができた。しかし、それは後宮内にて奨励されてはならず、滅多なことのない限り、普通ならば封印は解かない。カグワなどは変わり者故にたびたびユタヤに封印を解かせたが、本来ならば、緊急時以外は人の姿でいるものだ。?? そして、今こそ緊急時である。

人の姿に纏う装衣を脱ぎ捨て数珠玉を緩め、ユタヤは瞬時に獣の姿に変化した。途端、視界に映る剣士たちの体が縮んでいく。実際には、ユタヤの体が倍以上に拡張しているわけであるが。

ユタヤはまず、己の首に刀をあてていた剣士をなぎ倒した。渡廊の壁に叩き付けられた剣士は、ぐ、と声を詰まらせて、気を失う。もう一人の剣士は突如変化した獣人の姿に、目を丸くし凝固してしまっている。恐らく、獣人というものを初めて見たのだろう。化物と呼ばれるこの獣の姿は、それはそれは恐ろしいものだ。

「……退いてくれ」

低い声で告げ、くぼんだ黒い目で剣士を見下ろすと、剣士は途端に腰を抜かしてその場に刀を投げ捨てると、がくがくと震えた。とても勝てないと思ったのだろう。しかし逃げることもできずに、その場にてただおののいている。

剣士に闘う意志のないことを確認すると、ユタヤは息を呑みながら、何もない空間に身を投じた。そこには結界の張つてある可能性があった。何人たりとも儀式には足を踏み入れてはならないはずだ。剣士二人で、入り口を守っているはずがなかった。ひょっとしたら結界に引つかかって入れないどころか、はじきだされて死に至るか、

全く知らない亜空間へと飛ばされてしまいかもしれないと、頭の隅に不安は過つたが、どのみちこれでカグワを救えないのなら、同じことである。例えばこの身が滅びようとも、彼女の元へ辿り着こう。

ユタヤは、獣の巨体をその入り口へと投げた。

ぐわん、と、一瞬だけ空間が歪んだ。だが、それだけであつた。

結界などなかったのかもしれないし、あるいはそれはね除けてしまつくらいの方がユタヤにあつたのか、とにかくその真実を知ることが適わない。

目の前に、暗い世界と、一筋の光と、そして巻き起こる旋風が広がっていた。聖女たちの甲高い悲鳴が幾重にも折り重なって響き渡る。ユタヤは、その中から確実に己の主人の物だけを聞き取った。

「ゆたや！」

声は、頭上から。旋風の吐き出されている、不思議な一筋の光の彼方から。

「かぐわの君！」

ユタヤは彼女に少しでも近付くべく、冷たい石の床を蹴った。

時はさかのぼり、それはまだ、ユタヤが三の宮にてローマーナと話し込んでいた頃である。カグワは、他の聖女たちと共に定刻通りに円形の間へと集められていた。

外からはその建物の存在すらわからない円形の間は、渡り廊の突き当たりの目に見えぬ扉をくぐると確かに存在していた。巨大な円錐の形をした建物は、カグワの長年居住してきた三の宮の敷地全てほどの広さがあり、三階分ほどの高さがあつた。吹き抜けの高い天井には、十の天窓が設けられており、それぞれその窓から差し込む光が、石床の上に備え付けられた黒い十の椅子を照らしている。十の椅子は、円形の間の中央に置かれた巨大な水鏡をぐるりと囲んで中央を向く円形に設置されており、扉から見て真正面の椅子から順に、一の君、二の君、三の君、と並んで腰掛けることが望まれた。

一刻前に説明された通りに従い、聖女たちは無言で己の椅子を指す。カグワも淀に倣って、二の君と四の君の間、三の君のために用意された黒い艶のある座椅子に腰掛けた。

全ての聖女が椅子に座り、中央の水鏡を見つめていると、ややあつて、何者かの力によつて天窓が閉じられた。円形の間の中から、光源が消える。全てが漆黒の闇に包まれたかと思えば、今度は水鏡が自ら光を放ち始めた。きらきらと水面の揺れるたびに、天上にまだら模様が映る。

『選定の儀を始める??』

どこからともなく女の声が響いた。それは、この円形の間という空間自体に響き渡るのではなく、聖女たちの頭の中に直接語りかけてくる。カグワはちらと他の聖女たちを見やったが、他の聖女たちもはつとしたように目を泳がせたので、別段自分だけに聞こえているというわけではないのだらうと安堵した。

『聖女は瞑目し、先見の技を行使せよ??選定は、己らの見た未来の中から、行う』

先見の技??すなわちそれは、未来を予知する技である。どうやら巫女の選定は、聖女たちの見る予知夢の中で行われるらしい。

選定は、不思議な力の一存によつて行われるのではないのか、とカグワは初めて知って吃驚した。聖女の見た未来の中から選定するというのは、未来の中に巫女として登場する聖女を探すということなのか、あるいは先見の技の最も鮮明に行えた聖女を巫女とするという意味なのか。

詳細はわからないまでも、やれと言われたからにはやるしかなくカグワはそつと目を閉じた。今までも巫力の修行として先見の技を試みたことは何度もあったが、正直カグワのその技の成功率は決して高くない。十のうちに一度成功すれば良い方で、大概は何も見えなかった。が、しかし、その一度の成功で、未来を外したことがないというのが唯一の誉れである。

未来を見据えようと、カグワは意識を遠くへと飛ばした。魂が体

を抜けて、どこか遠い時空の彼方へと浮遊していくような感覚に陥る。ふわふわと体が軽い。優しい大気の流れに、身を任せる。

??ふと、どこからか、赤子の嗚咽するような声が聞こえた。おぎゃあおぎゃあと、乳飲み子の泣く声である。母を求めて嗚咽する赤子はやがて成長し、天へと昇った。不思議な力に召されていった。

すると、今度は荒地を抜けようとする大勢の難民が見えた。荒れた旅路の途中で、女子供が力つきて死んで行く。思わず目を背けたくなるような凄惨な光景であった。

凄惨な光景が消え、森の奥に燃え盛る建物が見える。炎の中から命からがら逃げ出す人間が二人。一人は男、もう一人も男、泣き叫ぶ男たちの声が森の中にこだまする。

かと思えばそこは凍てつく氷の国だった。一人の若い娘が、凍った街の中で、歌を歌う。その歌は輝く光となって、街の氷を溶かした。人々は春を迎えた街の中で、歓喜した。

次に見えたのは、巨大な神像だ。カグワもこれに酷似したものを、後宮の祭殿で目にすることがあった。しかし周囲の風景からして、此処は後宮ではない。どこか他の場所にある、神像である。かと思えば、その神像が突如爆風に巻かれ、粉塵と化した。炎があがる。神像は見るも無惨に、その場に崩れ落ちていった。

それから次に見えたのは、雪の降る景色だ。広い雪原の中に、矢が、石槍が、飛び交った。戦の光景である。人が倒れると、白銀の雪が黒に近い赤に染まった。たくさん人間が命を失った。命を落とした人間は、雪の下へと埋もれていった。

そして最後に見たのは、巨大な獣の姿であった。胴は熊のように黒く巨大で、頭は獣の頭蓋骨のような形をしている。伸ばした手には長い爪がはえ揃い、睨む目は闇のように暗い。誰かが、化け物、と叫んだ。化け物は暗い闇の目を悲しそうに歪めた。その暗い闇の目を持つ化け物を、カグワはよく知っている。

??ゆたやつ!?

カグワは思わず目を開いてしまった。遠い時空の彼方を彷徨っていたはずの意識が、円形の間に座る彼女の体の中へと舞い戻る。鮮明に、その場の景色が見えた。現実の目は例えどんなにその場が暗くとも、真実しか映さない。

円形の間の中央に備え付けられた水鏡の中から、金色に光る不思議な球体の物が垂直に上へと飛び出した。他の聖女たちも皆、先見の技を終えたらしく、呆氣に取られたようにその光る球体を眺めている。

光の玉は、ぷかぷかとしばらくその場に浮いた後、やがて少しだけ沈んだ。聖女たちの座る高さまで沈むと、ゆらゆら揺れる。かと思えば、なんとも頼りない足取りで、動き始めた。その向かう先は??なんと、カグワの座る三の君の御座だ。

どういうことだ、と驚いているカグワの前で光の玉は動きを止めた。他の聖女たちも皆、啞然とした顔でこちらを見ている。この光の玉が水鏡から現れたものならば、それは選定の儀式をとりしきる不思議な力の意味である。そしてその意思がまっすぐカグワの元を指したというならば??それが、意思の下した決定ということだ。

(嘘でしょう……私が?)

他の聖女たちが、「そんな馬鹿な」と目を見開くのと同じくらいに、カグワも困惑していた。東の君と揶揄され、変わり者と笑われ、それでも厭わず自由気ままな振る舞いをしてきた。正直に言えば、巫女になりたいだなんて、思ったこともなかったのだ。最も、聖女らしからぬ聖女であったと思う。自分は最も、巫女の座からは遠かったと、そう思うのに。

しかし、間違いなく光の玉はカグワの前に頓挫した。これをどのように対処すればいいのかは、事前の説明で習っていない。カグワは戸惑いながらも、とりあえずその光の玉を両手のひらですくいあ

げるように包み込んだ。すると、その光の玉は、布が水にしみこんでいくように、カグワの体の中へと溶けて行った。

（これで……私が、巫女に……？）

果たして儀式はこれで終わりなのだろうか。この後一体自分はどうしたらいいのだろうか。不思議な声もしない。これ以降の説明も何も受けていない。ただ、光の玉をすくいあげた両手を、持て余すばかりである。

カグワの当惑が頂点に達した、その時である。？？事件は起こった。

俄然、円形の間の天上に、不思議な黒い固まりが降臨した。これも儀式の延長だろうかと上を見やって、しかしカグワは首を傾げる。暗褐色のその固まりからは、これまでの儀式に関係した全ての物とは異なり、神聖さのかけらも感じる事ができなかった。？？むしろ、おどろおどろしい。

「……不穩の正体は、これが……」

一の君、ネイディーンがぼそりと呟いたのが聞こえた。カグワは再び天上を見上げる。確かにその暗褐色の固まりは、不穩であった。

と、次の瞬間、暗褐色の固まりの中から、一筋の強い光線が落ちた。光線は迷わず水鏡と衝突し、ぱりん、と音を立てて水鏡の入れ物ごと破壊する。そして、その次には光線を巻くようにして、竜巻のような強い風が拭き起こった。

途端、円形の間の中に、甲高い聖女たちの悲鳴が響き渡った。風は上へ上へ、暗褐色の固まりの中へと物を吸い上げて行く。割れた水鏡の破片が、暗褐色の中、暗闇の中へと吸い込まれて行った。

きゃあああ、と聖女たちの阿鼻叫喚。カグワも危うくその風の中へ吸い込まれていきそうになり、慌てて自分の座っていた御座にしがみついた。髪をまとめていた簪が解け落ち、暗闇の中へ消えて行

く。風の渦はまるでカグワを目指して舞い起こっているようにも感じられ、カグワは全身の力を込めて御座にしがみついても、今にも引き剥がされんとしていた。

なにがなんだかわからない。今は巫女選定の儀式の途中だ。なのにどうしてそんな神聖な場に、こんなにもおぞましい物が現れるのか。とてもではないが、これが儀式の一貫とは思えない。誰か？？誰か、助けて！ と、叫ぶ。

心の中で悲鳴を上げると同時に、外と繋がる円形の間の扉が、叩き割られるような勢いで開いた。その開いた扉の向こうから現れたのは、よく見慣れた姿。誰もが恐ろしいと顔を歪めた化け物と言われる所以であるが、一度だってカグワはそれを恐ろしいだなんて思ったことがない。

「ゆたや！」

名前を呼ぶと同時に、ついに御座にしがみついていらなくなつたカグワは、旋風に巻かれて暗闇の中へと吸い込まれていった。

「かぐわの君！」

すぐに、彼の声が追いつく。

なにがなんでも、と、がむしゃらに手を伸ばすと、ぎりぎりのところで彼の長い爪のような獣の手に届いた。カグワがその爪の一本を右手でしっかりと握り締めると、今度はユタヤが手を伸ばし、その巨大な腕の中にカグワの体を抱き込む。ユタヤの獣の体の中へと押し込まれて、ひとまずは安心した。が、二人同時に闇の中へと吸い込まれていることに代わりはない。

風に飛ばされるがまま、上下左右、体は何度も回転を繰り返した。何も見えない暗闇の中で、どこが正しい上でどこが正しい左なのかもわからない。ただ、崖の上から転がり落ちて行く石のように、闇の中を転がっていく。

ゆたや、とぎゅっと固い毛皮を握り締めると、彼のカグワを抱く腕にも力が籠った。絶対に離さないようにと力強く、だがカグワを潰すことのないようにと優しく抱きしめてくれる。カグワは闇の中



でも、彼の腕に護られている。

そうしてどれくらい、闇の中を転がったのだろうか。三半規管が言うことを聞かなくなるくらいに振り回され続けて、ようやく闇の先に光が見えた。あれが、闇の出口だろうか、と思った刹那には、二人の体は放り出される。

どん、と鈍い音がした。ユタヤが闇の中から光の中へと放り出されて、どこかに着地したのだ。ユタヤが着地時の衝撃を全て吸い取ってくれたために、カグワは少しの痛みも感じることなく光の中へと到着することができた。

風はもう吹き荒れてはいなかった。それどころか、二人を包んでいた闇もなくなり、先ほどまでの恐ろしい光景が嘘みたいのに、静寂がその場を支配していた。

しかし、そこはどう見ても、彼女がそれまで選定を受けていた円形の間ではなかった。とてつもなく狭い空間で、獣の姿にと変化したユタヤに至っては、少しも身動きが取れない。?? 此处は一体、何処だ？

二人は、聖なる儀式の途中に突如不思議な闇の中へと吸い込まれて、全く知らない別世界へと、はじき飛ばされてしまったのである。

## 5、時空の狭間のその向こう

かつん、かつん、と遠くの方から人の足音が聞こえた。しかしそれは本当に遠い彼方から響き渡るもので、果たしてどこへ向かっているのかもわからない。静寂と暗さの支配する世界の中で、頼れるのは触覚ばかりだ。カグワは、最も身近にあるもの??共に闇の中をくぐりぬけてきた己の仗身の毛皮を掴んだ。

「……ゆたや」

おそろおそろその名を呼ぶと、すぐに応えた。

「はい、ここに」

即座に返されるその答えに、心底安堵する。此処がどこであるのか、一体何が起こったのか、自分の置かれている状況が何なのか、一切わからないことだらけであるが、確かにそこに慣れ親しんだ仗身がいるのだとわかればそれでいい。カグワは彼の毛皮から手を離して、わずかに暗い空間の中を進んだ。

「……ここは一体どこかしら」

言いながら二歩進むと、すぐに壁に当たった。どうやらとても狭い空間のようだ。

「さあ……あまり広い空間ではないようですが……私は身動き一つ取れません」

言いながらユタヤは獣の頭を僅かに持ち上げて、がしゃんと何かにぶつかった。「照明器具が……」とユタヤが情けない声をあげる。音からして硝子製の照明器具がぶらさがっているのか、とカグワは天上を仰いだ。カグワの触れた壁も上質な壁紙のような触感が生じていたし、二歩のみ歩いた床も絨毯が敷かれているようで柔らかな。どうやら此処は狭いながらも、人の住まうことのできる部屋のようにだった。

「此処が普通の部屋なら……どこかに出口があるはずだけど」

カグワが小さく呟いて壁を伝うと、ユタヤがわずかに身動きした。

「私の前方に……それらしき取手がありますが」

「本当？」

カグワはユタヤの腕を掴むと、彼の誘導に従ってそれらしき取手へと辿り着いた。部屋の中には明かりがなく、窓さえないため暗くてよく見えないものの、確かにそこには扉の握り手のようなものが存在していた。が、金属製のそれを握って押してみても、あるいは引いてみても、全く扉は動こうとしない。

「……駄目だわ。開かない。ゆたや、開けられる？」

力尽くで開けられるものなのかどうかは不明であったが、自分よりも数倍力のある仗身に託すと、彼は無言で扉を押した。が、やはり、びくともせず、長い爪をひっかけ扉を引こうにも、開こうとはしなかった。

「……どうやら何かしらの呪がかけられているようです」

「ゆたやの力でも開かないとなると……そうかもね」

どのような頑丈な錠がしてあったとしても、ユタヤが力尽くで臨んでびくともしないということは考えづらい。ということは、物理的ではない何かしらの力が働いているということになる。

カグワは扉を開くことを諦め、ふうと一息吐いた。とりあえず、此处が何処なのか、一体全体どうしてこういうことになったのか、わかるだけのことを推理してみなくてはならない。そのためにはまず、この暗闇から脱したいのであるが、照明器具に明かりは点くだろうか。

「ゆたや、天井の照明に火を灯したいんだけど……できそう？」

「火種、は……難しいかもしれません。なにしろ私の頭が当たってしまうので」

ユタヤの獣姿の長い白髪に炎が移ってしまうかもしれない、という懸念だろう。カグワは腰に手をあてて、考えた。そもそも、彼がこの部屋の大部分の空間を占拠してしまっているために、この部屋の全貌が見えない。

「人型に戻ってよ、ゆたや」

「いえ……円形の間の前の渡り廊に、装衣を置いてきてしまったゆえ……」

仗身の纏う装衣は、獣型にも人型にも自在になれるよう、着脱の便利な衣となっている。ゆえに獣型になった時には必ず装衣を持って移動しなくては人型に戻りたくとも戻れない。しかし、この非常事態の中では、それすら忘れてしまったようだった。

「もー……装衣なくなったっていいわよ別に」

「さすがにそういうわけには……」

人型に戻って全裸に数珠玉を巻いたのみの格好というのは、さすがに気の知れた仲とは言えど、躊躇するらしい。その気持ちのわからないわけでもないの、カグワもそれ以上は言わなかった。

代わりに、閉じきった扉に寄りかかって、うーんと唸りをあげる。

「でも、どうしよう……一つの扉が呪で封じられているとなると、他にどうやって外に出たらいいのかしら……」

「そうですね、他に道を探して……ん、お待ち下さい、なにか、物音が……」

「え……?」

「……何者か、人間の足音が、こちらへと近付いております」

ユタヤはぴたりと動きを止めて、声を潜めた。つられてカグワもぴたりと身動きを止める。すると、確かに扉の向こう側から、かつかつと近付いてくる人の足音が聞こえた。

この部屋の外がどのような作りになっているのかなんて、皆目見当も付かないが、足音は上の方からだんだんとこの部屋の前へと近付いてくる。故に、階段か何かがあって、上階からこの部屋を目指して何者かが下りて来ているのではないかと予測できた。

「……かぐわ様、私の後ろへ」

小声でユタヤが囁いた。カグワは暗闇の中、鮮明には見えない彼の顔を不安げに見上げる。確かに仗身とは護衛のこと、カグワを護

ることこそ彼の仕事ではあるが、今まで平穏な後宮で過ごししてきた彼女たちに、このような不測の事態が起こったことは一度もなかった。ゆえに、不安だ。ただ一方的に護られる立場は、不安だ。

かつかつと、足音が近付いてくる。もう間もなくだ。階段を下りるような足音ではなくなった。今度は、固い床をまっすぐ歩くような足音に変わる。??カグワは目をつむり、巫女の技の一つ、「気感」の技を使った。これは唯一カグワが得意とする技で、近くにいる人間ならば、その気配から大体のその特徴を言い当てることができる。

「男が……二人よ。顔はよくわからないけど……若い男が二人。帯刀しているみたいだから、兵士が何かかしら……」

「気感」の技を使ってできうる限り相手の特徴を探ると、彼女の力を絶対的に信じている仗身は二人の兵士が来るのだと身構えた。

「相手は敵かもわかりません……向こうが武器を持っているのなら、尚更私の後ろへ隠れてください」

かぐわの君、と再び囁かれて、致し方なくカグワは壁を這うようにしてユタヤの後ろへと隠れた。不安ではあるが、自分が前にいたとて何もできない。戦いの術ならば、ユタヤの方がずっと心得ている。

かつかつかつ、と近付いてくる二人分の足音が、ついに部屋の前で止まった。部屋の、扉の前で止まった。来るか、とユタヤが身構える。その後ろに控えたカグワは、彼の背の毛皮を無意識のうちに握り締めた。

そして、ついに、扉が外側から開けられる。あんなに固く閉じられていた扉は、やはり呪がかけられていたのであるう、外側からはいとも簡単に開いた。それはもう、腐った木戸を開けるがごとく容易に開いた。

きい、と音をたてて扉が開くと、途端、外からの光が部屋の中へと差し込んだ。そのあまりの眩しさに、一瞬にして目が眩む。本能的に瞑ろうとする目を必死に開くと、自ずと涙が溢れた。涙で霞む

視界の中に、二人分の男の影が映る。

「……うわああああ、なんだ、こいつはっ!!」

「ば、化け物……っ!!」

背中に光を背負って、影にしか見えない二人の男が、口々に悲鳴をあげた。そして、彼らが悲鳴をあげたその対象がなんであるかは、瞭然だ。部屋をその巨体で占拠する、獣の姿をしたユタヤのことであろう。

「ば、ばかな……! 部屋には、娘が一人、いるはずだ、と……!」

それなのに、何故、化け物が……!!」

「わからん……! とにかく、殺せ!」

金属のこするような音がして、男たちが抜刀したことを知る。カグワははっと息を呑んだ。確かにユタヤは生身の人間よりも遥かに強いけれども、抜き身の刀二本を相手に勝つことなどできるのか。

そう思っただけ緊張したカグワとは異なり、ユタヤは少しの怯えも見せなかった。強い警戒の意思を見せて、相手を睨みつけているのであろう。覇気が、後ろからでも伺える。その覇気に押されて、「殺せ」と叫んだはずの男たちがひるんだ。刀を握り締めたまま、一歩踏み出すこともできない。

「は……はやく、殺せ!」

「でも、……でも!」

二人分、裏返った悲鳴のような喚きが聞こえる。と、思ったその時だ。

「??殺すだ? それは誰の許可を得たことだ」

この場にそぐわぬほどに冷静な、男の声がした。

かつ、かつ、とその男の物であろう足音が近付いてくる。部屋の前にいる男共よりか幾分重みのある足音で、両者の間に地位の差があるのだとその足音だけで判別できた。

「あ……しかし、中に、化け物が……!」

刀を構えた男の一人が裏返った声で抗議する。すると、現れた男

は再び冷静な声で答えた。

「それは獣人だ。古来より、西の国の巫女は、獣人を護衛として侍らせるのだ。??これだから、何も知らない下級兵を寄越すことには反対したのに」

台詞の後半は独白であろう。何も知らない下級兵たちは、現れた男に「戻れ」と言われて、まだ怯えの消えないまま、抜き身の刀を鞘に戻すことさえ忘れて足早に去って行った。足のもつれそうな勢いで走り去って行くその足音は、いつそ哀れであった。

一方の残された男は、一人部屋の中を見つめていた。その部屋いっばいに警戒を解かぬ獣の姿を見て、ほう、と感心したように呟く。

「……しかし、立派な獣人だ……。まさか、あの時空の狭間に自ら飛び込んでくるとは」

男はユタヤを見上げてわずかに唸ると、それからその場に膝をついた。彼は深々と叩頭し、声を張り上げる。

「西の国の巫女??お迎えに参上致しました。危害は加えぬゆえ、そのお姿を拝見させて頂きたく存じます」

その慇懃な口調からは、生来の上品さが感じられた。恐らく、生まれながらにして貴い位を持っているのだろう。

カグワは決意した。逃げてでも隠れても仕方がない。西の国の巫女とは、間違いなく自分のことだ。まだ、選定の儀式を抜けて間もなく、その実感はないけれども、他に該当する者はいない。

「……私が西の国の巫女よ」

ゆえに、ユタヤの横をすり抜けて、彼の前に出た。「三の君!」とユタヤが咎めるように声をあげる。あえてここで名前を呼ばなかったのは、見知らぬ男にカグワの名前が知れてはいけないと配慮したためだろう。つくづく用心深い仗身だ。

部屋の前の広い廊下に膝をついた男は、癖のある茶色い毛を首の後ろで軽くくくっていた。暗色の絹の布でできた品の良い服を纏っているが、後宮育ちのカグワにはその格好から彼の位を予想するこ

とは難しい。

「西の国の巫女……手荒な方法で此処までお連れしてしまったことをまずはお詫び申し上げます」

「手荒……なんてものじゃなかったけど……此処は何処なの？」

「此処は西国エウリアの隣国、北国ラウグリアの宮殿でございます」

「北国……っ!？」

思わずカグワは声を荒げた。

聖女として後宮で大切に育てられたカグワは、西国エウリアはおろか、後宮の敷地の外にさえ、足を踏み出したことがほとんどない。当然、北国ラウグリアになど一度も足を踏み入れたことがなかった。故に、自分のいた西国の後宮から、この北国の宮殿までどの程度の距離があるのかわかる由もないが、少なくともこの短時間で移動できる距離ではあるまい。先刻この男は、「時空の狭間」とぼやいたが、それはきつと円形の間天井に現れた暗闇の固まりのことであろう。そしてそれを通り抜けることによって、カグワは一瞬にして西国の後宮からこの北国の宮殿まで飛ばしてしまったということだ。

「西国はこの頃、北国に要人を寄越すよう強く求めてきますので……ならばまずは、西国の要人をこちらへお招きして、話を聞こうではないかと」

男は深く頭を垂れているため、その顔を見ることはできない。しかし、その声色からは、なんとなく含みを感じられた。

??あの冷徹な参謀は、頭が切れる。この国王崩御を好機と見た。国王の葬儀に、各国の要人を招待すると言い出した。

??レヴィン國務参謀は、北の出兵を見たいのじゃ。要人を招待されて、しらばくれて皇室を寄越すのか、軍人を寄越すのか、あるいは、誰も寄越さず真っ向から対抗してきよるのか。



そう教えてくれたのは、後宮の最西端の変わり者、ケニー老翁である。そして彼は言った。北国ラウグリアは今やほぼ軍国になりつつあるのだと。そしてそのうち、隣国であるこの西国エウリアにも戦を仕掛けてくるであろう、と。

「しかし、なかなか西国の御仁が話し合いには応じてくださらぬゆえ、手荒ではありますが、こうして西の巫女を時空の狭間よりお招き致しました次第」

「時空の狭間……」

カグワは眉をひそめた。

それはすなわち、時間もなければ空間もない、不思議な扉を開くことによって遠い物を近くへと引き寄せる技である。巫力の修行をするにあたって、時や空間を操る技があることも、聞いてはいた。しかしながら、それはとてつもなく高尚で、他の技と比べてみても圧倒的に難易度が高い。今代一の巫力の持ち主であると言われた一の君ネイディーンでさえも、その技に挑戦することすらできなかった。??だが、北国にはその技を扱えるほどの強い巫力の持ち主がいるのだ。

「……北国には相当な、実力者がいるのね」

呟くと、長い癖つ毛の茶髪が「御意」と言って、揺れた。

「西国では、巫力と呼ぶらしき不思議な『力』。我が国には、随一の『力』を持つ御仁がおります。その御仁が、折角お招きしたのだから巫女に会いたいと仰せです」

「……誰？」

「北ラウグリア帝国の皇太子……シルディア殿下でございます」

「皇太子殿下……」

カグワは瞬きをした。「御仁」と呼ぶからにはそこその地位のある人間だとは思っていたが、まさか国を統べる皇室の人間であるとは思わなかった。『力』があるから皇太子になったのか、あるいは皇太子がたまたま『力』を持って生まれたのか。カグワは北の国の皇室の制度など知らなかったが、どちらにせよ国の頂点に立つ人

物がそれほどの強大な『力』を持っているのだという事実が、恐ろしく思えた。

「殿下は、巫女の到着を今か今かとお待ちです。どうぞ御足労下さい」

言つて、男は初めて顔をあげた。伶俐な顔立ちをした若い男であつた。二十かそこらだろうか。

「さあ」と男に促され、カグワは俄に迷つたが、いつまでもこの狭い部屋に閉じ込められていても仕方がないと判断して彼に従うことにした。彼の言葉がどこまで真実なのか、カグワには判別する術もないのだ。とりあえず動かないことには進めない。

そう決断したカグワが一步前へ踏み出すと、「三の君」と後ろの仗身が低い声をあげた。この見知らぬ場所でカグワを一人にすることを、案じているらしい。振り返つて「私は大丈夫よ」と彼を安心させようとして、ふと気が付いた。確かに、カグワに身の危険の生ずることはないかもしれない。手荒い方法ではあつたが、カグワのことを西の巫女と知っている以上、迂闊に手出しはしないだろう。??だが、ユタヤはどうだろう。

カグワの頭に、先ほどやってきた二人の下級兵士の姿が過つた。ユタヤを見るなり「化け物だ」「殺せ」と彼らが喚いたように、北の国にとって巫女であるカグワは要人であるうとも、ユタヤはただの化け物でしかない。このまま彼を置いて行ったら、何をされるかわからない。

「待つて」

氣付いたカグワは、カグワをどこぞへ連れて行こうと踵を返した男の背に向かつて声をかけた。

「ゆたやも……彼も一緒に連れていくわ」

「何……？」

前を歩く男が足を止めてこちらを振り返る。そしてカグワの後ろに控える獣の姿を見上げて、険しい顔をした。それが肯定なのか否定なのか、聞かなくともわかるほどに、険しい。カグワはそれでも

畳み掛けるように続けた。

「西の国の掟では、巫女の傍には必ず仗身が控えることになっているの。もしもその掟に従えないのなら……私は行けない」

きっぱりと言い放つと、男は眉根を寄せる。

「此処は西の国ではありません。北の国では北の国の掟に従うのが得策では？」

「勝手に招いておいて、従えと？ 折角此処まで来てあげたのだから、それくらいは譲歩するべきではなくて？」

実際には招かれたというよりも攫われたといった方が正しいほどの狼藉であったが、毅然と振る舞った。男は灰色の目を細め、口調を強める。

「北の国には獣人がおりません。宮殿の中を歩かせるわけにはいかぬのです」

負けじと、言い返した。

「なら、強制的に私を連れていきなさい」

背後の仗身が、獣の唸るような低い声で付け足す。

「巫女に手を出すようならば、その者を私が排除する」

主従の強い視線を受けて、男の目が揺らいだ。彼は眉間に皺を寄せたまま、「しかし」と困惑したように言いよどむ。

「再度申しますが、北国には獣人がおりません。宮殿の中に獣が現れたとなると、混乱を避けられぬ」

確かに、とカグワは下級兵士たちの反応を思い浮かべた。この姿のままのユタヤが歩くと、後宮の中でさえ嫌悪されるのだ。獣人を見たことのない場所では、どうなることか。彼の言葉には一理ある。

「なら……服を持って来て頂戴。彼は、人の形にもなれるから」

男は獣姿のユタヤを見上げて一驚したような顔をする。巫女には獣人が護衛として付くことを知りながら、彼が人にも獣にも変化できることは知らなかったらしい。

「それで問題はないでしょう？ よもや嫌とは言わないでしょうね

？」

強い口調で問うと、男はユタヤとカグワを見比べた後に、首を竦めて頷いた。

「しばし部屋の中でお待ちください。衣服を用意させましょう」

カグワはほっと胸を撫で下ろした。これでユタヤと離ればなれにはならずすみそうだ。

部屋の中で、と言った男はカグワを再び部屋へ戻すと扉を閉めようとした。恐らく彼女たちが逃げることはないよう、再びこの扉に呪を施すつもりなのだろう。

閉じられていく扉を眺めながら、ふと、カグワは男の顔を見て問うた。

「ところで、そうだ……貴方は誰？ 軍人さん？」

最初にこの部屋を訪れたのは、二人の下級兵士であった。ほとんど軍に食われてしまっているという北の国で、権力を持っているのは軍人なのだろう。現状をよく把握している彼も、その一人なのだろうかと思って問うた。すると、彼は「いえ」と笑って首を振る。

「私は、皇太子殿下の世話役しております。位で言えば、侯爵と同位の権限を持ちますが……巫女君よりは下位でございますゆえ、何でもお申し付けくださいませ」

「そう……名前は？」

北国の貴族の階級制度など知らぬカグワには、彼の位などどうでも良かった。ただ、彼を呼ぶための名前が知りたい。

名前を問われた男は、茶色の癖っ毛を垂れ、軽く会釈した。

「オレーク・ナイザーと申します。オレークともナイザーとも、なんともお呼びください」

## 6、封印

それから間もなくしてオレークがユタヤのために下級兵士の纏う物と同じ軍服を持って現れ、ユタヤは人の姿へと変化し、二人は狭い部屋を出ることを許された。

それまで二人の閉じ込められていた部屋は宮殿の地下に位置していたらしく、オレークに連れられて長い石の階段を上り続けて、ようやく地上階に出ることができた。

北国ラウグリアの宮殿は内側からでもわかるほど、恐ろしく頑丈な作りをしていた。何重にも重ねられた石造りの壁は分厚く、外の空気を頑なに遮断する。カグワは最初、それは敵襲に備えたものなのだろうと思ったが、ややあってそれだけが目的ではないことに気付いた。此処ラウグリアは、カグワの住む西国よりも遥かに北に位置している。冬はカグワの経験したことのないほどの極寒に見舞われるに違いない。この頑丈な壁は、冷たい外気を遮断するためのものなのだ。その証拠に、壁だけでなく窓も頑丈だ。二重に張られた硝子の窓は外気との温度差で結露していた。季節はまだ冬には遠いけれども、ここでは西の国のように気軽にひなたぼっこもできないのかもしれない。

宮殿の地上階へと出てから、オレークは王宮の敷地内の他の塔へと移動した。それまでいた塔には所々に警備を行う軍人がいたのに、何故か移動した先の塔の中には軍人の姿がない。時折すれ違うのは、小間使い風の男女のみだ。

「此処は、王宮内でも特に守られた場所…… 皇家の住まう、皇宮です」

前を歩くオレークがそう説明してくれた。おそらく皇宮内は、軍人は立ち入ってはならないことになっているのであるう。

皇宮に入ってから上へ上へと冷たい石段を上らされ、辿り着いたフロアはとても静かだった。荘厳であった。その階全体に、重い空

気が立ちこめていた。この階には皇家の中でも相当の権力者が住んでいるのだと、その空気からのみでもわかるほどである。赤い絨毯の布かれた道の途中に、金色の柱時計が置かれていた。一人の女中がその柱時計のゼンマイを巻いていたが、オレークとオレークに連れられたカグワたちの姿を見て、慌てて壁際に寄るなり頭を下げた。カグワには侯爵の位がどの程度のものなのかわかる術もないが、皇太子殿下の付き人である、オレークの地位もなかなか高いのであるう。

「こちらに??」

言ってオレークの示したのは宮殿の最奥、今まで通り過ぎて来たどの部屋の入り口よりも絢爛な姿をした扉であった。扉だけで、大した迫力である。カグワは思わずその扉を上から下まで眺めた。

縦に長いその扉の天辺は、遙か彼方二階分くらいの高さはある。

落ち着いた黒に近い緑を基礎に、金の装飾が幾重にも施されていた。オレークの握ったドアノブは、錆びない真鍮の色をしている。

「殿下、オレークです。西の国の巫女君をお連れしました」

オレークはその豪華絢爛な扉に頬を寄せて、部屋の中へと声をかけた。すると、間もなく、「入れ」と弱々しい少年の声が返ってくる。オレークは小さく「失礼致します」と礼をして、巨大な扉を押して開いた。

きい、と扉の軋む音がして、開いたその先は、見たこともない輝かしい空間であった。

カグワとて、聖女として後宮の中でそれはそれは大切に育てられて来たという自覚がある。聖女の住む宮も、豪華ではあった。だが、しかし、この部屋は遙かその上をいく。だだっ広く上品な空間に、白磁の風呂が置かれていたり、巨大な暖炉が控えていたり。そしてその部屋の中央に、紗幕のかけられた巨大なベッドが置かれていた。そのベッドの上に、一人の線の細い少年が、膝を立てて座っていた。

「オレーク」

紗幕の向こう側、ベッドの方から少年の声はするが、姿は見えない。暖炉の炎に照らされて線の細い体の影は見えども、その顔までは見えない。

「湯が湧いたと思うんだ。生姜の粉を溶かしてカップに注いでくれ」

少年の声に、「御意」と小さく頷いたオレークは、暖炉の方へと足早に駆けて行って火にかけられたポットを取り出す。そして小さなテーブルに乘せられたカップを乾拭きすると、言われた通りになにやら白い粉を取り出し調査しはじめた。

オレークに続いて部屋に入ったものの、居場所のないカグワはきよるきよる部屋の中を観察する。天井が高いなどどうでもいいことを思っていると、紗幕の向こう側から声をかけられた。

「君が西の巫女だね。こつち来て、座りなよ」

当然、西の巫女とはカグワのことだ。「座りなよ」と指示を受けたカグワは、しかしながら彼の言う「こつち」がどこなのかわからずに、戸惑いながら後ろを向いた。後ろには、カグワから一歩離れたところにユタヤが立っている。彼は部屋の中をひとしきり眺めて特に危険のないことを確認すると、豪華絢爛な扉の脇にひっそりと控えた。仗身である自分があまりでしゃばってはいけなかったのだらう。

「ほら、何をきよるきよるしてるんだ。こつちだよ、こつち」

紗幕の向こう側の声にせつつかれて、カグワは当惑しつつもベッドの傍へと近付いた。

大の大人が五人くらいは横になって眠られそうなほどの巨大な寝台の横にぐるりと回ると、なるほど、そこには緑色のクッションの敷かれた長椅子が置かれていた。他に座れるような場所もないので、きっと彼の言う「こつち」とはこの椅子のことなのだろうと結論づけて、カグワはゆっくりとそれに腰を下ろす。と、同時に、カップに生姜湯を注ぎ終わったオレークが、カグワの座った長椅子の脇の机にカップを置いた。

「殿下、こちらに??」

「ああ、うん。ありがとう」

簡単な礼を述べた後に、声の主が紗幕を内側から開く。初めて、その少年が姿を見せた。カグワは長椅子に座ったまま、まじまじとその素顔を見つめた。

とても線が細く、色素の薄い少年であった。年の頃は若く、カグワと同じ年かあるいは年下であろうか。流れるような白に近い金髪には癖がなく、肌も透き通るように白い。瞳は水晶のように青く、睫毛が弱々しく震えていた。

少年はゆつくりと置かれたカップを手にとると、上品な仕草で口へと運ぶ。一口飲んで彼はわずかに眉をひそめると、寝間着らしき白い服の袖で口を押さえた。

「……甘い」

オレークは、彼の小さな呟きも聞き逃さない。

「砂糖を投じましたゆえ……」

「今日はそんな気分じゃない」

「では作り直します」

「……いいよ。めんどくさい」

彼は、付き人だというオレークのことを放って、ベッドの端へと座り直した。開かれた紗幕の間から覗くその青い瞳が、まっすぐカグワのことを捕えて離さない。

「……名前は？」

とてつもなく単純で、短い問いかけであった。カグワは彼の作り出すなんとも妖艶な空気に飲み込まれないようにと気を張りながら、答える。

「かぐわ、よ」

「カグワ……姓はないの？」

「巫女には、必要ないから……あつたのかもしれないけど、忘れてしまったわ」

「へえ、羨ましいな……俺も姓なんて必要ないと思うんだけど、恐



ろしいくらい長い姓があつて」

にこ、と微笑んだその笑みに、息を呑んだ。綺麗な花には刺がある。彼の笑みには毒がある。

「長い、姓……？」

「覚えられないだろうから教えない。人は皆、シルディア皇太子殿下と呼ぶから、それだけ覚えておいて」

「シルディア……」

言われた通りにその名を繰り返すと、ぴくと青年の表情が反応した。彼の顔から毒気が消える。

「……俺、よくわからないんだけど……西の国では皇室と、巫女と。どちらの方が上位なの？」

その詰め寄るような強い口調に、カグワは困惑した。どちら、と問われても、まだ本当に自分が巫女になったのかどうかも怪しい、儀式の途中で抜け出して来たような身で、定かなことは答えられない。なので、通説により今まで教えられて来た通りに答えた。

「西国エウリアでは、皇室と巫女が連立しているの。国政の頂点が皇室なら、信仰の頂点が巫女よ。どちらもが国の象徴で、上下関係はないとされてるわ」

「ふうん……じゃあ、俺とも同等なのかな」

「さあ……それはわからないけど」

「そつ……いいね、悪くない」

皇太子シルディアは楽しそうに笑った。再び彼の顔に毒気が戻る。

「シルディア、なんて、久しぶりに呼ばれたよ……いつぶりだろう。もう覚えてないや。……うん、でも、悪くない」

北国ラウグリアは、今やほぼ軍に食われてしまっている。と、教えてくれたのはやはり、最西端の変わり者、ケニー老翁であった。彼いわく、今や政治の権限はほぼ軍が持っているというが、それでもまだかつての帝政を崩してはいないのだという。ゆえに、長年に渡って国を治めてきた皇室よりも地位の高い人間は、このラウグリ

アにはいないのだろう。皇太子である彼のことを、シルディアなどと呼ぶ無作法者などいないに違いない。

「シルディア、じゃあ、今度は私から質問させてもらうけど」

カグワは青年の持つ毒にあてられないよう毅然として、彼の名を呼んだ。カグワにとっては、相手が上位であるとか下位であるとか、そんなことはどうでもいいのだ。そんなことより、現状の説明が欲しい。

「私を、西の国から此処まで呼び寄せたのは、貴方の力なの？」

長椅子から身を乗り出すようにして問うと、シルディアは顔を傾けて、微笑んだ。金色の髪がさらりと揺れる。

「そうだよ。巫女は、西の国で最も『力』の強い存在だと聞いていたけど……大したことはなかったね」

カグワは大きくその目を見開いた。

カグワが思うに、もしもカグワが巫女であるなら、巫女は西の国で最も力の強い存在ではない。例えば一の君ネイティーンの方が巫力は強いはずだし、ひょっとしたら國中搜索すればもっと強い力を持つ人間がいるのかもしれない。しかしながら、今目の前にいるこの青年よりも強い力を持つ人間がいるとは思えなかった。時と空間を同時に操り、遠い他国にいる人間を呼び寄せるほどの『力』など、想像も付かない。？？人間業とは思えない。

「……一体、何が目的なの？」

カグワのことを巫女であると知りながら、巫女が西の国では最も強い力を持っていると判断して、その巫女をわざわざ呼び寄せる。宮殿の地下にて、オレークは、「西国がなかなか話し合いに応じてくれないから、強引に呼び寄せた」と言った。しかし本当に話し合いをしたいのなら、政治のことなどこれっぽっちもわからない巫女なんぞより、国務参謀や内大臣を呼び寄せればいい。なのに、わざわざ巫女を選んで呼び寄せた意図は？？何だ？

「さあね……俺にはわからないよ」

シルディアはあっけらかんと答えた。彼は「甘い」と切り捨てた

生姜湯を、すでに飲み干してしまっている。

「そういう難しいことは軍に聞いてくれ」

「私を呼んだのは、貴方でしょう？」

「軍に呼べと言われたからね。??今や皇室はね、木偶なんだよ。自分の意思でなんか動かない。全部軍の言いなりさ」

言って彼が空になったコップを差し出すと、無言でオレークがそれを取りにきた。オレークはなんとも複雑な表情を浮かべながら、コップを片付けた。どうやら、北国ラウグリアが軍に飲み込まれてしまっているというのは、事実らしい。

「だから、その軍の意思に沿って、俺、あんたの力を封じ込めなきゃいけないんだ」

「私の、『力』を……？」

そう、と頷く彼の微笑みは不気味だ。毒気がある。??この毒気は、恐らく彼の持つ『力』だ。相手を自分のペースに巻き込まんとする。

「俺にとっては君の『力』なんてどうってことない。でも、ほとんどの人間は『力』を持たないから、君に勝てない。『力』を利用して君に逃げられては困るらしいんだ」

だから、と言って彼はベッドの上を這うように移動した。そして床の上に降り立って、カグワの前に立つ。線は細いが、すらりと背の高い少年であった。彼はカグワの顔を撫でて、その顎を掴むとくいと上を向けさせた。カグワは自然と彼を見上げる格好となる。

「君の力を封印する。今までできたことができなくなるかもしれないけど、恐れる必要はない。封印を解けば元通りになるし、何より、『力』なんてなくなつて人は生きて行けるんだから」

力、すなわち巫力が使えなくなるとのことだ。カグワは思わず装束の襟元をきゅっと握り締めた。今までできたこと??先見の技であったり、読心の技であったり、そういった巫力の修行により身につけた技が使えなくなる。とは言え、彼の言うようにそんな力などなくとも、カグワは満足に生きて行けるだろう。だが、しかし。

ふとカグワは目線を逸らして、扉の脇に立つ己の仗身を見つめた。もしも、巫力を封印されたら、彼はどうなるのだらう。彼の獣の心は、カグワの『力』によって封じられている。

「待って！」

今にもカグワの『力』を封印せんと片手を持ち上げたシルディアを、カグワは慌てて制止した。首を横に振って、カグワは「ゆたやが！」と叫ぶ。

「ゆたやが……私の仗身は、私の『力』で獣の性を封じているわ」

「獣……？」

「彼は、獣人なの。だから、私の『力』を封印してしまったら、ゆたやが……」

「ふうん……？」

完全ではないカグワの言葉を聞いただけで、その意味を理解したらしいシルディアは、カグワから手を離すとゆっくりと今度は扉脇のユタヤの方へと向かって行った。ユタヤは己に近付いてくるシルディアを見て僅かな驚きを見せたが、それだけだった。微動だにせず、置物のようにその場に立ち尽くす。

何の感情も反映しないその形相を見上げて面白そうに笑ったシルディアは、彼の首に下げられている数珠玉を強く握った。これが彼の獣を封じていると気付いたらしい。ぐいぐいと数珠玉を引くと、ユタヤは怪訝そうな顔をしたが、何も言わなかった。シルディアは「なるほどね」と呟く。

「こっやって封じているわけか……なら、大丈夫。彼の獣も俺の力で封じる」

「え？」

どういうこと、とカグワがその言葉の真意を問うより先に、シルディアの体が動いた。彼は両手のひらでユタヤの数珠玉を握り締めると、くっとかやらの力を込める。端から見れば、ただシルディアがユタヤの数珠玉を軽く引っ張ったとしか思えなかったらう。??しかし、かつてその数珠玉に巫力を込めたカグワにはわかった。数

珠玉が揺れる。そこに込められた己の巫力が解放されていく。そして代わりに、シルディアの『力』で満たされて行くのが、鮮明なほどにわかった。

「うん……これで、問題はない」

ユタヤの数珠玉から手を離れたシルディアはそう呟いて、こちらを振り返った。背筋が粟立つ。彼の絶大な『力』を前に、戦慄が走った。

につこり微笑んだ彼はゆらゆらとカグワの元へ戻って来て、今度こそとばかりに、彼女の顎を持ち上げ額に手のひらを当てる。もう、抗う術はなかった。抗おうにも抗えない。彼の『力』は、強すぎる。

ぐ、と一瞬額からの圧力を感じた後、それはすぐに終わった。シルディアがふうと息を吐いて、すぐに自分のベッドへと戻る。彼はクツシヨンの上に片手を付くと大きく深呼吸した。たったこれだけの動作で、カグワの『力』は封印されてしまったらしい。

恐る恐る、彼の手のひらの当てられた額を撫でてみたが、体の外側からではよくわからなかった。ただ、なんとなく全身が重い。倦怠感のようなものに覆われていた。

「……これで、もう、君は『力』を使えない」

ベッドの上から、掠れた声がする。彼の方を見やると、それまでも線の細い少年だとは思っていたものの、さらに弱々しく、まるで病人のような顔色をしていた。強大な力の持ち主ではあるが、さすがに二人分の『力』を封じるのは楽ではないらしい。

「その獣人……ユタヤと言ったか。お前もだ。……自由に獣にはなれない」

言われて初めて気付いたように、ユタヤは目を丸くした。彼は己を縛る数珠を握り締めて、それから悲哀に満ちた目でカグワの方を見る。これではカグワのことを護れない、と、彼の考えていることはその目を見ただけで読み取れた。カグワはすでに巫力の技は使えないが、そんなものなくとも、彼の心の内は読み取れた。大丈夫よ、

と彼を安心させるために首を横に振って伝えると、ユタヤは目を伏せる。彼も技など使えないが、カグワの心を面白いくらいに読み取ってくれる。

二人のその無言のやり取りを眺めていたシルディアは小首を傾げ、覇気のない目でちらりとユタヤの方を睥睨した。

「あの男は…… 仗身だと言っていたね。つまり、何、護衛なのか？」

ユタヤを睨んだ瞳で今度はまっすぐとカグワを見つめる。全く覇気のない瞳なのに、不思議な威圧感を感じた。

「そうよ…… 巫女には必ず護衛として仗身が付くの。そしてそれは獣人と決まっている」

「それで、巫女は獣の性を封じるのか……」

なるほど、と呟いた彼は首の裏をかいて、ころりとベッドの上に横になった。どうやら体は疲弊しきっているようだ。

「俺にとつてのオレークみたいなものかと思ったけど、違うみたいだね。オレークは付き人だからなんでもやってくれるけど…… ただの付き人だから縛られることもない」

縛られる、というその言葉の響きが気になった。カグワは彼の獣を封じているだけで縛っているつもりなど毛頭なかったが、結果的には束縛しているようなものなのかもしれない。

「…… 殿下、今日は、もう」

今までユタヤ同様貝のように押し黙っていたオレークが、此処で初めて口を開いた。彼は疲弊しきったシルディアを案ずるように「これ以上は」という。するとシルディアもそれに反発することなくベッドの上に転がったまま頷いた。

「そうだな…… さすがに疲れた。??二人を部屋へ案内して」

「はい」

オレークはシルディアのいる寝台に向かって軽く頭を下げて、それから出口の扉へと向かった。巨大な扉を引いて、今度はカグワの方へと頭を下げる。もう部屋を出なくてはならないのだと悟って、

カグワは立ち上がった。ベッドを囲む紗幕が閉じられ、もうシルディアの姿は見えない。

「ああ、そうだ、それと、一つ」

部屋から出ようと出口に向かうカグワの背に、紗幕の向こう側から声がする。弱々しいが、はつきりと響く声だった。

「本当は巫女一人を呼ぶ予定だったから、部屋は一つしか用意していない。欲しいようならもう一部屋用意させるけど、皇室と連立するほど高位な巫女と、その護衛を並べて部屋を用意させることはできない。必然的に距離が離れてしまうけど、どうだろう？」

カグワは眉間に皺を寄せる。何故か、試されているような気がした。

「??? 部屋は一つでいいわ。西の国では同じ屋根の下にいたから」  
西の国、エウリアの後宮では、確かに二人は同じ三の宮の屋根の下にいた。しかし、当然ながらカグワには聖女の部屋があり、ユタヤには仗身の部屋があったわけで、同じ部屋に共存していたわけではない。だが、この見知らぬ北の地で離れなければならないには不安が多すぎた。故に、部屋は一つでいいと言い切った。

そんなカグワの決断を知ってか知らずか、「そう」とシルディアは端的に答えた。それきり、何も言わなかった。

こちらへ、とオレークがカグワを外へと誘導する。カグワは去り際にちらりと皇太子殿下の寝ているであろう寝台を一瞥した。が、紗幕に遮られ、何も見えない。カグワはそれきり彼のことを振り返らなかった。生まれて初めて巫力を封じられ、倦怠感のみが残った。

## 7、北国の朝食

空を見上げる。雲行きが怪しい。今にも崩れ落ちそうな曇天の下、歩く人間は寒そうに肩を震わせる。

暦でいうと、今はまだ秋である。西国エウリアの後宮では、秋とは涼しく心地の良い季節であつた。作物が実り、新鮮な食物に溢れる。甘い果実を口に運びながらひなたぼっこのできる、そんな季節であつた。

しかしながら、此处、北国ラウグリアにはそのような心地の良い秋が来ない。王宮の二重に仕切られた窓ガラスは、外から流れ込む寒気を防ぐためのものだという。今はまだ秋だから良いが、これから訪れる長い冬は、分厚い外套を纏つたとて凍え死ぬ。守られた王宮の中は良いが、毎年貧しい民の中からは雪に埋もれて凍死する被害が続出するのだそうだ。

「……だから、北の民は軍人になるのかしら」

冷えきつた硝子製の窓に手のひらを乗せて、カグワはぽつりと呟いた。暖炉脇に座っていた仗身が顔をあげて、「はい？」と聞き返してくる。カグワは「大したことじゃないから」と首を振って窓を離れた。自分の触れていたところにくつきりと手形が残つた。

カグワとユタヤが時空の狭間を抜けてこの北国に来てから、今日で五日が経とうとしていた。

二人に与えられた部屋は皇太子シルディアの物ほどではないが、恐ろしく絢爛であり広く、女中や小間使いが度々現れ身の回りの世話は全て行ってくれた。「逃げられては困る」という理由で巫力を封じられたにも関わらず、皇家のために造られたというこの皇宮の中であれば自由に動くことを許されており、初めて北国に来た時のように扉に呪いがかけられていることもなかった。

暖炉の火で暖を取り、美味な北の料理をもてなされ、何をしてもいいと許容される。何一つ不自由のない生活であつたが、未だに力



グワは最初にシルディアと出会って少し話をした以外に、一人の北の要人とも話をしていない。「西の国と話し合いをするためにお呼びした」と言ったのはオレークだ。だが、ならばどうして、此処に来て五日も経った今でも、軍人の一人も現れないのだろう。

こんこん、と扉を叩く音がして、続いて「失礼します」と若い少年の声がした。「どうぞ」とカグワの告げた後に部屋に入ってきたのは、小間使いの少年だ。どうやら彼はカグワの世話全般を担当しているらしく、何かとカグワたちの部屋に来ては食事の用意や掃除、その他何でも行ってくれた。

「朝食の用意ができましたので」

少年はそう告げて、銀色のワゴンに積んで来た食事を机に並べ始めた。空は一面曇天であるが、そろそろ朝日も高く昇って行く頃だ。

カグワは小間使いに「ありがとう」と短い謝礼を述べると、彼の作業の邪魔にならないようにと部屋の端に避ける。同じく部屋の端、暖炉の傍にどっかり腰掛けていたユタヤの隣にちょこんと座ると、膝を抱え、慣れた仕草で彼の肩に寄りかかった。ユタヤもユタヤで慣れたもので、今更カグワが全体重をかけてきたとて何も言わない。どつしりとあぐらをかいたまま、小間使いが忙しく働くのを見つめていた。

「……もう、此処にきて、五日になるわね」

体重をユタヤに預けたままの体勢で呟くと、彼は「はい」と小さく頷く。

「エウリアは……西の国は、今頃どうなっているのかしら」

続けて呟いたカグワの言葉に、ユタヤは何も答えなかった。答えられなかったのだろう。なにしろこの皇宮から出られない閉鎖的な状況で、今の二人には情報源がない。

エウリアからこの北の国まで飛ばされたあの日、カグワは巫女選定の儀式の中にいた。儀式は最中であつた。まだ終わってはいない。カグワのいなくなった儀式の間は、あの後どうなったのだろうか。

カグワが儀式の中で最後に見たのは、水鏡の中から浮かび上がった謎の光の玉であった。それがカグワの手の中へと落ちて、その次の瞬間にはこの北の国まで飛ばされてしまった。ゆえに、カグワが巫女であるという確証はまだない。本当はあの後まだ別の選定の儀式があつて、今頃カグワのいない西の国では別の聖女が巫女として選ばれているのかもしれない。だとしたら、北の国は西の巫女を呼び出したつもりで何の変哲もないただの少女を呼び出したということになる。西の国では今頃新しい王が起ち、新しい巫女も決まり、祝祭が催されているのかもしれない。誰も、カグワのことなど気にも留めていないのかもしれない。

??それならそれでもいい、とカグワは思った。

カグワがいなくなつたことで西の国が混乱に陥っているよりは、ずっといい。変わり者の聖女だとずっと言われて育つたが、他人に迷惑をかけたいと思ひそうしていたわけではなかった。変わり者は自分だけでいい。誰にも迷惑などかけずに自由に生きるのだと。

「??準備が整いましたので、冷めないうちに」

机上に料理を並べ終えた小間使いが言った。物思いにふけつていたカグワは我に返つてユタヤに預けていた体重を起こして立ち上がる。一人で使うには大きすぎる広い机の上に、やはり一人で食べるには多すぎる量の料理が並べられていた。

「ありがとう」

謝礼を言つと、言われた小間使いは照れたように笑つた。??彼は普段、皇室の世話をしているのだという。しかし、北ラウグリアの皇室の人間は、小間使いに礼など言わない。ゆえに初めてカグワに謝礼を言われた時にはぼかんとしていた。「ありがとうなんてお礼を頂けたのは初めてです」と。

小間使いの引いてくれた椅子に座つてユタヤの方を見やると、彼も無言で暖炉の脇から立ち上がった。それは、一緒に食べようという合図だ。ユタヤは無言のまま、カグワと対面する椅子に座つた。

初めて小間使いがこの部屋に来た時、彼は大層驚いていたもので

あった。なんでも、上からは「部屋には西の巫女が一人いらつしやる」としか伝えられていなかったらしい。そのため彼は、巫女らしき少女の傍に、謎の数珠玉をかけた男が控えていたことに愕然としていた。そして恐らくそれは、皇太子シルディアの配慮だろう。

シルディアは、カグワをこの部屋に案内するに当たって、言った。「本当は巫女一人を呼ぶ予定だったから、部屋は一つしか用意していない」。もしもユタヤに部屋を用意するとなると、位の低い仗身ゆえに巫女や皇室の住まう皇宮には置けないがそれでも良いか、としかしカグワはこの見知らぬ場所で彼と離ればなれになることを不安に感じ、部屋は一つでいいと答えた。シルディアはそれを承諾した。??シルディアは、ユタヤのことを他に伝えなかったのだろう。もし伝えてしまったら、皇室のしきたりに倣ってユタヤは部屋から追い出されてしまうから。

なので、今のところカグワの部屋にユタヤがいることは、カグワとシルディアと付き人のオレーク、そしてこの小間使いしか知らない。それでもきちんと二人分以上の料理を持って来てくれるのは、この小間使いの心配りだ。

「お食事が終わりましたら、また食器を片付けに参りますので」  
小間使いは言って、頭を下げた。そして慣例通り去っていきこうとする彼に、カグワは「待つて」と言って声をかける。「はい？」と振り返ったその顔はとても純朴だ。??カグワはまだ出会って五日しか経っていないこの若い小間使いをとても気に入っていた。彼は屈託なくいろいろなことを話してくれる。だが、皇室のしきたりを遵守して、仕事が終わるとすぐに帰ってしまうのでとても残念に思っていたのだ。

ゆえに、

「せつかくなら、一緒に朝食をとっていかない？」

少しでも話をしようではないかと思い、誘ってみた。すると、小間使いの目がみるみるうちに見開かれていく。彼は慌てて首を横に振った。

「……め、滅相もございません！ わたくしごとき小間使いが、巫女様と同座するなど……！」

これも、北ラウグリア国の皇室での慣習なのだろう。皇室の人間と小間使いの間には確かな位の差があつて、それは同席すら許されないほど過大なものである。

とは言え、考えてもみれば西エウリア国でも、聖女たちとその女中たちは決して同じ席で食事などしなかった。しないことが慣例とされていた。それは女中だけでなく当然仗身にも言えることで、カグワの他に、気軽に自分の仗身や女中と食事をしたり会話をしたり、身分を越えた接し方をする聖女はいなかった。なので、カグワが異端なのだと言つてしまえばそれだけのことである。此処がエウリアであれば無理を通して同席させるのであるが、生憎此処は他国だ。あまり無理強いはいくれないなと思ひ直して、カグワは俯いた。

「そう……残念だわ」

身分など気にせずに、多勢で囲む食卓の方が幾分にも楽しいと、カグワはそう思っているのだが。カグワが楽しくとも、気を遣いながらとる食事は彼らにとっては美味しくないのかもしれない。ならば、やはり無理強いしても仕方がない。

「わたくしどもは、朝早くから仕事がありますから、その前に朝食を取っておりますし」

カグワの残念そうな顔を見て、小間使いは困つたように付け足した。カグワは「そっか」と言つて笑う。あまり困らせてしまつたらそれはそれで可哀想だ。

まあしょうがないなと考え直して「おかしなことを言つてごめんなさい」とカグワは小間使いに謝ろうとすると、彼女が口を開くより先に、その言葉を遮つたのは対角に座る仗身であつた。

「??? 食事は取らずとも、一緒に茶くらい飲んで行けばいいだろう」

その低い声色に、小間使いは驚いたように身を震わせる。そういえば、小間使いのいる前でユタヤがこうもしつかり口を開いたのは

初めてであった。ユタヤはカグワと二人きりの時こそ積極的に声を発するが、そうでない時は発言を控えて、必要な時以外は口を出さない。

「身分がどうか言うのなら、私がこうして巫女君と同席していることも妙だ。??折角、巫女君が会食をご所望なのだ。仕事がたてこんでいるならまだしも、我々が食べ終わるのを待つだけなら座っていけ」

「はあ……」

小間使いは目をぱちくりさせた。謎の「仗身」と名乗る男が突然口を開いたかと思えば随分と強引な誘いをしてくるのだから、驚いて当然だろう。

そしてそこまで言われたら断るわけにもいかない小間使いは、空いていた椅子をひいてちよこんと座ると、「では、お言葉に甘えて」と戸惑うように笑った。その様子を見て、カグワは思わず噴き出す。

「そんな無理矢理付き合わせたら可哀想よ、ゆたやあ。彼もひよつとしたら休みたいかもしれないし」

もとはと言えば自分が誘ったわけであるが、ユタヤの強引さ思わず同情した。「ねえ？」と声をかけると小間使いは「いえ、大丈夫です」と首を振る。向かいに座るユタヤは「しかし……」と言いよどんでしゅんとした。彼としてはカグワを思つてのことだったのだろう。昔からカグワが出会った全ての人々と親しくしたがることは彼もよく知っている。

そんなユタヤと笑っているカグワを見比べて、小間使いは両者を気遣うように「まあ」と口を開いた。

「私のお仕事は、巫女君をおもてなしすることですから、私などが同座してご気分を害されることがないのであれば、むしろ本望です??どうぞ、料理の冷めぬうちに召し上がってくださいまし」

少年は、とても大人びた配慮をする。カグワは「そうね」と笑った。せつかく彼の用意してくれた料理が冷たくなってしまつてはも

つたいない。

カグワは銀のフォークを握り締めて皇室の物と同じだという豪勢な料理を食べ始めた。それを見て、ユタヤもほっとしたようにフォークを手取る。にこと笑った小間使いの少年は、二人の邪魔にならないようにとユタヤに言われた通り自分の分のお茶を入れた。そういう細やかな気遣いから、さすがに皇室の小間使いだなと思う。

「ところで、貴方の名前を聞いてなかったわね。お名前は？」

今まで彼とは本当に最低限の世間話しかなかったために、まだ名前すら聞いていなかった。聞かれた少年は、嬉しそうに微笑んだ。

「ユーリ・マルコフと申します。よろしくおねがいします」

ユーリはカグワやユタヤの食事の速さに合わせてゆっくりとカッブを傾けながら、カグワの話に付き合ってくれた。西の国の後宮の中で囲われて育ったカグワにはわからないこと、聞きたいことが山のようにあった。恐らく外の世界で育ったユーリにとってはあまりにも当たり前すぎて、答えるのも面倒な質問ばかりであったに違いない。しかしユーリは嫌な顔一つせずに、カグワの会話に付き合ってくれた。

「ユーリはいつからこの宮殿で働いているの？」

「生まれた時から……生まれた時より働いていたわけではありませんが、私は生まれた時から皇家のお世話をするために育てられました。ラウグリアでは、皇室付きの小間使いは代々世襲と決まっているのです。ですので、私の父もそのまた父も、ずっと小間使いをしていました」

「ふうん……じゃあ宮殿の中にはユーリみたいな小間使いがたくさんいるのね」

「そうですね……ですが、皇家の小間使いと一口に言っても、

その役割は様々です。例えば私は、カグワ様のような皇家の賓客をもてなすことが役割です。他にも食事をつくるために厨房にいる者もおりますし、宮殿の掃除を専門にする者もおります。そして出世すれば、皇家の付き人になることも」

「付き人……？　じゃあ、オレークは出世したっていうこと？」

カグワは皇太子シルディアの付き人をしているという青年を思い浮かべた。まだ若いように見えたが、皇太子の付き人をしているということとはかなりの出世頭なのではないだろうか。

「はい。オレーク・ナイザーはまさに一番の出世頭ですね。もともとは私と同じ賓客のおもてなしをしていたんです」

「へえ。なら、オレークとは知り合い？」

「知り合いも何も、私にとっては兄貴分でした。突然の出世に驚愕していたことを、今でもよく覚えております」

ふうん、と呟いてカグワは白いロールパンを口に含んだ。だから、ユーリが自分の小間使いとして選ばれたのかもしれないと、カグワはぼんやり思った。皇太子の付き人であるオレークの弟分ということとは、それだけ皇太子からの信任も厚いということだ。例えばカグワが部屋に自分の仗身を隠して置いておいたとしても、目を瞑ってくれるわけである。

「皇太子殿下の付き人だものね……皇太子殿下は、皇家の中でもやつぱり、地位の高い方なのでしょう？」

「それはもちろん。……本来は皇帝陛下が君主としてこの国を統治するわけですが、現在ラウグリアの皇帝陛下は病に臥せっておりますから……実際、統治しておられるのはその第一子であるシルディア殿下です」

「まあ、そうなの？　じゃあ、私はシルディアと話し合いをすればいいのかしら？」

「話し合い？」

「ええ、そう。突然私がラウグリアに呼ばれたのは、西国の要人と話し合いがしたいからだって、聞いたから……今、実権を握ってい

るのはシルディアなんでしょう?」

「ああ、なるほど……。では恐らくそれは、殿下ではなく、將軍ではないかと」

「將軍?」

「はい。確かに国土を統治するのは皇室の役目ですが、今ラウグリアの国政の実権を握っているのは軍です。その長となるのが、將軍ですから」

ふわふわに焼かれた卵を食べながら、カグワは西国でケニー老翁に聞いた話を思い出した。??ラウグリアは今や、軍隊に食われてしまっている。

「聞いたことがあるわ……。昔、ラウグリアは貴族の支配する国だったんだって。今は軍人の支配下だけれど」

「そうですね。今から二十年近く昔のことです。軍が力を持ち出し、それから、ラウグリアはずっと戦を続けております。東の国を占拠せんとして」

「戦……」

カグワは一度も戦というものを実際に目で見たことがない。ただ、それはたくさん罪のない人々の命を奪うそれはそれは凄惨な行為なのだと、知識のみで知っていた。もしも聖女に選ばれることがなく、もしも難民として西の国へ国境を越えることもなく、もしも今尚東の国にいたならば、カグワもまた、その戦の業火に焼かれていたのかもしれない。カグワは遠い東の地を想った。??それから、今やカグワにとって紛いなき故郷である西の国を想う。

「やっぱり……。北ラウグリアは、西エウリア国とも戦をするつもりなのかしら」

とても不吉な予感が走った。

カグワが突然時空の狭間を突き抜けてこの北の国へ呼ばれた真意は、一体何なのだろう。本当に巫女と話し合いをしたかったというだけならば、その旨を西国に伝えればいい。わざわざこのような強引な手段を取る必要などなかったのではないか。それに、話し合い



をしたいと言いながら、カグワはこの五日間この部屋から出ることを  
さえないではないか。??北国の意図がわからない。

そんなカグワの心を読み取ったのか、ユーリは困り果てたように  
目線を伏せた。

「軍の考えることは……私にはわかって術ありません。ただ……」

少年は一度言葉を切って、やがて強い眼差しで窓の外を睨みつけ  
た。その目の先には外の景色ではない、何か別のものが映っている。

「軍は軍のみの力ではなにも成し遂げることができません。やつら  
は、皇太子殿下の『力』を利用しているのです。??やつらは、殿  
下がいなければ、何もできない」

『力』、とカグワは小さく繰り返した。

確かに、シルディアの『力』は絶大であった。カグワを西の地か  
ら此処まで召還したこともそうだ。カグワの巫力や、ユタヤの獣の  
心を同時に封印していることもそうだ。ここまで圧倒的な『力』の  
強さを見せつけられると、今まで自分が何年も行ってきた巫力の修  
行とは一体何だったのだろうかと思ってしまう。きっとこれから一  
生巫力の修行を続けたとて、彼には到底追いつけまい。

そんなことを思いながらカグワがフルーツにフォークを伸ばした  
のと、金の装飾の施された立派な扉が外側からこんこんとノックさ  
れたのは、ほぼ同時であった。

「??オレークです。巫女君、失礼してもよろしいでしょうか」

噂をすればなんとやら、である。シルディアと会ったのも五日前  
のあの一度きりならば、彼の付き人であるオレークとも五日ぶりで  
あった。

さほど昔のことではないけれども、久しぶりだなと思いながらカ  
グワは「どうぞ」と軽く声をかけた。隣に座っていたユーリが何故  
だかとても焦っている。オレークは兄貴分だとその親しさを告白し  
たわりに、どうして彼に怯えるような素振りを見せるのだろうかと

カグワが不思議に思った時にはすでに、「失礼します」という声とともにオレークが扉を開いて中に入って来ていた。

相変わらずの茶色の癖つ毛を持つ彼は、「巫女君」とまずカグワに声をかけてから、そこにいるユーリに気付いたように目を丸くした。

「ユーリ、お前……何をしている？」

「え、あ、の、これは、その……」

オレークを見上げたまま言葉に困窮しているユーリと、そんなユーリを険しい顔で睨みつけるオレークを見て、カグワはようやく理解した。??ここ北ラウグリアでは、皇家の人間と小間使いが同じ机に付くことなど有り得ないのだ。そして巫女は皇家と同位なのである。

「違うのよ、オレーク。私が一緒にお茶でもどう？　って誘ったの」

こんなことでユーリが叱られてはあまりにも可哀想だと、カグワは彼のことを庇った。それでも「しかし」と険しい顔をするオレークは、生粋の皇室に使える小間使いなのだろう。小間使いは世襲だと言うからには、オレークも生まれた時から身分をわきまえると叩き込まれて育ったに違いない。カグワは重い空気を払拭するために肩を竦めた。

「ユーリは断ったのよ。でもゆたやがね、巫女と食べる朝食はまずいとしてもいいのか無礼者って脅すから、仕方なく座ってるの。許してあげて？」

「……私はそこまで申しておりません」

人前では滅多にカグワの言葉に口を挟まないユタヤが、ぶすつとした顔でぼやいた。堪らず、ユーリが嘔き出す。オレークはますます険しい顔で「ユーリ」と諷めた。カグワはこの場を和ませようと思っただが、逆効果だったようである。

「オレーク、ごめんなさいってば」

ここは素直に謝っておこうとユーリの兄貴分だというその青年に

向かって手のひらを組んでみせると、オレークはたちまち困惑した表情を浮かべた。おそらく北国の皇家には、目下の人間に対してこつもざつくばらんに話す者などいないのだろう。

「……まあ、西には西の文化がありましょう。少々北のしきたりにこだわらずでいたようです。私の方こそ取り乱してしまい申し訳ございません」

オレークはカグワのざつくばらんさを西の文化と理解したらしく、軽く頭を下げた。これで食事の席に同座したユーリも叱られることはあるまい。実のところは西の国でもカグワ以外の聖女であれば小間使いが同座など考えられないのであるが、まあそれは黙っておこう。

「話が逸れてしまった……。巫女君、本題でございますが」

オレークは思い出したようにきりと姿勢をただと、食卓に座っているカグワの傍に膝をついて頭を下げた。徹底して礼儀を尽くす男である。

「シルディア殿下が巫女君とお話したいと申しております。今すぐというわけではございませんが、今日中にお時間を頂ければと思います」

「そんなの、いつでも構わないけど……」

と、言うよりも、他にやることもない。毎日部屋の中でぼんやりと西の国を想っているだけなのだから、時間などいくらでも有り余っているというものだ。

「では、お食事が終わりました、準備が整いましたら、そのユーリを使って私めにご連絡ください」

お食事中に失礼致しました、と深々頭を下げて、オレークは要件だけ告げると早々に部屋を出て行った。カグワはその後ろ姿を目で追う。彼はこれから主である皇太子シルディアの元へ戻るのだろうか。その行き先はわからない。

なににせよ、これでようやく「話し合い」とやらができる少々安堵した。ユーリは「話し合いを求めているのは皇太子殿下ではな

く將軍だ」と言っただけでも、カグワは今のところ將軍はおるか軍人の一人にも会っていない。会うのは皇室の人間とその小間使いばかりだ。

早く用事を済ませて西の国に帰ることができれば良い。西の国がどうなっているのか、途中で抜け出してしまった巫女選定の儀式がどうなったのか、気になることは山ほどあった。

少女は依然、自分の置かれた状況が緊迫していることに、気付いていない。

## 8、人質の巫女

食事が終わると、ユーリが机の上を綺麗に片付け銀のトレーを使って食器類を全て持ち帰ってくれた。

「お話できて楽しかったです」と社交辞令かもしれない感想を述べてにこりと笑った彼が部屋を去り、オレークに連絡をしてくれたかなと思う頃になって、数人の女中が部屋へやってきた。なんでも皇太子殿下に謁見するからということで、正装のドレスを用意してくれたらしい。北国の正装服は、西国のそれと比べて分厚く暖かったが、とても重かった。

その後再びユーリが戻って来て、きちんとカグワの準備が整ったことを確認すると、ようやくオレークが現れた。そして、シルディア殿下に会いに行くという。皇太子殿下に謁見するには、本来なかなか面倒な準備が必要らしい。

オレークに連れられ、カグワとユタヤはひたすら階段を下った。もともと二人にあてがわれた部屋は最上階にあったため、どこに行くにしても下らなくてはならない。

冷たい石塔の階段をひたすら下った後、二人は中庭を通り抜ける外の通路へと案内された。

「一瞬ですが外へ出ますゆえ……寒気にお気をつけて」

静かなオレークの忠告通り、外の空気は本当に冷たかった。西国で味わう真冬と同等の寒さではないかと思う。思わずカグワが身を震わせると、ユタヤが気遣うように己の羽織っていたマントを差し出した。「一瞬だから大丈夫」と断るが、彼は無言でカグワにそのマントを被せた。

そんな二人のやり取りを見て、くすと笑ったのは前を歩くオレークである。彼は霜柱の立った地面をしゃりしゃりと踏みしめながら、前を向いた。

「今はまだ秋ですから、さほど大した寒さではありません。……こ

れから訪れる冬は、こんなものではないですよ」

そう言って前を歩くオレークは、大した装備もしていないのに毅然として、寒さを感じさせない。この程度の寒さなどどうということもないと言わんばかりに、堂々としている。カグワはユタヤのくれたマントの前をたぐりよせてしつかりと防寒しながら、冷たく灰色に染まった空を見上げた。

「……北国ならではの苦労があるわね」

「……いかにも」

「だから、気候の暖かい東国と戦をしたの？」

直裁すぎる問いかけをすると、オレークは俄には何も答えなかった。カグワも返答を期待して投げかけたわけではない。ただ、この冷たい空気の中に晒されて、戦火にも晒される民を哀れに思っただけのことである。

オレークはそんなカグワの内情を知ってか知らずか、しばらくその問いかけについて考え込んだ後、小さく呟いた。

「私どもには……軍の考えることはわかりかねます」

それは先ほど朝食の席でユーリと話をしていた際にも聞いた言葉だ。彼らは揃って言葉を濁す。皇室の中には軍の意図など本当に読めないのかもしれないし、読めても本望ではないのかもしれない。あるいは、単に言葉を濁しているのか、カグワには判断し難いところであるが。

「今、この国は軍が仕切っているのだものね。……私、てつきり謁見するなら將軍が相手なのだと思うていたわ」

「將軍が？」

「さっきユーリに聞いたの。西国に話し合いを求めたのは皇室ではなくて軍だろう、って。だから謁見するならシルディアじゃなくて將軍が相手だって」

「……ユーリはそんなことまで話したのですか」

言っただけでオレークが渋い顔をする。それを見て、しまった、とカグワは口を押さえた。ひょっとしてこれは聞いてはいけないことだっ

たのだろうか。少女は「私が聞いたのよ」と慌てて付け足そうと口を開いたが、それより先にオレークが口を開いたために言葉を飲み込む。

「恐らく……ユーリの言う通りでしょう」

「え？」

飲み込んだ言葉の代わりに、間の抜けた声が出た。前を歩く男は振り返らないため、その表情が見えない。ただ淡々と寒空の下を進み、中庭を通り抜けた先にある石造りの建物の扉を開いた。きい、と錆びた金属の音がする。

「シルディア殿下とのご面会という口実で、巫女君をお呼びしましたが……謁見の場には、將軍も列席するものと思われます」

「……そうなの？」

どうぞ、と開いた扉を押さえてオレークが建物の中へと誘導してくれるので、石段を上がって中へと足を踏み入れた。途端、温かな空気に包まれる。室内外の温度差が激しい。

「巫女君をこうして北国まで呼びしたこと自体そもそも殿下のお考えではない。軍からの要望ですから……巫女君にお話があるのも殿下ではなく、軍の方でしょう」

「なら、最初から將軍の謁見だと言えばいいのに。どうしてシルディアを挟むのよ」

「それは、巫女君の御力を恐れてのことではないかと」

「私の、力……？」

「西国では巫力と呼ぶのでしたか……將軍も微力ながら『力』の持ち主ではあります。が、巫女君には及ぶべくもない。そこで、巫女様の『力』の干渉を防ぐために、間に殿下を置いて面会するつもりではないかと」

「將軍も『力』を持っているの？」

「ええ……。ここ北ラウグリアでは、軍の司令部のほとんどは多かれ少なかれ『力』を保持しています」

「へえ……。だったら軍の司令部だけで面会すればいいのにね。だ

って私は今、巫力を封じられているんだもの。どう考えたって、司令部全員で来られたら勝てっこないわよ」

「それは……どうでしょう。巫女君は今、『力』を封じられているとは言え、それはすなわち『力』を発揮して使えない状態にしているだけのこと。保持していることに変わりはありません。強大な『力』を持つ人間は、『力』ゆえに周囲に影響を及ぼす。……周りの凡人どもは、『力』にあてられてしまうのです」

「あてられる？ 毒みたいな言い方をするのね」

「あながち間違いではないでしょう。……かくいう私も、殿下の力にあてられっぱなしだ」

言って、オレークはふんと自嘲するように笑う。シルディアの顔を思い浮かべて、カグワもなんとなく「『力』にあてられる」という意味がわかったような気がした。

シルディアと出会って話をした時、カグワは何度も背筋がぞつとするような、妙な「毒気」を覚えた。彼が喋るたび、彼が表情を変えるたび、ぞつとする。なのに目が離せず、言葉に聞き入ってしまったのだ。カグワは毅然と姿勢を正してその毒気に太刀打ちせんと気張ったが、これで全く巫力を持たない凡人であつたなら、気張ることもできずに飲み込まれていたのかもしれない。とは言え、シルディアと同じく『力』を持つカグワにも、あんな「毒気」があるとはとても思えないのだが。

カグワは前を歩くすらりと背の高いその長身を見上げた。まっすぐと上品なその姿勢にも現れているように、この男は礼儀正しく律儀だ。シルディア殿下の付き人に任命されてから、ずっと彼に尽くしてきたのだろう。『力』にあてられても致し方ないというやつだ。

「オレークは……」

「はい」

「何年くらい、シルディアの付き人をしているの？」

「……は」



「最初からずっとシルディアの付き人をしていたわけじゃないんでしょう？ 殿下の付き人に任命された時はそれはそれは驚愕していたって、ユーリが……」

「ユーリが？」

あ、とカグワは口を噤む。また余計なことを言ってしまっただろうか。

「私が根掘り葉掘り聞いたから。ユーリも無視するわけにはいかなからって教えてくれただけで……！」

カグワが慌てて補足し彼のことを庇うと、オレークはわずかにこちらを振り向いて、柔らかい微笑みを浮かべた。くす、とまるで子供を慈しむような笑いである。

「別段……ユーリを怒っているわけではありませんよ。どうぞご安心を」

「そうなの……？」

「ええ……ただ、巫女君は変わっておられるなと」

「……よく言われるわ」

変わり者の聖女、とは後宮でのカグワの呼び名であった。自身では変わっているつもりはなくとも、周囲はそう言う。西国でもそうなら、北国でも同じだ。

「私はかれこれ三年ほど、殿下の付き人、すなわち世話役をしております。短くとも長い月日を殿下とともに過ごしてまいりました。

西国一の『力』の使い手、巫女がくると聞いて……私は、てっきり殿下のような御仁が来られるのだと思っておりました。ですが……」

言いながら、オレークは白磁の階段をのぼる。きらびやかな内装の先に、巨大な扉が見えた。扉の脇には兵士が二人、その中を警備するように立っている。?? 恐らくは、あの先が謁見の間だ。

「ですが、巫女君の『力』は、毒というよりも……まるで日光のようだ。眩しさに目がくらみ、その暖かさに油断して服もなにもかも脱ぎ捨てて裸になってしまふような…… 実のところは、毒よりも恐

ろしいかもしれない、不思議な『力』であります」

「……」

ありがとうと喜ばいいのか、心外だと怒ればいいのか、どうしていいのかわからず、カグワは口を閉ざした。

そうこうしている間に、謁見の間の入り口と思われる扉の前へと辿り着き、オレークがくるりとこちらを振り返って深々と頭を下げた。

「こちらに?? 殿下がお待ちです」

言われて足を止め、カグワはその高い扉を見上げた。重々しい風体のその先に、シルディアと将軍がいる。自分が今、西の国を背負っているのだと思うと、緊張よりも寒気がした。それがこの北国の冷気が原因でないことは、明確である。

「巫女以外は中に入る事は許可されておりません」とオレークに言われ、入り口の扉の前でユタヤとは分かれた。この知らぬ土地で彼を一人にすることをカグワは恐れていたが、オレークと一緒に待機するなら大丈夫だろうと根拠もなく安心した。最初にユタヤがカグワの仗身であると、獣人であると気付いたのはオレークだ。彼なら、ユタヤを獣人であるという理由で差別し害することもないだろうと思った。ユタヤはユタヤでカグワを一人にすることを案じているようであったが、「私は大丈夫よ」と微笑んで、彼に借りたマントを返すと、さすがに謁見の間にまで着いていくことは憚られたのか、頷いた。彼と分かれて開いたその扉の先は、外観からの期待を裏切らず、豪勢なものであった。

広く縦に長いこの部屋は、普段はダンスホールにでも使われているのだろうかというほどに天井が高く、音が反響する。天窓からきらりと冬の日差しが差し込み、白い床を照らした。その白い床の続く先に、一段高い場所がある。??玉座だ。金色に光る巨大な玉座に、一人の少年が腰掛けていた。

「エウリア君主国の巫女君……どうぞ玉座の前へ」

そう言ったのは、少年の横、玉座の横に控えた中年の男である。玉座の隣にいるためであろう、帯刀はしていないが、そのがっしりとした体格から軍人であることが予想できた。恐らくきつとこの中年の男が、將軍だ。

カグワは將軍と思われる男の言葉に従って、長く玉座へと続く白の床の上を、まっすぐ歩いて行つた。一歩歩くたびに、履いている靴が床とぶつかりコツコツ音を立てる。音は高い天井へと反響し、謁見の間の中に響き渡つた。

しかし言われた通りに玉座の前までやってきて、そこに座る少年と、控える將軍らしき男の顔を見て、カグワは次に何をすればいいのかわからなかった。巫女の予備軍として育てられた聖女たちには、他国の君主に対する礼儀作法など教えられなかったのである。巫女はエウリアの中では最も神に近い存在だ。誰かに謁見されることはあつても、誰かに謁見することなどない。

そんなカグワの動揺を見抜いて、「作法などよい」と言ったのは、玉座に座つた少年であつた。

「余と巫女は同位じゃ。本来、玉座から見下ろすものでもない。が、今回はこれしか用意できなかった。非礼を許してほしい」

カグワは大きく目を見開いて、その少年を見つめた。

これが、あのベッドの上に寝転がっていた色素の薄いシルディアだろうか。あの時は寝間着を着ていて、今は正装をしているから、風体からして雰囲気が違うのかもしれない。だが、それにしてもあまりにも違う。別人のようだ。

「余は、ラウグリア帝国の君主である、セベプ・ラウグリア・オグロミニイ・エルヴァ・ダル・ラプソディアの第一子、シルディアという」

その長過ぎる名前にカグワは目をぱちくりさせる。そういえば初めて会つた時、シルディアは「長過ぎて覚えられないだろうから名乗らない」と言った。確かに名乗られたところで、到底覚えられそ

うにはなかった。

「そして、そこに控えるのが我が国の兵卒をまとめる、スターリン將軍じゃ」

脇に控えていた中年の男は、やはり將軍であつた。彼は膝をついたままカグワの方を向いて、深々と叩頭した。

「今回の要件は、全てスターリンの方から説明する。??スターリン」

叩頭したまま、「は」と短く答えて顔をあげたその男は、いかにも武將らしい屈強な体と、屈強な体に見合つた厳つい顔をしていた。しかし、それでもシルディアほどの覇氣が感じられないのは、保有する『力』の差なのだろう。シルディアはまだ二十にも満たない若い少年でありながら、武將になど負けない強い覇氣を放っていた。

「??まずは、巫女君においては、このような極寒の北の地まではるばる御足労頂いたことに御礼申し上げます」

スターリン將軍は渋い声で言い放ち、再び頭を下げた。カグワはそれを見下ろして首を竦める。

「御足労っていうか……ほとんど強制連行だったけれどもね」

カグワには北国行きを引き受けた覚えなどない。天災かなにかと混乱の生じる中で旋風に乗って飛ばされてきたただけだ。

「手荒な手段を取ったことは誠に申し訳なく存じております。ですが、こうでもしなくては、エウリアの国とは対等に話もできそうになかったのです」

「それは一体……どういうこと?」

西の国と話し合いがたくてカグワを呼んだ、と、カグワは此処に来てから何度も聞かされた。しかし、では一体何を話し合えばいいのか、具体的な内容については何も聞かされていない。それどころか、カグワはどうして北の国が西エウリアと話し合いをしたがつているのかさえ知らないのだ。自国、西エウリア君主国で何が起きているのか、カグワは自国の国情さえ知らない。それなのに何を話し合えばいいのだろう。

「巫女君は、西エウリアから北ラウグリアへ、一通の文書が届けられたことはご存知ですか？」

將軍に尋ねられ、カグワは首を傾げた。カグワの知っている後宮の外の情報は、最西端の変わり者、ケニー老翁から仕入れたもののみだ。その中に、文書の話はなかった。

「先月末のことです。西エウリア国の君主が身まかったと、その文書には書いてありました」

「ええ、そうね……先月末、確かに国王がお亡くなりになったわ」

カグワは日にちを数えて遡り、まだ後宮の中にいた平和だった頃のことを思い起こした。

その知らせは突然であった。国王が崩御したという知らせとともに、後宮に走り巡ったのは、「次期王の即位に合わせて、次期巫女が選定される」という知らせである。聖女たちにとっては、己の国がどうなっているのかわかなくてどうでもよかったのだ。彼女たちにとっては己の国事など二の次であり、己こそが巫女に選ばれんとして奔走するばかりの日々であった。

「さらに文書には、こうありました。エウリアの国主の葬儀を大々的に行うから、各国から国の要人を参列させるようにと。この各国とは、北国、東国、南国のそれぞれ三つのことを指すようです」

「ええ……そうね」

「しかしながら、東国はすでに我がラウグリア国の支配下にありません。そこで我らは文書を西へ返しました。東国はすでに我が国の領土である。ゆえに国の要人を参列させるなら、北と東は一つの国としてまとめ、要人も一人で良いのではないのかと」

「支配下……」

カグワはそう呟いて、眉根を寄せた。

北ラウグリア国が、東国の領土を占領するために十年もの戦を続けているという話は、後宮の中にいるカグワでも知っていた。そして最近、北国が戦に勝利し、その領土を手に入れたのだと、ケニー老翁から聞いたばかりだ。

「だが、西国はそれに対して、まだ西国としては東国を北ラウグリア帝国の一部とは認めていないと返事をされた」

「だって……領土は支配下に置いたとしても、まだ東国には国家があるでしょう。それとも東国の国家は滅亡してしまったの？」

「確かに、国家は滅亡してはおりません。しかし、それは北ラウグリア国の君主の温情によつて生かされているようなものです。すなわち、国家権力機能としては死んだも同然。従つて、今現在東の領土を統治しているのは北ラウグリア国であるといえます」

カグワはますます眉根を寄せた。カグワは戦を経験したことがないためよくわからないが、戦において勝利国は、領土を食らうのみでなくその国の権力も何もかも奪つてしまふらしい。もとより難民に溢れていた東国を思うと、ますます哀れであつた。

「文書のやり取りのみでは、この事実を上手く西国へ伝えることができない。そこで、西国の要人にお越し頂こうと我々は考えました」

「……それで、私が北国に呼び出されたわけね」

「その通りでございます」

「じゃあ、私はそのことを事実として受け止めて、西国に戻つて新王と政府に伝えればいいのかしら？　それで私のお役目は終わり？」

「そう事を急ぎなさいますな……まだ巫女君にお帰り頂くわけにはまいりません」

「……どうして？」

「今、西の国に新しい文書を届けている最中でありませう。？？西国の新しい巫女君は今、北国にいる。西国から良い返事があれば、お返しすると」

「……なんですつて？」

カグワは瞠目した。

良い返事があれば、お返しする。それはすなわち、西の国が「承知」と言わなければ、巫女がどうなつてもしらないぞという脅し文

句である。カグワはようやく、自分がこの場所に巫力さえ奪われ拘束されている意味を知った。

「??? 私は、人質なのね」

「滅相もない。西国の要人として大切にお預かりしております」

「この北の地まで招いたのではなくて、誘拐したのでしょう? わざわざ巫女選定の儀が終わるのを待つて? 巫女が選定されたその瞬間、最も警備の薄いその瞬間を狙って、さらったのよ。西国において巫女がどれだけ重要視されているのか知りながら」

西国は君主国でありながら、宗教国家であった。政治の頂点に立つのが国王なら、宗教の頂点に立つのが巫女だ。巫女は神の代弁者であった。政治の力では解決できない心の救いを、西の民は巫女に求めている。

カグワは納得した。何故、国政もなにもわからない巫女になったばかりの自分なぞを談合にと招待したのか。国政などわからない方が都合良いのだ。余計な知恵を働かせない、だが国家の重要人物である人間が必要だった。

「そう、息を巻かれますな」

巫力も持たぬ、仗身も傍にいないカグワには、何の力もない。スターリン將軍は少しの恐れも見せずに、堂々としていた。

「巫女君には何の不自由もないよう計りますゆえ……なにかあれば、皇室付きの小間使いどもにお声をおかけください。彼らはよく訓練されておりますから、巫女君の要望をなんでも叶えてさしあげるでしょう」

「そんなの……知らないわ。宮殿の敷地からは一步も出さなくせに、なにが不自由もないように計ります、よ」

「宮殿の外は危険です。中におられることが最も御身のためかと存じ上げます」

「危険かどうかは私が自分で判断するわ」

カグワは憤慨した。今ここで、スターリン將軍に怒りをぶつけたとて何の解決策にもならないことは理解している。しかしそんな冷

静な自分がどこかにいる一方で、押さえきれない怒りを抱える自分  
がいることも事実である。

息巻くカグワと、強気な將軍の両者を見比べて、静かに声を発し  
たのは、玉座に座る皇太子殿下であった。

「??スターリン、話はそれで終わりか？」

皇太子シルディアの声は明瞭としていてよく通る。広い謁見の間  
中に響き渡った。

「はい、以上であります」

將軍が頭を下げると、うん、とシルディアは頷く。そして、まっ  
すぐカグワを見つめた。

「ならば、もうこれで終わりにしよう。??余は少々疲れた」

まだ話は終わっていない、と彼に反論しようとして、カグワは開  
いた口を中途半端に止めた。??突然、頭の中に、シルディアの声  
が反響したのである。

??あとで、俺の部屋に来てくれ。

え、とカグワは一瞬呆氣に取られた。

空気を伝わって声が耳に届くのではない。直接頭の中へと語りか  
けるこの技を、カグワもよく知っている。感応の技、と言うのだ。  
他の誰にも聞かれぬように、特定の誰かにのみ言葉を伝えたい時に  
使う。巫力の修行の中で、カグワも何度か挑戦したことがあった。

しかし、何故今自分は巫力を封印されているのに、彼の声を聞き  
取ることができたのだろうかと考えて、すぐに釈然とする。カグワ  
の巫力を封じているのは他でもないシルディアだ。シルディアの声  
なら聞き取れるだろう。

わざわざ感応の技を使って声を伝えて来たシルディアは、なにご  
ともなかったかのように平然としていた。きつと、將軍に聞かれて  
はまずいことなのだろうと判断し、カグワも平然を装う。

「精々見てらっしゃい……貴方たちのやったことは、ただの人さら



いなんだから！」

負け惜しみとも取れる非難の声を浴びせて、カグワは踵を返した。

謁見というから身構えて来たものの、話はあっというまに終わってしまった。要は、カグワは人質だから西から返事があるまで大人しくしている、というそれだけの話である。改まってするような話でもないように思えた。

縦に長い謁見の間をまっすぐ歩いて来た時とは逆に出口を目指して進み、振り返らない。玉座の方を振り返ることは決してしなかったが、扉を開いて謁見の間を去ろうとする間際に、再び感応の技による声が頭の中に響いた。

?? 一度君もきたことがあったと思う。俺の寝室だ。あそこなら、軍の警備はいないから、ユーリかオレークに言って、来てくれ。

巫力を封印された状態で、彼へ言葉を送ることは難しく思えたので、カグワは大きな音をたてて扉をしめることで、彼に了承の意を伝えた。

## 9、北国の皇太子シルディア

結局、カグワが皇太子シルディアの部屋を訪れたのは、その日の夕方頃になってからのことであつた。

謁見の間を出た後、再びオレークに連れられてもといった皇宮の入リ口までは案内してもらつたのであるが、そこに至るまでは軍人がそこら中を徘徊していたため、迂闊に「シルディアの部屋に連れて行って」とは言えなかつた。シルディアは、「軍の目のない場所で」カグワと会うことを望んでいた。

そんなわけで、自分に与えられた部屋へと戻つたカグワは、しばしベッドの上で膝を抱えてぼんやりと虚空を見つめていた。謁見を通じて、ようやく己の置かれている立場がわかつたものの、わかつただけで何一つ解決策は見つけられなかつた。

まず、カグワは間違ひなく、西エウリア国の巫女であること。選定の儀式の途中でこちらへ飛ばされてきてしまつたから、ひよつとしたら自分が巫女に選ばれたなんて単なる勘違いなのではないかと思つていた。しかし、北国は、カグワを誘拐したわけではない。「西の国の巫女」を誘拐したのだ。確信犯であつた。わざわざ選定の儀が行われるのを待つて、選ばれた巫女をその瞬間に時空の狭間へと吸い上げたのである。カグワは、十人の聖女の中から選ばれた、新しき巫女であつた。

そして、北国がそうまでして巫女を誘拐した動機である。北国は、西国が「東は北の一部である」と認めることを条件に、巫女を誘拐した。認めれば巫女は返す、という脅し文句を送つたのだという。しかし、もしも西がそれを認めなかつた場合は、どうするつもりなのだろう。北国は、人質である巫女を殺してしまうかもしれない。殺さないまでも、このまま緩い監禁を続けることはなくなるだろう。そして、もしも巫女が殺されたら、その次はどうなる。西国にとつ

て、巫女は神の代弁者だ。神の遣いである。自分たちの神が虐げられたと知ったら、西国とて黙ってはおるまい。??戦が起きる。

（どうしよう……私の所為で、たくさんの人が死ぬ）

カグワは、ぎゅっと膝を抱える力を強めた。

別にカグワは、巫女になることを熱望していたわけではなかった。巫女には一の君ネイディーンがなるのだと思っていたし、別に巫女になんてならなくても良かった。だが、それでも巫女に選ばれたのが自分なのだとしたら、自分は巫女として民に救いの手を差し伸べなくてはならない。希望を、幸福を与えてはならない。だというのに、実際はどうだろう。人質として囚われ、多大な迷惑をかけている。そしてひょっとしたら、戦争の引き金をひいてしまうかもしれない。

どうしよう、と、抱えた膝に顔を埋めると、不意に隣に気配を感じた。顔をあげれば、心配そうな表情をした仗身がこちらを見下ろしている。

彼は謁見の間にはいなかったから、当然、事の仔細など知らないだが、カグワが悩んでいることは一目瞭然であったし、その悩みの深さがどの程度のものか、説明されずとも感じ取ったのだろう。

彼は大丈夫か、とも、何があったのか、とも何も問わない。ただ黙って、カグワのうずくまるベッドの脇に膝をつく。

「ゆたや……」

カグワが弱々しい声で告げると、「はい」と穏やかすぎる声で返事をした。

「私……巫女に選ばれてしまったらしいの」

「ええ……」

「だから、ここに囚われているんだわ」

「……ええ」

「どうして、私なんかが……巫女に選ばれてしまったのかしら」  
「……」

ユタヤは顔をあげ、カグワの表情を見上げた後、首を傾げた。巫

女に選ばれたカグワにもその選定の理由がわからないのだ。仗身にわかるわけもない。

彼は静かに瞑目し、「私は存じませんが」と応えた。

「何故カグワ様が巫女なのか、何故巫女がここに囚われるのか、私には明確な答えを出すことができません……。私は、巫女であろうと聖女であろうと只人であろうと、貴女を護るだけです」

カグワは彼を見下ろして、その真摯な瞳に言葉を失った。

ユタヤは他の聖女たちの仗身と比べてみても、恐ろしいほどに献身的であった。あの時空の狭間に吸い込まれそうになった時にも、いの一番に駆けつけたのは彼だ。聖女以外は立ち入ってはならぬと言われたあの場所に、少しの戸惑いも見せずに飛び込んだ。

何が彼をそこに至らせるのか、カグワは知らない。ただ、この従順さが今は恐ろしく思えた。??もしも、西国が色好い返事をせず、北国が怒り、西の巫女を虐げることになった場合。彼は、どうするのだろう……？

それから長時間、カグワはずっとベッドの上でうずくまり続けた。ユタヤは黙ってベッドの下に寄り添った。

そうこうしているうちに時間が経って、夕刻頃。「夕食の準備をいたします」とカグワの部屋付きの小間使いであるユーリが現れた。

カグワは「そんなことよりも」とユーリに食事の準備をやめさせて、皇太子シルディアの部屋に呼ばれているからオレークに繋いでくれと頼んだ。ユーリはそれは大変と快諾し、すぐにオレークを呼んでカグワを皇太子の部屋へと案内してくれた。

今回、呼ばれたのはカグワだけである。カグワが人質であるならば、当面の間はカグワにも、その従者にも危害の加えられることはないだろうと判断し、ユタヤは部屋に置いて行くことにした。ユタヤもそろそろ皇室ばかり集うこの宮殿には危険がなさそうだとわか

つてきたらしく、皇太子の部屋にまで同伴することは遠慮した。

「夕食は、殿下の部屋に二人分用意させておきました。どうぞご利用と」

カグワを皇太子の部屋の前まで連れてきたオレークは、そうとだけ告げて頭を下げた。今回は部屋の中までは着いてこないらしい。シルディアが内々にカグワを呼んだためであろう。

一人皇太子の部屋の豪勢すぎる入り口の前に取り残されたカグワは、ふう、と一度息を吐いた。皇太子に会うのはこれが初めてではないし、彼の部屋を訪れるのだって初めてではない。しかし、またあの得体の知れない「毒気」を味わわなくてはならないのだと思うと、自然と体が力んだ。ともかくにもいつまでも此処に立ち尽くしているわけにはいかない??。カグワは扉をノックして、「かぐわです。入ります」と端的に告げるなり、扉を開いた。

開いた扉の先には、数日前此処を訪れた時と何ら変わらぬ風景が広がっていた。だだっ広い空間の中に、遊戯場や食卓、風呂場もある。そして部屋の中央には大人五人は眠れるであろう巨大なベッドが置かれていた。ベッドには天蓋、薄い紗幕がかけられている。

「あつ」

ベッドの方から若い娘の声がした。なんだろうと思って中央に置かれたそのベッドの方を見やると、紗幕を揺らして中から一人の若い娘が飛び出してきた。愛らしい容貌をしているが、その資格好からみるに、女中のようなのだ。皇太子の部屋を掃除したり片付けたりすることが役目なのだろう。

「待ってたよ、カグワ」

紗幕の内側から、今度は若い男の声がする。こちらには聞き覚えがあった。皇太子シルディアのものだ。

「君はもういいよ。行つて」

シルディアの声は冷たい。行つて、と言われた女中はそれでも少しも気分を害した様子はなく、何故か少しだけ着崩れた服を直しながら、「失礼いたしました」と頭を下げて部屋を出て行った。すれ

違い様にちらりと見やった彼女の頬は、ほんのり赤く染まっている。カグワはきょとんと首を傾げた。

「?? 謁見は午前中だったのに、遅いじゃないか」

言いながら紗幕を持ち上げ、ベッドの端に座ったシルディアは、謁見の間で会った時とはやはり違う。重そうな正装服も纏っていないし、皇室の人間らしい重圧感のある喋り方もしなかった。

「一人で考えたいことがたくさんあったから」

そう答えると、「まあそうだろうね」と言っただけで彼はベッドの横に置かれた長椅子を示した。座れ、ということらしい。

「シルディアは、あの後すぐに部屋に戻ったの？」

「君を待つ以外にやることもなかったからね。暇つぶしにメイドと遊んでた」

さつき追い出された女中のことだろう。カグワは、「ああ」と頷いて、長椅子に座った。すると、シルディアはくすと笑う。前にベッドの上に寝転んでいた時は顔色も悪く病人のような風体をしていたが、今日はすこぶる気分が良いようだ。

「君、全然意味わかってないだろ」

「なにを？」

「あ、もしかして巫女は純潔じゃなくちゃいけないの？」

「は？」

カグワがぼかんと口を開くと、「まあいいよ」とシルディアは足を組んで机の上に置かれたマグカップを手に取った。おそらく今しがた出て行った女中が淹れたのであろう紅茶はまだ湯気をたてていた。

まあいいや、とカグワも思い直し、長椅子の上に深々と座る。今日のシルディアからは以前訪れた時のような毒気が感じられなかった。今回は前と違って彼が『力』を発揮しようとしていないためだろう。

「で、今日は一体何の用？」

軍に聞かれることを恐れてわざわざ感応の技を使ってまで呼び出

したのだ。それなりの用事があるのだろう。そう思つてカグワは身構えて来たのだが。

「別に？　これと言つて用事はないけど？」

シルディアはあっけらかんと言う。ますます呆氣にとられるカグワの顔を見て、シルディアは自分の白金の髪をいじりながら続けた。

「用事がなきや呼び出せないほど君は高いのか」

仮にも巫女だから安くはなからうが、と思いながらも、そんなことを言うわけにもいかず、「そういうわけじゃないけど」と首を横に振る。

「じゃあいいだろ。？？初めてなんだよ。俺と同位の相手つていうのに会うのがさ。シルディア、なんて呼び捨てにされたことも今までなかったし……」

「これからも誰かに許可なんて取らなくていいから好きな時に俺の部屋来てよ」などと言うシルディアが、子供のように笑うものだから、今度は首を縦に振ることしかできなかった。それに、自分の前にへりくだらない相手と話がしたいというその気持ち、カグワにもわからないわけではない。

本当に他に用事のあつたわけではないらしく、それからシルディアは紅茶を飲みながら他愛もない話を始めた。カグワもそれならばと幾分気を楽しんで、彼の話に付き合つた。

「カグワは今いくつ？」

「今年十五になったところよ」

「へえ。俺よりは年下か」

「そうなの？」

「うん。あいつは？　えーっと……ユタヤだっけ？」

「ゆたやは……十八よ」

「へっ、俺と一つしか違わないの。もつと年上かと思つた」

「獣人だから……普通の人間よりも体の作りが大きいしね」

「へえ。そういうものなんだ。俺、獣人って見たことないからなあ」

「北国にはいないらしいものね。……シルディアはいくつなの？」

「俺？ 十七。もつと若く見えるでしょ」

「……同い年か年下かと思ってた」

「俺痩せ形だからなあ……」

一国の皇太子とは思えない、あまりにも凡庸な会話に安堵する。

『力』を使わなければ、彼も普通の少年なのだと、今更ながら悟った。カグワ自身も巫女という肩書きさえなければ、何の変哲もない少女でしかない。？？彼と自分の立場は至極似ていると、思った。

「カグワは最近巫女になったばかりなんだろう？ 巫女になる前は何してたんだ？」

「巫女に選ばれるのは、巫女予備軍の聖女という集団からのみなのよ。だから私も、聖女の一人だったわ」

「それは、世襲なの？ 君は生まれた時から聖女なのか？」

「いいえ。聖女はその時代の巫女が国の全ての少女の中から選ぶの。私の場合は、三つの時に選ばれて聖女となったわ」

「ふうん……なら、俺とは違うんだな」

「シルディアは現皇帝の第一子だって……さつき謁見の間で言っていたものね」

皇位は、世襲だ。西エウリア国でも王は世襲と決まっている。シルディアもまた、生まれながらにして王位を継ぐ皇太子だったのだらう。

「カグワには家族はいるの？ 家族がいる場合は、聖女と一緒に家族も巫女予備軍になるのか？」

「まさか。家族とは離されて、大抵一生そのまま会うこともないんじゃないよね。私にもお母さんが一人いたけど……聖女になるために後宮に入ってそれきり、一度も会っていないわ」

「そっか……今でも母親のことは思い出す？」

「いいえ。残念ながら、忘れちゃった！ だって私は後宮に入ったのは三歳の頃よ。思い出そうと思えば思い出せないこともないけど



……もうほとんど想像の産物」

「ふうん。そんなものか……」

素っ気ない、その相槌に何やら含みを感じて、カグワは問いかける。

「シルディアは？ お父上の皇帝陛下は病に臥せっておられると聞いたけど……お母上はお元気？」

「死んだよ。俺を産んですぐに」

一瞬言葉を飲み込む。が、シルディアが特に気にした風でもないのでカグワも平然を装い会話を紡いだ。

「……。難産、だったのかしら？」

「いや、そういうんじゃない……毒殺されたんだよ。実の姉にさ」

姉、とカグワは目を丸くする。後宮で囲われ、大切に育てられたカグワには無縁の話であった。

「俺を産んだ母親は、正妃じゃなかったからね。正妃は姉の方だ。俺も産まれたばかりの頃の事なんて、誰にも教えてもらってないけど。??まあ、皇室の中でいざこざがあったってことだ」

さらりと言い放って、シルディアは微笑む。その微笑みに、毒気が浮かぶ。しかし不思議と、初めて彼と話した時に感じたような怖気は覚えなかった。ただ、これ以上は深く掘り下げないほうがいいと、本能が訴える。

カグワは慌てて話題の転換を試みた。

「シルディアはいつから巫力……えーと、『力』を使うようになったの？ 貴方はすごい『力』の持ち主だから、きっと小さな頃から訓練してきたのでしょうかね」

「訓練？ 訓練なんかしてないよ」

きょとん、とするシルディアの顔から、毒気が消える。彼の顔が、普通の少年の顔に戻った。

「俺もよくわかんないんだけどさ、『力』を持ってる奴っていうのには、二種類いるんだって。生まれつき『力』を持ってる奴と、『力』の素質を持っている奴。『力』の素質を持ってる奴は訓練する

ことで『力』を開花させて増強できるけど、『力』そのものを持って生まれた奴は訓練する必要もない。訓練したところで増えることもないし、何もしなくたって減ることもない」

そう軍の奴に教えてもらった、と言った皇太子は、生まれつき『力』そのものを持つていたということなのだろう。カグワは瞬きをする。初めて聞く話であった。

「『力』そのものを持つて生まれた人なんていうのが、いるのね……初めて聞いたわ」

「西国にはいないの？」

「わからないけど……少なくとも、聖女の中にはいなかったわ。だって後宮に入ってからというもの、皆で十年以上もかけてずっと巫力を鍛える修行をし続けてきたんだもの」

カグワは今は遠い、西の地を想った。十数年、あの狭い後宮の世界の中だけで生きて来た。やることといえば一つだけ、巫力を高める修行のみである。まさか、生まれながらにこんなにも強大な『力』を持つている人間がいるだなんて、知る由もなかった。十数年の年月をかけて磨いたカグワの巫力では、今日の前に座っているか細い皇太子に適うべくもない。

「修行かあ……具体的には何するの？」

訓練の一つも必要なかったという皇太子は、興味津々の状態で身を乗り出してくる。カグワは苦笑した。

「ひたすら実践あるのみよ。……例えば、さつき貴方がやったみたいに、感応の技を試してみたり」

「感応の技？」

「ほら、さつき、謁見の間で……私の頭の中に直接語りかけてきたじゃない」

「ああ、あれか。あれ、感応の技っていつのか」

「私たちはそう呼んでるけど」

「他には？ 他にはどんな技があるんだ？」

「たくさんあるけど……未来の出来事を予知する先見の技とか。人

の心を読む読心の技とか……」

「カグワが一番得意なのは？」

「得意っていうほどじゃないけど……気感の技かしら。近付いて来た相手の気配を察知して相手を予測するっていう」

「へえー。そんな名前がついてんのか」

「逆に聞くけど、技に名前もなくて、どうやって使い分けてるの？」

「別に？ 使い分けるっていう感覚もないし……その時々、必要なことを必要のようにやるだけだよ」

至極当然のことのように彼は言う。生まれながらに『力』を持っていた彼にとつては、それは歩いたり走ったり、息をしたり笑ったりするのと同じように、自然にできることなのだろう。訓練することでは『力』を扱えないカグワには全く理解できない感覚だ。

「私は修行をして、ようやくできる技もいくつか会得したくらいのもんだけど……貴方には、なんでもできてしまうのね。そのための能力が生まれつき備わっているんだもの」

感心したように思わず呟くと、「いや」と彼は俯いた。その顔に影が、毒気とはまた異なる暗い影が落ちる。

「確かに俺は、訓練なんかしなくても『力』を発揮できる。けど、自分の『力』を制御することはできない」

「制御……？」

うん、と頷いた彼は前髪をゆっくりかきあげた。細い金髪がさらさらと指の間からこぼれおちていく。

「見たくないのに見てしまう。聞きたくないのに聞いてしまう。やりたくないことをやってしまっ、それを止めることができない。……『力』が暴発するんだ」

そんな経験ある？ と尋ねられてカグワは激しく首を横に振る。やれと言われた技がでずに落胆することはあっても、力が勝手に働いて己でそれを止められなくなることなんて、一度も経験したことがなかった。ゆえに、想像もつかない。

「そういう時は……どうするの？」

「どうすることもできない。俺自身に止められないのに、誰かに止められるわけもない。だから、時が経って収まるのを、待つ」

発作みたいなもんだよ、と言つて、彼はいつのまに飲み干したのやら空っぽになったマグカップを片手に立ち上がった。広すぎる部屋を歩いて、暖炉脇に置かれたポットを取りに行く。その足取りは、やけに軽快だ。

「??君が、此処まで連れ去られてしまったことは巫女である君にとって、あるいは西国にとつてとても不幸なことかもしれないけど……俺にとつては幸運だったな」

「どうして？」

「こんな話を聞いてくれる奴、この国の中にはいないからさ」

「『力』を持つている人が、周りにいないから？」

「いるさ。軍の中にはごまんという。奴らは『力』を戦に利用するからな。でも、奴らは『力』の持つ得体の知らない恐怖を知っている。だから、誰も俺に近付こうとしないんだ」

ポットから紅茶をカップに注ぐその背中はやけに小さく見えた。

振り返ると、何故だか満面に笑みを浮かべている。

「でもカグワは、いいね。服従して仕方なく答えるんじゃない、興味を持って尋ねてくれる。俺を怖がることもない」

「……。……全く怖くないと言つたら嘘になるわ。最初に貴方に会った時、やっぱり得体の知れない怖気を感じたもの」

「そうだったの？　ぐいぐいいるんなことを尋ねてくるから、初めて俺を怖がらない人に会つたと思つたのに」

「それは……。……突然知らない所に飛ばされて、わけもわからず貴方に会つたんだもの。尋ねたいことは山ほどあったわよ」

「そうかあ……。じゃあ、今も、俺が怖い？」

マグカップに紅茶をなみなみ注いだまま、悄然とうなだれる彼を見上げ、カグワは口をへの字に結んだ。彼はカグワよりも二つ年上だと言つたけれども、そんなことも疑わしいくらい、幼く見える。

背丈は断然カグワよりも高いし、顔つきもよく見れば大人っぽいのであるが、醸し出す雰囲気の所為だろうか。

「今は……怖くないわ。シルディアがどういう人なのか、わかったからかな」

そう答えると、シルディアの顔がみるみるうちに喜色一色に染まった。彼はマグカップを机の上に置いて、軽やかにベッドに腰掛け、カグワと向き合う。

「シルディアって、俺のことをそう呼ぶのもカグワだけだ。みんな皇太子様とか、殿下とか、シルディア様とか、そんなふうにししか呼ばないのに。対等な感じがして、いいな」

嬉しそうな彼の言葉を受けて、カグワはふと記憶を思い起こしていた。西の国にて、巫女選定の儀の執り行われたあの日に、似たようなことを言われたことがある。

「??」の君としての私を見ても、誰もネイディーンという一人の女としては、見てくれなかったわ。その中で、貴女だけが、私と同等に接してくれた。私は、とても嬉しかった。

そう語ったあの玲瓏とした美女は今、西の国で何をしているだろう。本当なら、カグワなどよりも彼女が巫女になるべきだった。彼女が巫女ならば、と思う。巫力も強く、頭も良く、何でも出来る彼女なら、こんな風に北の国に囚われることもなく、よしんば囚われたとしても、なす術もなく戸惑うこともなかったらうに。

「なあ、カグワ……。お前、ずっと北の国にいろよ。難しい国の政治のことなんか放っておいてさ。この皇宮にいれば、何も不自由しないよ」

「……そういうわけにいかないわ。私は、西の国に帰らなくちゃ」

「どうして? 君が巫女だから?」

「そうね……。それに、西の国に帰って、話をしたい人がたくさんいるから」

カグワはそう答えて、静かに瞑目した。

目を瞑れば脳裏に浮かぶ、西の国の人の顔。巫力を封じられた身で遠くの地を察知したり、あるいは遠くの声聞き取ることこそできないが、思いを馳せることならできる。

最西端の変わり者と呼ばれたケニー老翁に会って、話がしたい。

巫女となった今、カグワはどうするべきなのか。

一の君、ネイデーンにも会いたい。貴女ならこういう時どうする、と問うて、助言を乞いたい。

他の聖女たちにも会って、話がしたい。聖女として今まで培ったこの力を封じられた時、私たちには何ができるのかしら。巫力の修行のみを課された彼女たちに、提起をしたい。

幼い頃からずつと身の回りの世話をしてくれたロマーナにも会いたい。会って話をするでもなんでもなく、あの後宮の中の日常を過ごしたい。彼女はカグワにとって母代わりであり姉代わりであった。

そして、ユタヤに??。

カグワは、西の国にはいない、共に北の地へと飛ばされてきた従順な仗身のことを思った。部屋に帰ったら、ユタヤと話をしよう。

文脈がまとまってなくとも、何が言いたいのかわからない支離滅裂なことでも、ユタヤは真摯に耳を傾けてくれる。ただ黙って耳を傾けて、時折相槌も打って、カグワの心の中の不安を落ち着けてくれるに違いない。

黙って瞑想し、西の地を想うカグワを見て、シルディアは特に声をかけるでもなく静かに温かな紅茶を啜っていた。孤独な少年には、目を瞑ったところで瞑想する相手もないのだ。少年の目には、カグワが眩しく映っている。

カゲワはまだ、彼の持つ底知れぬ心の闇には気付いていなかった。

## 10、無償の愛

仗身の心得???いかなる時にも主の傍を離れず、主の危機を逸早く察知し、己の身を捨てても主を護るべし。

その心得を胸に刻んでもう幾年の月日が過ぎたことだろう。まだ一桁の年の頃から、主を護ることを心に誓って今まで生きて来たが??青年は今、誰もいないがらんどうの部屋の中に一人取り残されている。

ユタヤは、主のために用意された広くて落ち着かない部屋の隅、窓際にあぐらをかいて座ったまま、ぼんやりと外の景色を見つめていた。

カグワを追って時空の狭間に飛び込み、共にこの北の地へ投げ出されてから、そろそろ十五日が経とうとしていた。

カグワが皇太子や將軍と謁見をしたあの日から数日過ぎて、カグワは人質としてここに囚われていることを逆手に取り始めていた。少女は、人質であるからには危害を加えられることはないだろう、と踏んで、自由気ままに皇宮の中を徘徊する。それでも初めのうちは、何かあるかわからないから、と彼女の勝手な行動を案じていたユタヤであるが、あまりにも彼女が奔放なものだから、最近では案ずることすら馬鹿らしく思えるようになった。

まるで、あの後宮にいた頃と何も変わらない。カグワの君は自由だ。

そして今日も取り残されたユタヤは一人、部屋の窓辺に佇んでいた。日は高いが、窓ガラスを一枚隔てた向こう側は恐ろしく寒い。秋も深まり、この北の地では昼間でも気温はそこまで上がらないという。夕方になってもまだ戻らぬようなら、彼女を探しに行こうと



決めて、しばらくは窓辺で休むことにしていた。彼女には彼女の思惑があるのだから、あまり無闇にそれを邪魔してもいけない、と思う。

なにがなんでも主を護ろうと、時空の狭間に飛び込みここまでやってきたが、獣を封印された自分は今とても、無力であった。武器となる刀たちも、西の国で変化した際に全て置いて来てしまった。

北の地はなにもかもが『力』によって統一されていた。実際にはどうかかわらないが、ユタヤはそういう印象を受けていた。故に、ユタヤにとってはこの皇宮の廊下を歩くことでさえ恐ろしい。『力』とは見えない圧倒的な何かである。見えない何かを恐れるのは、生き物としての本能だ。

そんな中で、カグワは強かった。カグワ自身も巫力を封印されてしまっているはずなのに、カグワは見えない何かを恐れない。そんな状況下で、カグワのことを自分が護ってやるのだと思うこと自体がおこがましくも思えるくらいに、彼女は強かった。

カグワを護るのだと、それだけを目的に生きて来たユタヤはその任務から解放されてしまうと他にやることもなかった。仕方なく、ぼんやりと外を眺めている。寒さから逃れるために二重に張られた窓の外、それまで高く昇っていた太陽が、雲によって覆われた。天気がくずれそうだ。ひよっとしたら雪が降るのではないか。

ユタヤに近い部分だけ、窓が結露していた。ユタヤの体温で暖まっている所為だろう。その白く曇った硝子をなんとはなしに服の袖で拭おうとした、その時、不意にトントんと扉がノックされた。

こんな時間に誰だろう、と思う。カグワの面倒を見てくれている小間使いのユーリなら、今カグワが部屋にいないことは知っているはずだ。他の誰が来たにしろ、当然用事はユタヤではなくカグワにあるはずで、今此処にカグワはいないのに、と困惑していると、扉は無遠慮に開かれた。

「あれっ？ カグワ、いないの？」

大雑把な仕草で開かれた扉の向こうから現れたのは、なんと、この国の皇太子であった。

何故こんなところまで、とユタヤは面食らう。今までにも何度かカグワが彼の部屋へと呼び出されたことはあったけれども、彼が自らわざわざ此処まで足を運んで来たことは、一度もなかった。

「申し訳ございません、殿下……今、かぐわの君は皇宮内を散策中でして」

ユタヤは慌てて窓際から彼の方角を向いて膝をつく。皇太子シルディアは今しがた自室から出て来たのか、皇太子とは思えないような軽装をしていたが、それでも放つ気迫は皇太子以外の何者でもない。

「散策中？ 一人で？」

「はい」

「護衛も連れず？」

「ええ」

「不用心だな……人質だから滅多なことがない限り害されることもないだろうとも思っているのかな」

「いかにも……」

「まあ、事実、そうだろうけど……特にこの皇宮内には軍人もいないし、安全だ」

そう呟いたシルディアは、カグワのいないことを知って諦めて部屋を出て行くかと思えば、ずかずかと部屋の中央までやってくると、食卓の椅子を引いてどかりと座った。彼は堂々と足を組んで、頬杖をつく。

「カグワが出て行ってからどれくらい経つの？」

「……朝食を取ってすぐ後ですから……そろそろ二刻は過ぎるか」と

「へえ。じゃあそろそろ帰ってくるかな」

「さあ……それは私にも存ぜぬところでありますが」

「まあいいや。ちょっと此処で待つよ。何か暖かい飲み物はない？」

「……今すぐに」

まさか皇太子ともあろう身分の人間が、こうも安易に居座ろうとするとは思いもしなかったため、内心動揺しながらもひた隠し、ユタヤは立ち上がった。今朝ユーリが置いて行った茶の葉と、暖炉にかけられた湯がまだ残っている。主の身を護るのが仗身の本業とは言え、茶をいれることくらいなら満足にできた。

食卓に座ったまま興味深そうにきよろきよろと部屋を見回しているシルディアは、この部屋の内装を見るのは初めてのようだった。皇太子とは言え、さすがに皇宮に無数にある部屋一つ一つの内装までは知らないのだろう。

「……思ったほどは、広くないんだな」

ぼつりと皇太子は呟くが、とんでもないことであつた。もともとカグワの住んでいた後宮の三の宮にさえ、此処まで広い部屋はなかった。

「此処に二人でいるのは狭くない？」

「……西国ではこれほど広い部屋はいくら巫女の君と言えどお持ちではありませんでしたゆえ……狭いと感じたことなどございません」

「そう？ でもベッド一つしかないじゃない。二人で寝てんの？」

「まさか。私には床の上で十分でございます」

「ふうん」

どこことなくつまらなさそうに答えた彼の前に、注いだ紅茶を差し出す。これでユタヤの役目は終わりだ。カグワを待つという皇太子の邪魔にならないようにと部屋の端に控えようと身を引くと、「待てよ」と皇太子本人に止められた。

「ちよつと、お前とも話してみたかったんだよね」

「私と、ですか……？」

「おう。だって俺、獣人って見たことなかったからさ」

北国には、全く獣人がいないのだという。ユタヤも知識としては

知っていた。

「ちょこつと話をしようよ。向い側、そこ、座れよ」

言ってシルディアの差した先は、彼の座っている食卓の向い側だ。皇太子と対面することになる。ユタヤは慌てて首を横に振った。

「滅相もございません……私は後ろに控えておりますゆえ、気になることがあれば何でもお申し付けください」

「まあ、玉座に座っているならそれでもいいんだけどさ……此处、ただの食卓だろ。後ろに控えられると茶が飲み難くて仕方ない。誰も見てないんだし、いいじゃないか。そっち座れよ」

まるでかぐわ様のようなことをおっしゃる、と思いながら、ユタヤは仕方なくその言葉に従った。とは言え、ユタヤの主はあの奔放なカグワである。このような高貴な身分からの異例な指図にはすっかり慣れていた。

「名前は確か、ユタヤ、だったよな」

「私なその名前までも覚えておいでですか……恐縮であります」

「覚えてるよ。カグワの口からしょっちゅう聞くからね」

「……勿体ない」

「随分とへりくだるじゃないか。俺、よくわからないんだけど、仗身っていうのはそんなに下役なのか？」

「仗身が、というよりも、我々巫女の仗身は獣人と決まっておりますから。獣人は、本来高貴な御仁と話せるような身分ではございません」

「へえ、不思議だ。獣人は差別されるわけだ」

「……我々は、人でありながら、畜生類の性根も持っておりますゆえ」

「あー、聞いたことがある。西国では獣人を蔑んで人畜と呼ぶこともあるとか」

「……」

ユタヤはシルディアの対面に座ったまま、表情の一つも変えずにそっと目を伏せた。初めて獣人の獣の姿を見た人間は大概それを「

化け物」と呼ぶ。ゆえにだろうか、獣人そのものを人畜と呼ぶ人間もいるらしい。が、幸か不幸か、まだユタヤは直接それを言われたことはない。

「俺からすれば、『力』を持つ人間も獣人も等しく化け物だと思うけれどね。人智を越えたなにかを『力』と呼ぶのなら、獣人のそれだって同じ『力』だろうと」

しれつと言うシルディアは、確かに化け物並みの『力』を所持していた。だが、だからと言って彼の『力』と獣人を並列にしても良いものか。

「我々の『獣』は、いわゆる『力』とは異なり、自意識で操れるものではありません。今でこそ殿下や巫女君の術によつて「獣」を制御しておりますが、術さえ解けてしまえばただの獣と同じ」

「あはは。それこそ俺と一緒にじゃないか。俺もたまに自分の『力』が制御できなくなつて困ることがあるよ。そのたびに犠牲者がでる」

「……私には殿下のお持ちのような『力』のことはよくわかりませんが……それでも殿下が人であられることには変わりありますまい」

「なるほど。確かに俺の『力』は暴発しても、俺が俺であることに変わりはないな」

シルディアは頬杖をついたまま、面白そうに笑った。その『力』を含んだ強い眼差しにはまっすぐとユタヤの姿が捕えられている。

「一つ疑問なんだけど、獣人っていうのは結局人なの？ 獣なの？」

「……そのどちらとも言い難い存在です。どちらにもなり得ると」

「まあ、そうだよなあ……今でこそ姿は完璧に人だけど、獣にもなれるわけだし。人にしては力が強すぎるってカグワも言つてたし、でも考える脳は人のものだろう」

「……はい」

「でも、基本的には、人の姿をしている時は機能は人と同じってい

うことだよな？」

「はあ、基本的には……」

シルディアの質問の意図が読めず、ユタヤはひとまず頷いた。確かに人型の時には、二足歩行であり、人と同じ物を食べ、同じように喋る。基本的には人間と同じ機能をしていると思う。

そして、次のシルディアの質問に、瞠目した。

「つてことは、生殖機能はどうなるんだ？ 人型だと、人間の男と同じなのか？」

「……は？」

全く予想していなかった問いかけに、口が縦に開く。獣人に関して興味を持つて尋ねてくる人間は、主であるカグワを筆頭に、山といたが、それを尋ねられたのは初めてだった。

「お前、人で言えば十八なんだろう？ 人間の男なら、悶々とすることもあるじゃないか」

「な、にを……」

「それともそこは獣の性なのか？ 繁殖期に同種の雌を見ないことには特に反応することもない、と」

「……」

言葉を失う。そんなわけないじゃないかと言いたい気持ちもあるが、獣人を知らない相手に怒っても仕方がない。ユタヤは一つ溜め息を落としてから、冷静に答えた。

「……恐らく、人間の男と同じではないかと。少なくとも獣の性ではありません」

「ああ、そうなの。じゃあカグワと同じ部屋は辛くない？ それとも一人の時にこっそりなんとかしてるとか」

「……」

再び言葉を失った。何と答えて良いやら全くわからない。というよりも、どうしてそんなことを聞かれているのだろうと思う。よりによって皇太子殿下が、何故そのようなことを問うてくるのか。

その訝るような表情から、ユタヤの心を読み取ったように、シル

ディアは笑った。彼はカップの紅茶を飲みながら顔を傾けて、さらにその金髪をなびかせる。

「皇太子ともあるう者が、下世話な話を、とても言いたげだね。そうか、聖女の園だったという後宮では、こんな話をすることもなかったんだろっな」

「……御意」

「でもね、皇太子だからこそ詳しいのさ。俺は幼い頃から性交について下世話なものではなく、神聖なものとして教わった。皇室の間として、次期王として、俺の最も重要な役割は遜色のない跡継ぎを作ることだからね」

言われてみれば、至極当然のことであつた。世襲でない巫女の世界では縁のない話であるが、皇室のように世襲の制度が布かれているならば、それは時代を創るための一大行事でもあるう。

「軍は、俺に『力』を発揮しろという。この国のためだ、『力』を使えという。皇室は皇室で、俺に子宝を作れという。この国のために立派な世継ぎを作れという。??そのどちらも、シルディアという一人の人間としての俺は見えていないんだろう」

同情を誘うようなその口ぶりに、些か困惑する。皇太子はそんなユタヤの様子など少しも配慮せず、「でも」と笑った。

「でも、カグワは俺のことを見てくれる。面白いことにね。誰も彼もが皇太子である俺を恐れるのに、カグワは少しも恐れない。普通の人間に戻ったみたいないな感覚がする。いや、俺も普通の人間なんだって気付かされる??な? お前もそう思うんだろう?」

同意を求められて、今度は迷うことなくしつかりと頷いた。

カグワは、獣人であるユタヤにも普通の人間と同じように接した。彼女を護らなくてはならない、自分は彼女の仗身だと強く自分に言い聞かせる一方で、彼女と一緒にいると自分が獣人であることなど忘れてしまいそうになることがある。自分は普通の人間なのではないかと??だがしかし、ユタヤの場合は、錯覚だ。

「しかし、私の場合は、普通の人間ではありませんから」

「だからこそ、感動も一入だろう。そういうところに惚れ込んで、彼女の仗身なんぞやってるんだろ？」

「確かに彼女の人柄には惚れ込んでおりますが、仗身である理由ではありません。むしろ、仗身であるからこそ人柄に惚れ込んでいるというだけのことです」

「人柄に、とかそういうことを言ってるんじゃない。不思議に思ってたんだよ。どうして、お前はあんなちっぽけな女に対してそんなにも献身的になれるのかなど。でもよくわかったよ。彼女は確かに魅力的だと思う。？？そういうことなんだろう？」

ユタヤは大きく目を見開く。どういうことだ、としらばつくれることも出来たのに、それをしなかったのは生来の生真面目な性格ゆえであろう。というよりも、彼は何を言っているんだ、と思う。

「私がかぐわ様の仗身となったのは、まだ年端もいかぬ幼子の頃です。その頃より、私はかぐわ様をお護りするために生きるのだと誓ってきたのです」

「それは、彼女が巫力でお前の『獣』を封印していたからだろう？ 一種の呪縛みたいなものじゃないか。その呪縛から解き放たれた今、何故お前は彼女に尽くす？」

「何故、って……」

「今お前の『獣』を封印しているのは俺だ。正確に言うならば、お前の主は今、俺じゃないか」

「それは……」

ユタヤは言葉に詰まった。考えたこともなかった。

確かに、巫女と仗身との誓約は、その『獣』の性を封じる事によって成立している。しかし、この北の国に来てカグワの『力』が封じられ、自分の『獣』までもこの皇太子によって封じられた時、一番最初に思ったことは、「このような状態で、どうやって巫女をお護りしたらいいのだろう」という不安でしかなかった。よもや、これで主が変わったのだなんて、思うはずもなかったのである。

ユタヤはしばし逡巡し、やがて静かに首を横に振った。『力』如



何の問題ではないのだ。この胸に刻まれた誓約は、そうそう簡単に書き換えられるものではない。

「……それでも、私の主はかくわの君です」

「それが妙だと言っている。あの女に惚れてる以外に、何の理由があつてそうまで尽くす？」

「幼心に誓つた、忠義です。ある意味では、それを愛と言い換えることもできましょう。ですが、それは殿下のおっしゃるような、男女間に芽生える愛ではありません。この方のためなら命を差し出してもいいと思える、忠義に基づいた無償の愛です」

「無償の愛……？」

シルディアの顔が、険しく歪められた。彼は肩肘をついたまま、己の頭髮をもてあそぶ。

「愛だとか、忠義だとか……そんなものが本当にこの世に存在することは、ないよ」

突如、彼の口調が静まり返る。その静かすぎる口調に、本能的な恐怖を覚えた。目の前に座っている少年は、どこを見ているともわからない虚ろな眼差しで、何かを捕えている。

「そういった飾り立てられた美麗句はね、必ず何かを覆い隠すための言い逃れでしかないんだ。忠義は、利己の益を隠し……愛は、性の欲求を隠す……。それはただの言い訳だ」

背筋がぞくと震えた。そして、気付く。皇太子は今、ユタヤを直接見ているわけではない。ユタヤを通して別の誰かを見ているのだ。ユタヤには彼の置かれていた状況はわからない。だが、恐らく、彼は幾度も忠義を利己の益のために裏切られ、愛を性の欲求でしか味わったことがないのだ。故に、ユタヤの忠義を信じない。

「それでも私は、忠義と愛を巫女の君に尽くします」

負けるものかと強い口調できっぱり答えると、俯いていたシルディアがゆっくりと顔をあげた。彼は薄く笑って、「しつこいな」と言う。

「それが利己の益でないと、それが性の欲求でないと、どうして言

える？」

「私が獣人であり、かぐわの君が巫女であるからです。獣人に利己の益などありません。何故なら我々の性根は利益など考えぬ獣と同じだから。そして巫女の君に対して性の欲求を覚えることもありません。彼女は最も神に近い、神の代弁者だ。俗世とは切り離された存在なのです」

「ほう。なるほどね」

答えて、シルディアは口元を歪ませた。よかったこれで納得してくれたか、とユタヤが安堵したのも束の間、シルディアの笑みが蔑むような表情へとみるみるうちに変化していった。その変化に、慄く。

「だけどね、ユタヤ。それは差別と言うんだよ。さつき俺は、西国では獣人は人畜と呼ばれて差別されているんだねと言ったけれども、最も己らを蔑視しているのは、お前ら自身じゃないか。自分を獣と言う奴が、獣以上になれるはずもない。その上、お前は主だと言ったカグワのことまで差別するのか。巫女だから神の代弁者だからと言って、彼女を普通の女と捉えないのは獣人を普通の人と捉えないのに匹敵する差別だよ。彼女とてただの人間だと、どうしてお前は言わない？」

「……そういうつもりでは」

「では、どういうつもりなんだ」

責めるような口調で問いかけられて、答えに窮す。口をぱくぱくと開閉させているユタヤを前に、シルディアはにつこりと笑った。

「不愉快だよ、ユタヤ。実に、不愉快だ」

その笑みに、他人を拒絶するような覇気を感じる。この場から逃げ出したくなるくらいの、威圧感を覚えた。

「出てけよ」

ゆつくりと発されるその言葉に、目を丸くする。皇太子は再びゆつくりと、続けた。

「この部屋から、出て行け」

この部屋はそもそもカグワのために与えられたものであり、そこにいいとユタヤに言ってくれたのはカグワであるはずで、そこにやってきた皇太子は部屋の主を待っていた身で、何故ユタヤを追い出すのか。などと様々な疑問の繰り広げられる理性と、しかしながらもとは言えばこの皇宮自体が皇太子の物だと諭す心もあり、思考が複雑に絡み合う。

だが、頭の中こそ混乱すれど、目の前の男に「出て行け」と恐ろしいほどの覇気を含んで言われると、本能的にそれに従わざるを得なかった。逃げ出したくなるような思いで??いや、ユタヤは部屋から逃げ出した。

失礼いたします、と最低限の礼儀作法だけは徹底し、頭を下げて部屋の外へと飛び出す。当然、行く宛などない。心臓が壊れるのではないかと不安になるほど、激しい音をたてていた。

??殺されるかと思った。

そんなわけがない。そんなわけがないとはわかっている。だが、あの皇太子の目で睨みつけられた時、そんなわけがないのに、命の危機を感じた。

武器など何も持たずとも、あの男はその視線だけで、人を殺めることができるのではないだろうか。

ユタヤはひとまず部屋から離れようと、夢中で足を動かした。彼の他には誰もいないだっぴろい赤絨毯の敷かれた廊下に、彼一人分の足音が響いた。心臓の音は、鳴り止まない。

## 11、獣人の心

??三の君は、お前よりも三つ年下、御年五つにおなりだ。生涯何があっても三の君に忠誠を尽くし、その命尽きるまでお護りすることを誓え。

東と西の国境の森の中で、初めてその少女と出会った。命を救われ、受けたことのないような手厚い看護を越えて目覚めた時に、少年が教わったのはその一つであった。命尽きるまで、主を護れ、と。

巫女に付く仗身とは、元来そういうものなのだという。仗身となる獣人は生まれて間もないうちに後宮へと引き取られ、物心も付かぬような幼い頃から「巫女を護るために生きる」という意識を潜在的に植え付けられる。ゆえに、仗身たちは巫女を護ることを目的に生きるよう教育されるわけだが、その中でもユタヤは特殊であった。

ユタヤは他の仗身たちとは異なり、八歳というすでに自我の芽生えた頃に後宮へと引き取られた。「巫女を護れ」という信念は、その後に植え付けられた。そのため他の仗身と比べて忠義の薄い仗身に育つことが懸念され、当初は方々から反対の声が上がったという??だが、蓋を開けてみればどうだろう。ユタヤより忠義の厚い仗身など他にいない。

ユタヤ以外の仗身は皆、シルディアの言うように、巫女に「獣」の性を封印してもらうという呪縛でのみ成り立つ主従関係を結んでいた。おそらく、彼らは今日からシルディアが主だと言われればそれに黙って従うのだろう。その程度の忠義だ。

??では何故、自分はそうでないのか。

こめかみが締め付けられるように、痛む。ユタヤは片手でこめかみを押さえて、唸った。

カグワは自分の命を救ってくれた。これはその恩義である。だが、それだけが理由なのか。

カグワは他の聖女たちと違って仗身である自分と、獣人である自分と対等に接してくれた。その感謝もある。だが、それだけか。

何故だ。何故だろう。わからない。

悩むユタヤは歩き続ける。あてもなく歩き続ける。この異国の地で、彼の居場所など主の傍以外にない。主がいなければ彼の居場所はない。主を待つという名目で部屋に残っていたが、そこを追い出されてしまったのは、行く宛もない。彼は、あてもなく歩き続ける。??と、ふと、声がした。

「……ゆたや？」

シルディアに部屋を追い出され、皇宮の中を闇雲に歩き続けていたユタヤは、その声ではっと我に返った。

ここはどこだろう。

辺りを見渡すが、カグワの後に付いて歩く以外に部屋を出なかったユタヤには、この皇宮内の地理的感覚がない。気付けば、どこもかしこも豪華絢爛な皇宮内にしては珍しく、わりと質素な石造りの廊下を闊歩していた。そして、突然、彼を呼び止めたのは、聞き違えるわけのない、かの声である。それは彼にとっての、唯一の居場所だ。

「ゆたや」

「かぐわの君？」

一瞬だけ、空耳だろうか、彼女のことをずっと考えていたから幻聴でも聞いたのだろうかと思ったが、再び呼ばれてそれが幻聴でないことを知る。

一体どこから彼女が自分を呼んでいるのだろうかと慌てて周囲を見回すと、くすくすと笑う声がした。

「こつちよ、こつち！」

明るい声とともに、ぎいいと音をたてて石造りの重たそうな扉が開いた。扉が開くと、同時に食欲をそそるような暖かい食べ物の臭いが流れてくる。そうか、とようやくそこでユタヤは気がついた。彼がずっと闇雲に歩き続けたこの石造りの廊下は、厨房に続く道だ。この石の扉の向こう側は、厨房なのだろう。

突如現れた主、カグワが開いた石造りの扉には、小さな窓があった。どうやら彼女はこの窓から覗いて、廊下を闊歩しているユタヤの姿に気付いたらしい。

「ゆたやがこんな所にいると思わなかったから、びっくりしたわ！」

彼女は極めて明るい声で言つてのけるが、その言葉をそのままそっくり返してやりたいものである。

「そんなところ突っ立ってないで、こつちに来なさいよ」

啞然としているユタヤの心情など露知らず、少女は笑顔で手招きをした。

主にいつまでもその重そうな扉を持たせているわけにもいかず、ユタヤは啞然としながらも、厨房の中にと滑り込む。大勢の料理人たちが火を使う厨房は、北国のこの肌寒い気候など嘘のように、熱気に溢れていた。料理人たちは衛生状態を保つため、最低限の前掛けや帽子などは身につけているものの、皆半袖だ。そしてカグワもまた例に漏れず、涼しそうな格好をしている。よく見れば、服のあちらこちらが料理に使うのであろう酒やソースで汚れていた。

「……かぐわの君、一体何をしておいでか」

先刻まで彼がこめかみを痛めてまで悩んでいた原因は彼女である。しかし、そんなことも忘れて、ユタヤは呆れ果てた。

「何って、料理よ」

カグワは楽しそうに答えるが、その姿を見ればわかるというもの

だ。そうではなくて、ユタヤが問うたのは、「何故こんなところで料理などをしているのか」ということである。

苦りきるユタヤの質問の真意にはもちろん気付いているのだろう、カグワはユタヤの呆れ顔を見て尚笑うと、自分の頬を手の甲で拭いた。頬に付着していた煤が広がって、少女の白い肌を黒く染める。

「……実はね、皇宮の中を歩いていたら、たまたまオレークと出会ったの」

「はあ」

皇太子シルディアの世話役であるオレークは、当然皇宮の人間だ。皇宮の中を歩いていれば、出会うこともあるだろう。それが何故彼女が此处で料理をしている理由になるのか、ユタヤには話が読めない。

カグワは呆気にとられているユタヤを見上げて、それはもう楽しそうに、語った。

「それでね、オレークに、何をしてるの？ って聞いたら、今日はシルディアの食べる料理を作る料理人たちの仕事を視察に行くんだって言うから、着いてきてみたの。そしたらこんなにくさんの料理人たちが働いているんだもの！ もうわくわくしちゃって、私にも何か手伝わせてくれないかしら？ って料理長に頼んで」

「……見たところ、手伝いをしているようには到底思えません」

少女の服は、至るところが料理のソースやら煤で汚れている。ユタヤとて、偉そうなことを言える立場ではないが、それにしても一度も厨房になど立ったことのないカグワが、本職の料理人たちの手伝いをして役立つとは思えなかった。カグワ自身もそれは自覚しているようで「まあね」と言って首をすくめた。

「だから……今日この料理を出すときに、私も一緒にシルディアの所に行くつもり」

「殿下のところへ行って……どうするのです？」

「もしも味が変わったら全部私のせいだもの。料理長が怒られないように、私がきちんと謝ろうと思って」

少女は言つて、屈託なく笑う。ユタヤはますます呆然とした。昔から自由奔放な娘であるが、放つておくと、本当に何をしでかすかわかったものではない。

すると、そんなユタヤの心を読み取ったかのように、「まったく苦笑混じりの声がした。声の主はカグワの後ろに立つと、料理で汚れた少女を見下ろして苦笑いを浮かべた。この暑苦しい厨房の中でも軽装などせず、重く暑苦しそうに宮廷服を纏っているその男は、シルディアの世話役のオレークという。

「おかげでただの視察に訪れたはずがてんでこまいですよ」

彼の言葉にも、少女はめげない。

「あら、ただの視察をするよりも、より一層、普段料理人たちがどんな仕事をしているのかわかったでしょう？」

「普段の料理人たちならば、これほどまでにてんでこまいになることもないと思います」が

オレークはますます失笑した。全身にソースやら煤やらを付着させたカグワの格好を見れば、料理人たちをてんでこまいにさせながらも楽しそうに料理に興じるカグワの姿が容易に想像できるというものだ。

カグワはあははと軽快に笑つてオレークの失笑を流すと、今度はユタヤの前に立つて、まっすぐ彼を見上げた。彼女は澄み切った瞳で、問うてくる。

「??で、ゆたやはどうしてこんなところに？」

貴方が部屋を出る事なんて滅多にないのに、と付け加えて、カグワは目を幾度も瞬きさせた。

ユタヤははつと息を呑み、そこでようやく自分の置かれている現状を思い出した。

??それが妙だと言っている。あの女に惚れてる以外に、何の理由があつてそうまで尽くす？

自分の、カグワに対するこの執拗なまでの忠誠心は一体どこからくるのか。ユタヤ自身にもその答えはわからない。それでも自分な



りに考えて答えを捻り出したのに、その答えが気に食わなかったらしく、皇太子シルディアをえらく怒らせてしまった。が、「皇太子に部屋を追い出された」とは言えない。言葉を迷った挙げ句、こう説明した。

「……部屋に、皇太子殿下がお見えです。かぐわ様をお待ちになっております」

「シルディアが？」

「殿下が？」

声をあげたのはカグワとオレークとでほぼ同時だ。が、その反応は異なる。

「まあ、どうしよう。まだ私が窯に入れたオーブブルが出来上がっていないのに……」

カグワは料理の出来映えを案じて当惑したが、隣に並んでいるオレークは、カグワとは比べ物にならないほどに、驚愕していた。皇太子が誰かの部屋を訪れることは、それほどまでに珍しいことなのだろうか。??だが、料理の出来を気にして困ったように首を竦めるカグワを見るなり気を取り直し、オレークは冷静に対処した。

「……殿下には、私の方から巫女君の状況をお伝えしておきますので。巫女君は、思う存分に料理をなさってください」

「本当？　じゃあお願いしようかな」

オレークを見上げて悪戯っぽく微笑んだカグワの顔は、輝いている。きらきらとその笑顔は、目映いばかりだ。ユタヤは、思わず目を逸らした。

いつも見慣れたはずの彼女のその笑顔に、何故かどうしようもなく胸騒ぎがした。何と言えいいのだろう。見てはいけないものを見てしまったような、そんな緊張感が走った。??シルディアが妙なことを言うからだ。ユタヤは決して声には出せない言葉を、心の中で毒づく。お前は彼女に惚れ込んでいるから彼女に従うのだろうと、本当に妙なことを言う。

「ゆたやは、どうする？」

ユタヤの気の悪いなど知らない少女は、楽しそうに笑った。

どうする、とは、このままこの場所に残ってカグワとともにいるか、あるいはオレークとともに部屋に戻るか、という二択を問うているのだろう。だがしかし、皇太子に出て行けと追い出された以上、彼がいる限りユタヤはあの部屋へは戻れない。だからと言って、まだ心の整理の付かないこの状態でカグワと共に行動するのも気が引ける。??一人になりたい。しかし、一体何と説明すれば一人になりたいという思惑を上手く伝えられるのだろうか。

答えに躊躇するユタヤを見上げ、カグワが不思議そうな顔をしている。何か言わなくてはと、ユタヤが必死に言葉を選んでいると、なんとも丁度良い時機に、「巫女君、オードブルをそろそろ引き上げなくては」と料理人の一人が声をあげた。呼ばれたカグワは「行かなきゃ」と嬉しそうに言って跳ねあがり、急いで窯の方へと走っていく。その後ろ姿を見送りながら、ユタヤは心底胸をほつと撫で下ろした。

「巫女君、オードブルは大変熱くなっておりますので、素手で触ってはなりません！」

「そうなの？ 本当だ、近付くだけで熱気がすごい……！」

初めて経験する北国の厨房に一喜一憂するその姿は、本当にただの十五歳の少女でしかなかった。巫女だ聖女だと持ち上げたところで、カグワは、ただの少女なのである。ただの、人間だ。

??彼女とてただの人間だと、どうしてお前は言わない？

そう責めるような口調で問いかけてきたシルディアの言葉が、ユタヤの耳の中で何度も繰り返された。

ユタヤとて、当然、彼女がただの十五歳の少女であることを承知しているつもりであった。しかしその一方で、彼女のことを聖女だから巫女だからと割れ物を扱うように大切にしてきたという自覚もある。けれども、仕方がないではないか。それが仗身の仕事だ。そ

れが、巫女仕えの護衛の仕事だ。それともその考え方そのものが、根本的に間違っていたのだろうか？ 仗身だからと言って、護衛だからと言って、彼女を巫女だ聖女だと崇拝することこそが、間違っていたのだろうか？？

遠いカグワの後ろ姿を見つめ、ユタヤは悩ましく溜め息を落とす。そんな獣人の横顔を見て、何を思ったのだろうか。低く声をかけてきたのは、彼の向かい側に立っているオレークであった。

「?? 殿下に、何か言われたか？」

何の前触れもなく突如言い当てられて、ユタヤは黙って瞠目する。表情の変化の乏しいユタヤであるが、その反応だけで凶星だと気付いたらしいオレークは、暑苦しい宮廷服を纏っているにも関わらず汗一つかかない。涼しい顔で、皇太子の世話役は言った。

「何を言われたかは知らんが、気にするな。というのも、妙な話だが…… 最近とても殿下は気が立っておられるからな」

とても情緒不安定な状態なのだ、と言って彼は腕組みをした。彼の結わえられた茶色い癖っ毛が、暑さにうだつて頂垂れる。ユタヤは黙って彼の言葉に聞き入った。

「?? 近頃、皇宮の横、政殿のある王宮の一部で、国賊と見なされた軍人の一斉処刑が行われている」

処刑、と後宮にて育ったユタヤにはあまり実感の湧かない言葉を、心の中で繰り返した。聞く話によれば、北国は軍人の治める軍国だ。戦に躊躇しない軍国は、当然国内における処刑にも、躊躇などしないのだろう。

「殿下は人の死に敏感でな…… 近い場所で人が死ぬと、それに同調して『力』が揺らぐ。そしてそれを自分では制御できないそうだ」

俺もたまに『力』の制御ができなくなることがある、と笑った皇太子の顔が脳裏に浮かんた。皇太子自身がそう語り、そして彼の世話役もがそれを認めるのだから、それは事実なのだろう。皇太子は絶大な『力』を持つが、それ故に、『力』に振り回される。

「『力』の揺らぐ時、精神もまた不安定になり、感情が高ぶる。？」

？だから、何を言われても気にするな。殿下自身にも止められんだ」

「……」

「そしてそれがあの一線を越えると、暴発する。三年付き人をやっているが、未だに俺にもその止め方がわからん。殿下自身に止められないのだから、当然かもしれないがな。だが、しかし？？」

腕組みをしたオレークは首をくると回して、窯の中から鉄板を取り出し料理人たちと談笑するカグワの姿を遠目に眺めた。彼女はこの短時間で料理人たちともすっかり打ち解け、あの輝かしい笑顔を振りまいている。それを見ると、ユタヤの胸の内がざわついた。そんな彼の胸の内は、彼自身にしかわからない。隣にいる男は切れ長の目を細めて、呟いた。

「巫女君なら、あるいは？？止められるかもしれん」

「……なにを？」

「殿下の、『力』の暴発を、だ」

はつきりと吐き出されたオレークの言葉に、ユタヤは目をみはった。

「かぐわの君が……？」

それに対してオレークはしっかりと頷く。

「ああ。同じ『力』を持つ国の最高権威という立場上、『力』のおさめ方がわかるのかもしれないが……」にもかくにも、巫女君と話をした後の殿下は、大抵穏やかでおられる」

常であればそろそろ『力』が暴発してもおかしくない頃なのに、と彼は言った。なるほどだから彼はわざわざカグワの部屋に足を運んでまで彼女を訪れたのか、とユタヤも納得した。

わざわざ部屋を訪れなくともいつものようにオレークを通して彼女を呼び出せばよかったものを、それをせずに自らの足で彼女の元へ出向いたのは、それだけ切羽詰まっていたということなのかもしれない。そしてたまたまその場に居合わせたユタヤを相手に、感情を高ぶらせたということなのだろう。

ユタヤはあの人をも殺しそうな恐ろしい目つきを思い出して、思わず震えおののいた。あの恐ろしい、息さえ詰まりそうな威圧感、揺らぐ『力』の成せる技だ。

「まあ……今はとりあえず、殿下と会わん方がいいだろうな。殿下には自室へ戻って頂くよう俺から言っておくから、お前はしばらく此処にいろ、獣人」

オレークは恐らくユタヤの名前を覚えていないのだろう。「獣人」と、肩書きでさえない呼称を使う。ユタヤとて、別段その呼称が嫌いなわけでもないのに、黙って頷いた。此処にいれば必然的にカグワの傍に控えることとなるが、皇太子と鉢合わせするよりは幾分いい。

オレークはユタヤが頷いたのを確認して、踵を返した。ひらりと彼の纏う宮廷服のマントが翻る。彼は重々しい石の扉を開くと、厨房から外へと出て行った。ばたん、と大きな音をたてて扉が閉まる。扉の開いた一瞬だけ流れ込んで来た北国の冷たい空気は、しかしすぐに石の扉で遮断された。

残されたユタヤは扉の脇に立つてまっすぐと姿勢を正すと、ぼんやりと厨房の中を見つめた。下働き程度の地位でしかない多勢の料理人たちに混ざってころころ動き回るカグワは、一人浮いている。しかし、浮いているにも関わらず、その集団から排除されることもない。いつのまにやら、その集団を自分の色にと染めていくのだ。汚らしい下働きの料理人たちが彼女を中心に、みるみるうちに輝いていく。情性的に行われていたはずの業務を、心から楽しそうにこなす。??彼女がいるだけで、薄暗い厨房にまるで光が差したみたいだ。

彼女は紛れもなく、巫女であった。だが、同時に普通の人間の少女でもある。そして、ユタヤにとっては仕える主であり、巫女であり、普通の少女であり??特別な存在だ。

この「特別」をどのように表現すればいいのか、ユタヤには判断

が付かなかった。シルディアはこれを男が女に抱く恋慕の欲だという。下世話に言えば、性の欲求だとか??だが、ユタヤにはそんなつもりはない。というより、考えたこともなかった。

鉄板の上から上品な陶器の皿の上に料理を移し替えて盛りつけて、満足そうに笑ったカグワが目線をこちらへちらりと寄越した。少女と目が合う。ほんの一瞬のことであるが、ユタヤはその一瞬を見逃さない。にこりと微笑んだ彼女が、その満足感を他の誰より先に自分に伝えてくれているのだと悟って、とても複雑な心境に陥った。

常であれば、ユタヤもそれに小さく笑って彼女の満足感を讃えてやるのであるが、今の彼にはそれができなかった。困ったように視線を泳がせて、俯いてしまう。そのさりげない変化に、カグワが気付いたかどうかは定かではない。

皇太子の世話役であるオレークは「殿下は気が立っておられるだけだから気にするな」と言った。しかし、ユタヤにとっては皇太子の言ったことは精神の不安定な状態で吐き出された戯れ言と流すには重すぎて??忘れることなどできない。

彼女のことを命に変えても護るのだと己に誓って生きてきた青年の心に、生まれて初めて迷いが生じた。

果たして自分が彼女に尽くす忠誠心とは、正しく清らかなものなのだろうか、と。

## 12、巫女の心

自分の主に対する忠誠心とは清らかなものなのか。

獣人である自分に引け目のある彼が悩む一方で、その主である少女は、その横顔を遠くより見つめて、思う。

??どうも、己の仗身の様子がおかしい。

獣人の主である少女は、即座に気付いていた。

気付かずにおれるわけもない。なにしろ、彼とは十年來の付き合いなのだ。実のところ、彼が厨房の前の廊下を虚ろな眼差しで徘徊しているのを見たその時から、少女はその様子のおかしいことに気がついていた。

だが、カグワのことを何よりも最優先にする彼が、自分の抱えている悩みをそう容易には主に打ち明けないであろうことは彼女も承知していた。??昔からそうなのだ。彼は余計なことを言っ主主心配をかけまいとする。例えば七つの年の頃から仗身としての修行を始めた彼が他の誰よりも苦勞を強いられていたことはカグワとて重々承知だ。二つや三つの年の頃より様々な身体能力の訓練をさせられてきた他の仗身たちと比べ、彼の能力が当初は劣っていたことなど考えてもみれば当然のことだった。それでも彼は泣き言の一つも漏らさなかった。そして今では、他の仗身と比べてもなんら遜色ない。

そんな彼だから、何を悩んでいたとしても、自分に相談してくることはないだろう。カグワはそう知っていた。西国から遠く離れたこの北の地で、仗身の彼にとって悩みは多くあるに違いない。その内容まではわからずとも、少しでも彼の支えになれるようにいつもの通りに彼に笑顔で振る舞おう。??よもや彼の悩みの種が自分の中

にあるなどとは夢にも思わぬ少女は、そう心に決めていた。

料理を終え、一通り厨房を楽しんだカグワは、一度ユタヤを引き連れ自室へと戻った。その時にはすでに、自室で待っていると聞いた皇太子シルディアの姿はそこになかった。恐らくオレークに言われて自分の寝室に戻ったのであろう。待たせてしまったて悪いことをしたなとカグワはあの色素の薄い少年のことを思う。だが、今はそれよりも、目の前にいる長く連れ添った仗身のことを心配だった。

部屋に戻ってから、ユタヤはカグワと距離を取った。カグワが寝台の上に腰掛ければ、彼は離れた窓際に立ち尽くす。恐らく何か一人で考えたいことでもあるのだらう。カグワもあえてそのことには突っ込まずに、ひとまず厨房で汚れた服から着替えることにした。

いつもカグワの服は、服飾を専門とする下働きが用意してくれていた。今も服が汚れたから新しいのを頂戴とカグワが一言言えば、彼女たちが飛んでくることだろう。だが、自ら厨房に飛び込んで自ら服を汚してしまったのに、忙しい彼女たちをわざわざ呼び出すのも気が引けた。ので、ひとまず今日のうちは適当にそこにあるものを着てしまおうと、カグワは部屋に備え付けられた衣装箆笥の戸を開いた。小間使いたちの用意してくれる服は此处ではなくまた別の巨大な倉庫の中にしまわれているのだが、この箆笥の中にも一通りの衣服が揃えられている。カグワはそこから薄手のドレスを一枚取り出して、扉を閉めた。薄手の生地は夜寒いが、布団を被ってしまえば問題あるまい。短絡的にそう考えて、カグワは今纏っている汚れた服をその場にばさりと脱ぎ捨てた。

暑い厨房の中で働く料理人たちは、軽装だ。それに倣ってカグワも上着や羽織ものを脱いでしまっていたために、その汚れた最後の一枚を脱げば下着姿も同然だった。とは言え、この部屋には今自分と仗身しかないのだし、いいだろうと安易に考えて、カグワは脱



衣した。すると、その脱ぎ捨てられた衣服の音を聞いて顔をあげたユタヤが、大きく目を見開いた。

「???かぐわの君!」

その切羽詰まったような声色に、カグワも驚き振り返る。窓際に立っていた彼と目が合うと、青年は慌てたように視線を逸らして下を向いた。そのぎこちない仕草に、ますます拍子抜けする。

「早く衣服を纏ってください……そのようなところでお召しかえなさいますな!」

「え? ええ……」

カグワは瞬きながらも、とりあえず言われた通りに箆笥から取り出したドレスを被る。頭を出して腕を出して、衣服の皺を伸ばして整えながら、下を向いているユタヤの方をこそっと伺った。ユタヤは困惑しきった様子で目を泳がせている。

「……急にどうしたのよ」

「……どうしたもこうしたもありますまい。着替えるのであれば、いつものように服飾の小間使いを呼んで他の部屋へ行くか、あるいは最低限そうおっしゃって下されば私の方が部屋を出ます」

「そんな今更気を使うような仲でもないじゃない。別に真っ裸になつてゐるわけでもあるまいし……」

カグワは小さく呟いて、ぱぱっとドレスをはたくとベッドの上に腰掛けた。さすがに真っ裸になるのであれば最低限の礼儀作法として互いに気も使うが、下着姿ぐらいではなんのそのである。カグワは脱ぎ捨てて床においた汚れた服を拾い上げると、それを膝の上で畳んだ。ユタヤは依然として苦い顔をしている。

「少しは羞恥を持って頂かないと困ります」

「なにを今更……後宮にいた頃は、一緒に川で褌もしたじゃない。それこそ真っ裸で」

「何年昔の話だと……しかもあの後、私は多方面からこつてり叱られたんです」

「そうなの? 私はロマーナに怒られただけだったわ」

懐かしいなあと過去を思い起こしてカグワは笑う。

あれはいつの頃のことだろう。ユタヤが後宮にきたばかりの頃のこと、ただひたすら川の冷水に浸って巫力を蓄えるという修行が辛く、少しは気が紛れないだろうかと思つてユタヤを誘つたのだ。まだ後宮の常識に疎かつたユタヤは主である聖女に誘われて断れるわけもなく、己には何の意味もなさない修行に付き合つたわけである。

「あれはまだ男も女もなかつた幼き頃のことです。けれど今は違います」

「違わないわよ。あの頃から私たちの関係性は何も変わつてないわ」

「違います。あの頃私は八つ、貴女には僅か五つだった。あれから十年の月日が流れました」

ユタヤが渋い顔をして言うので、相変わらず真面目なんだから、といつもの小言と同じように笑つて流した。カグワは畳んだ服をベツドの上に置いて立ち上がる。少女は窓際に立っている青年の隣に並んで、小高い窓枠に腰掛けた。

「それだけ長い付き合いってことじゃない。私は気にしないわ」

「かぐわの君が気になさなくなるとも、私が気にします」

またそんなことを、と笑つてカグワは窓枠に腰掛けたまま足をばたばた泳がせた。が、隣に立つユタヤの目を見て、思わずその足が止まる。彼はまるで追いつめられたみたいに、必死で、縋るような目をしていた。それはいつものような苦言を呈する眼差しではない。??どうにもこうにも、本当に様子がおかしい。

「???どうかしたの?」

カグワは、そう問うたところでユタヤが何も答えてはくれないであろうことを知りながら、問いかけた。案の定、ユタヤは「別にどうもいませんが」と口ごもる。しかし、その眼差しは明らかに妙だ。まるで何かを恐れるかのような、怯えた目をしている。

「ずっと他国に囚われたまま……疲れてしまったのかしら」

適当に言い繕って、カグワは隣に立つ青年の顔に手を伸ばした。

いつもの通りに彼の顔を撫でる程度の接触を試みると、何故だろう、ぴくりとわずかにユタヤが身を引かせた。まるで躊躇するようなその動きに、カグワは面食らう。今まで一度だって、彼に接触を拒絶されることなく、なかったのに。

「……ゆたや？」

ユタヤは何も言わなかった。ただ拒絶するような所作をしてしまったことを後悔するように悲しい顔をして、下を向く。そして申し訳なさそうに首を横に振った。「なんでもない」という意味なのだろう。

（なんでもないわけが、ないのに）

彼に触れるはずだった手のひらを引っ込めて、カグワは自分の胸の前を押さえた。なんとも妙な空気だ。気まずい雰囲気はその場を支配していく。

と、それをまるで見計らったかのように、突如扉をノックする音が響いた。

「???失礼します、ユーリです。夕食の用意をしに参りました」

その音と声が、いい具合に気まずい雰囲気をかき乱す。カグワは「はい」と不自然なほどに明るく答えて、窓枠から飛び降りた。

ユタヤもどこかほっとしたように外を向く。

丁寧にお辞儀をしてから入室してきたユーリは、二人の間に流れた気まずい雰囲気には全く気付いていないようだった。取り繕えたことに安堵しながら、カグワは「あ」と思い出したように声をあげる。

「そうだ、きつと今頃シルディアも夕飯を食べ始める頃よね!」

その台詞が少し芝居じみていることに、恐らくユタヤは気付いているだろう。カグワがこの気まずい空気を流そうとしているのだと、彼もきつとわかっている。

「ええ、そろそろ殿下のお部屋の方にも夕食の当番をしている小間使いが向かっている頃ではないかと」

そんな主従の動きに気付かぬユーリは、妙にはしゃぐカグワを見て笑って答えた。彼も、料理人づてに聞いたのかあるいは他の小間使いから聞いたのか、カグワがシルディアの夕飯を作る厨房に籠っていたことを知っているに違いない。

「じゃあ、ちよつと私、シルディアの所へ行ってくるわ！ もしも味が悪くて料理長が怒られてしまったら可哀想なもの。帰ってきたら、夕飯を食べるから！」

カグワがそう言うと、ユーリは「わかりました」と了承した。

「ではそれまでに夕飯の支度は整えておきますね。どうぞ行つてらっしゃいませ」

軽く会釈したユーリのその後ろに、窓から外を眺めているユタヤの後ろ姿が覗く。カグワはなんとはなしにちらりと彼の後ろ姿を見やっ、それから外へと飛び出した。ユタヤは一度も、彼女の方を振り返るうとはしなかった。

### 13、闇

自室を飛び出したカグワは、そのまままっすぐシルディアの部屋を目指した。この皇宮に囚われ、もう大分日も経って、この道にも慣れたものである。それにしても、暖房器具のない廊下は、寒い。カグワは薄手のドレス一枚で部屋を出てきてしまったことを後悔しながら、肌寒い廊下を早歩きで抜け、まっすぐ皇太子の部屋のある階へと向かった。

部屋に残してきたユタヤの様子が気にならないわけではないのだが、だからと言って引き返すわけにはいかない。引き返したところで彼にかける言葉も見つからない。それに、シルディアの料理について説明をしなくてはいけないことは事実なので、まずは彼に会いに行かなくてはならなかった。ユタヤについては、それから考えよう。

皇太子の部屋の階にある十数個の部屋は、ほとんど皇太子シルディアの私室であつた。寝室の他にも遊戯室や、食堂、ホールや公務室などもある。しかし、寝食を含めた大概の生活が広い寝室一つで賄えてしまったため、シルディアは他に用のない場合ほぼ一日の全てをその寝室で過ごしていた。と、いうことも、すでにカグワは知っている。

夕日が空を赤く染める頃、そろそろシルディアも夕飯を食べる頃合いであろう。それはそれは立派な食堂を持つている彼であるが、恐らく今日の夕食もいつも通り寝室の中で取るはずだ。カグワは食堂の横を素通りして、まっすぐ廊下の突き当たりにあたるその寝室の扉の前へと歩を進めた。そして辿り着くと、とんとん、とその巨大な扉を叩く。

「シルディア？ カグワです。入ってもいいかしら？」

扉に顔を近付けて中に聞こえるようにと声を張り上げると、すぐ

さま内側から返事があつた。

「いいよ。勝手に入ってきて」

はつらつとした声だ。機嫌がいいのだろうか。

了解を得たカグワはゆっくりと巨大な扉を開くと、部屋の中へと足を踏み入れた。

「お食事中だつたらごめんなさい。どうやら昼間、私の部屋に来てくれたみたいだけど、丁度その時いなくて。というのも、実はね……」

貴方が今食べてるご飯を作っていたのよ、と続けようとして、カグワは口を噤んだ。確かに部屋の中から声はしたのに、彼の姿がどこにもない。それどころか、寝室に置かれた食卓の上には途中まで夕食の用意をした痕跡があつたが、それだけであり、夕食の用意をしてくれるはずの小間使いの姿さえ見つけられない。

「……シルディア？」

一体部屋の主はどこにいるのだろうかと部屋の中を見渡していると、「ちよつと待っていてくれ」という彼の声が響いた。その声は、どうやら部屋の中央に置かれた寝台の上から響いている。その方向へちらりと視線を向けると、寝台には天蓋から紗幕が完璧に下りており、その中が見えないようになっていた。彼はあの中にいるに違いない。

夕食の準備すら途中にして、小間使いは一体どこに行ってしまったのだろうかと思議に思いながらも、カグワはその寝台へと近付いた。とりあえず彼がそこにいるのなら、事情は彼から聞けばいい。

そう思つて彼女は寝台へと近付いて、しかしふと、足を止めた。部屋に入ってきた時は気付かなかつたが、寝台の方へ近付くと、徐々に聞こえてくる音がある。??ぎしぎしと寝台の軋むような音と、そして若い女の吐息のような溜め息のような妙な声だ。

なんだろう、とカグワは首を傾げた。「なにしてるの」と言つて寝台の方を覗いてもよいものか、いやしかしシルディアは「ちよつ

と待つてて」と言ったのだからそれに従い待つべきなのか。迷いながらも、一步一步カグワは寢台の方へと近付いて行く。近づくにつれ、女の声が鮮明に聞こえるようになった。吐息混じりに「殿下」とシルディアを呼んだり、「もうやめて」と否定を述べたりするが、あまり嫌がっているようには聞こえない。まるで若い女が媚を売るような声である。

が、カグワが寢台のすぐ傍までくると、その声が止まった。代わりに、喚いていた女が走り回った後のように息を切らしている。一体何が起きているのだろうか、カグワがついに紗幕を開こうかと手を伸ばすと同時に、内側から紗幕が開かれた。

しゃつという軽快な音とともに、中から現れたのはこの部屋の主である、シルディアだ。彼はどことなく乱れた金の髪をかきあげた。どことなく艶っぽいその仕草に、嫌な予感が走る。

「お待たせ。悪いね、女中が本気になるものだから」

「本気？」

彼の言葉の意味がわからずに問い返すと、シルディアは不適に笑んだ。そして、紗幕をさらに大きく開くなり、自分の後ろ、寢台の上に転がっている女に向かって声をかける。

「ほら、立て。西国の巫女君の前で失礼だと思わないのか」

カグワはその女の姿を見て、動転した。

以前、シルディアの部屋を訪れた時にも寢台の方から出て来た女中であつた。シルディアが「暇つぶしに遊んでいた」と言つたあの女中である。

女の纏っていた衣服はあられもなく乱れ、あちらこちら肌が露出している。特に下半身の乱れがひどく、大きく開脚された下肢の間まで見えていて、当然他人のそんな箇所を見たことなどなかったのがカグワは慌てて視線を逸らした。

女はゆっくりと起きあがると、乱れた服を必死で整えながら、寢台から下りる。よろよとその足取りはおぼつかない。

「夕飯の支度は後でいい。今は席をはずせ」

皇太子にそう命じられ、「はい」と女は弱々しく頷くと、はあと大きく深呼吸してから、やはりおぼつかない足取りで部屋を出て行った。その後ろ姿を見送りながら、ときどきとカグワの鼓動は波打って止まらない。

一方のシルディアは涼しい顔をしていて、誰もいなくなった寝台の上に腰掛けるとすらりと足を組んだ。彼は乱れた薄色の金髪を撫でながら、こちらを見上げてくる。

「話を途中で遮ってしまったね。俺が君の部屋を訪れた時、いなかったのは、何をしていたからだって？」

「え、と……貴方の夕飯になる料理を作っていたからだけど……」だから少々味が悪くても許してね、と茶化しに来たつもりが、そんな文句は全てどこかへ吹き飛んでしまっていた。そもそも夕飯の準備がまだ整ってもしないのに、そんな話をしてもし方がない。

すっかり動転しきったカグワの様子を見て、シルディアはくすくす笑った。彼は澀んだ青い瞳を細めて、少女を見上げる。

「さっきの女が気になる？　大丈夫さ。快樂が行き過ぎて腰砕けになっただけだ」

「え……」

「さすがに今回は意味がわかるだろう？　それとも巫女を育てる後宮では全く教わらないのか？」

そんなことはないけど、とカグワは口籠った。

実際、さすがのカグワにも、今回は彼が一体何をしていたのか予想がついた。女ばかりの後宮ではあるが、教養として命の生まれる過程は教わる。だが、だからと言って当然その現場を見たことなどなく、ましてや経験などないわけで、動転していた。

そんなカグワの心を読んだように、シルディアが呟く。

「知識としては知っているが、実際にどのようなものかは知らない、といったところか。？？そうだ俺が教えてあげようか」

「え？」

どういうこと、と尋ねるが早いか、シルディアに腕を引っ張られ



てカグワはバランスを崩した。そのまま転がるように寝台の上に押し付けられて、思わず目を瞑る。が、思ったほどの衝撃はなく、いかに彼の寝ている寝台が柔らかな物であるかを知った。

目を開くと、自分の上に覆いかぶさるようにして、シルディアが寝台の上に四つん這いになっていた。さらりと金髪が流れて彼の顔に影を作る。

「カグワは十五だったけど……まだ幼いが、できない体の作りではない」

「なに……」

「まあ、色香はないが、顔立ちは悪くないし、なにより巫女であるという事実がそそるじゃないか」

彼の言う言葉の意味のほとんどを理解できずに、カグワは目を白黒させた。ただ、彼によって体の自由を奪われて今は逃げることは愚か動くことすらままならないという事実だけは、理解できる。シルディアはそんな少女を見下ろしてくと笑った。

「怖がることはないよ……俺は幼少期から、この行為の精緻なやり方ばかりを教わった。だからさつきみたいに女を腰砕けにするなんて造作もないことだ。それは例え純潔の少女が相手でも変わらない」

いい思いをさせてやる、と彼は尚笑うが、ふと、その笑顔の中にカグワは影を見た。なんだろう、まるで彼自身が闇に飲み込まれてしまっているみたいだ。その闇に気付いた瞬間、カグワは抵抗することをやめた。少年は、影の中で囁くように、言う。

「皇宮の外では連日人が死んで行く。奴らは望まずして命を落とすて行くんだ。それなのに、皇宮の中に生まれた俺は、命を作れと言われる。連日連日、女をやりたい放題だ。女どもも喜んで俺に組み布かれる。おかげでどんどん行為ばかり上達していくよ。だからカグワも安心していい。君は初めての行為にして快楽に溺れられる」

言って、シルディアはカグワの纏っている薄手のドレスに手をかけた。着衣の楽な衣服だった故に、簡単に脱げてしまう。その下か

ら肌着が覗いた。カグワはその慣れた手付きでなされる一連の動作を、どこか俯瞰した心地で見ている。??彼は一体何をしている?」「巫女は純潔でなくてはいけないとか、そういう決まりはある?」「決まりは……特にないわ。純潔を奪われることもないけれど」「なら、今夜初めて奪われる。いいじゃないか。その相手が隣国の皇太子だなんて、派手な醜聞だ。国際問題になるかな?」

「さあ……私にはわからない」

「国際問題にはならなくとも、君の仗身は怒るだろうな」

「……ゆたやが?」

「そうだ。俺が君の肌に触れて穢したと知れば、激怒するに違いない」

「ゆたやは……」

言って、カグワは別れ際、こちらの方を振り返ろうとしなかった彼の顔を思い描いた。今、彼が何を悩んでいるかカグワは知らないが、彼の忠義はとてつもなく厚い。確かにカグワが泣き叫んでシルディアに無理矢理組み敷かれたのだとしたら、彼は激怒するだろう。だが、カグワは自分の上に覆い被さって次々に衣服を剥いでいくこの男に対して、何故か全く抵抗する気が起きなかった。

「ゆたやは……怒りはしないわ。私が貴方を受け入れたのだとすれば」

そう呟くと、シルディアの動きがぴたりと止まった。彼は表情を失い、まっすぐとカグワを見下ろした。そして、手元からドレスを取り落とす。ぱさりとそれが寝台の毛布の上に重なった。

「……受け入れるのか?」

「拒絶する理由が見つからないもの」

「……だとしたら、仗身はますます怒るだろう。いや、怒るのではなくやりきれない気持ちに苛まれるかな」

「どうして」

「どうして、と聞くか。仗身が仗身なら、主も主だな。君たちは立派な男と女でありながら、傍に寄り添って、何も感じないのか」

「だって、それが私たちにとっての日常だもの。男だとか女だとか、巫女だとか仗身だとか、そんなもの、何一つ関係ないわ」

「君がそう思っていて、向こうはそうじゃないかもしれないよ」  
吐き捨てるように言って、彼は少女の体を撫でる。カグワはそれにすら反応せずに、ただ茫然と目の前の男を見つめていた。彼の瞳の奥で時折揺らぐ「闇」の存在が気になって仕方ない。彼は一体どうして、こんなことをしているのだろう。これは命を育むための艶かしい交わりなどではない。??まるで何かから逃れるために必死に縋るような、そんな行為だ。

体に触れても何の反応もしないカグワを見て、シルディアはふと動きを止めた。そして、首を傾げる。

「君は……本当に不思議だね。拒絶もしなければ受け入れもしないのか」

「……どうしていいかわからないから」

「突然男に押し倒されたりなんかしたら、大抵の女は恐怖から拒絶するか、あるいは望む所と喜ぶ場合もあるけど……そのどちらでもないんだね」

「だって私にはこの行為の理由がわからないんだもの。……貴方が命を宿すために連日女を組み敷いているのだとしても、その相手が私では意味がないわ。私は西国の巫女だから」

皇太子には跡継ぎを作る義務がある。それならそのための女が必要だ。それは少なくとも、カグワではない。西国の巫女との間に子供が生まれたとて、それは北国の世継ぎにはならない。故に、この行為は無意味だ。それはシルディアとてよくわかつているはずなのに。

「喜びはしないわ。この行為では何も生まれないから。恐怖もしないわ。怯えているのはシルディア、貴方の方だから」

「なに……?」

カグワはゆっくり腕を持ち上げて、自分の上に被さっている彼の顔を、そっと撫でた。その瞳は、何かに怯えている。何か??己の

中に潜む「闇」の存在に怯えているのだろうか。

「貴方は……救いを求めているんだわ。闇に飲まれるのが怖くて、誰かに縋りたい。でも、その縋り方がわからないのよ」

シルディアは驚いたように目を見開いた。彼は触れていたカグワから手を放し、起きあがる。そして目を丸くしたまま、カグワを見つめた。

「だから、夜な夜な女を組み敷くのね。跡継ぎが必要だからと理由付けして。本当は、別に跡継ぎなんてどうでもいいのよ。ただ、人肌が恋しいの。誰かに抱きしめて欲しいのよ」

シルディアが退いて体の自由がきくようになり、カグワもゆつくりと起きあがる。脱がされたドレスは寝台の横に落ちてしまっているが、気にしない。下着姿のまま、前へと身を乗り出して、彼の顔を覗いた。

「シルディア、貴方は愛が欲しいのね」

「愛？ 愛なんて、俺は……」

「このまま貴方に組み敷かれて純潔を捧げるのは簡単よ。別に私はそんなものに固執していないもの。まかり間違って貴方の子を宿したっていいわ。私は巫女だから、新しい命を厭う理由もない。だけど、それは貴方のためにならない」

「俺のため、だと……？」

「お可哀想な皇太子殿下、一人で夜を越えて、たくさんの不安を抱えて。何も知らない数多の女たちにそうやって同情されて、体を捧げられて、それで満たされる？ いいえ、そんなはずがない。だって、同情は愛ではないから」

シルディアは首を横に振った。聞きたくない、と耳を手で押さえる。シルディアの細い体が、怯えるように震えた。カグワはそんな彼の背中を撫でる。

「貴方は本当は、誰かに愛してほしいのね。皇太子だからとてはやされて、誰も自分のことなんて考えてくれない。ただ『力』があるからと軍からは武器のように扱われ、何でも思うがままに、とこ

の皇宮に幽閉される。女たちは喜んで体を明け渡すけれど、それは貴方を理解して心から愛しているからではないわ。貴方が皇太子だからよ」

「……やめろ」

「誰も貴方のことをわかつてくれない。だからどうやって縊っていいのかもわからない」

「やめろ！ お前にだって、わかるものか！」

シルディアは金切り声で叫んだ。きつ、とカグワのことを睨みつけて、頭を抱える。まるで何かに追いつめられた小動物みたいに、体を丸めた。かと思えば、今にも泣きそうな顔で、まくしたてていく。

「お前にだって、わかるもんか……！ 俺には聞こえるんだ、民の声が……。死んで行く、人間たちの声が……！」

カグワはかつて、シルディアの語った言葉を思い出した。

？？見たくないのに見てしまう。聞きたくないのに聞いてしまう。やりたくないことをやってしまつて、それを止めることができない。

彼はそれを、『力』の暴発と呼んだ。確かに『力』の成せる技の中には、他人の心を読むものや、未来や過去を見るものがある。彼は自分の『力』を制御できずに、死人の心を読んでしまう。

「誰も彼もが、皇太子に、俺に救いを求めてくる……！ 死んだ人間の魂が、夜な夜な俺に襲いかかってくるんだ！ 助けてくれ、救ってくれ皇太子様と！ 御慈悲を、と！ まだ生きていたい、死にたくない、やり残したことはたくさんある……！ 命を超越せ、命を超越せと……！」

だけど俺にはどうすることもできない、と彼は言った。聞こえるだけで、どうすることもできないと。

「俺は皇太子だ……人並み外れた『力』も持っている……だけど、

何もできやしないんだ！ 人の命を救うことも、戦争を止めることも……！ なのに誰も彼もが俺に救いを求めて、死んだ後にも彷徨って俺のところへやってくる。誰一人、俺を救ってはくれないのに……！」

嗚呼、そうか、とカグワは彼を見下ろして氷解した。

この可哀想な少年は、愛を知らないのだ。親の愛を知らない。兄弟の愛も知らない。無償の愛を知らない。皇太子、とてもはやされることは、愛ではない。

「シルディア……」

今にも泣き出しそうな彼の背中を撫でて、次には綺麗な金髪を撫でて、カグワは優しく囁いた。彼の抱える闇を溶かすことができるのは、無償の愛でしかない、と思ったから。

「キスを、しようか」

え、と拍子抜けした声がして、彼は顔をあげた。実年齢よりもいくつも幼く見えるあどけない眼差しで、カグワのことを見上げる。カグワはにこりと笑って、彼の髪を撫でた。そして、その綺麗な前髪をかきわけて額を出す。

「寝る前に、嫌な夢を見ないように。見たくもないものを見てしまわないように。聞きたくないものを聞かないように。おまじないの、キスよ」

そう呟いて、カグワは彼の額にそつと唇を押し付けた。まだ記憶も定かではないほど昔、幼少の頃に、母が自分にそうしてくれたみたいに。また、後宮にきた後も、母代わり姉代わりとなったロマーナが毎晩そうしてくれたみたいに。

不思議なもので、子供はこれだけで安心して夜を過ごせるのだ。そして隣に母が寄り添って寝てくれるだけで、嫌な夢の一つも見ない。それは巫力の修行にはならないが、幼子にとっては重要だった。そしてこの少年は、幼い頃から無償の愛を経験せずに育ったために、夜な夜な生まれ持った強大な『力』の働きで、未来の夢や過去の夢、そして見知らぬ人間の夢にまで同調してしまうのだらう。やがて、

人の苦しみばかりを吸収してしまう。

「ね？ これでもう大丈夫。一緒に寝ましょう？」

シルディアはまるで憑き物が落ちたかのように邪気のない顔をして、目をぱちくりさせている。カグワはもう一度丁寧に彼の額に口付けて、にこりと微笑んだ。寝るにはまだ早い、ようやく日の落ちた頃だけれども、いいだろう。夕飯も食べていないわけだが、きつと朝には空腹で健康的に目が醒めるはずだ。

カグワがころりとベッドの上に横になって手招きすると、それに誘われるようにシルディアもころりと横になった。先刻カグワを組み敷いて衣服を脱がして行った時の彼が嘘のように、大人しい。カグワの言葉に逆いもせず、寝台の上に転がった。

それでもまだ不安な顔をする彼を、カグワは転がったままぎゅつと抱きしめた。母親が子供を抱くように、彼を胸に抱いて、落ち着けるように背を撫でる。すると、途端に彼の顔から不安の全てが溶け出して行くのがわかった。瞳の奥に潜んでいた『闇』も、今はもう、見えない。

安心しきった子供のように、彼はやがて穏やかな眠りの中へと落ちて行った。さすがに彼が何の夢を見ているのかは、カグワにもわからない。だが、その穏やかな寝息から、悪夢にうなされているわけではないことは明らかだった。

気付けばいつのまにやらシルディアはカグワの肌着の裾を掴んで離さず、そのまま寝入ってしまったようだった。これではそつと彼を置いて帰ることもできない。

(……まあ、いいか)

その大人しい寝顔を見下ろして、カグワはそう思った。夕飯を用意して置いておいてくれるはずのユーリには申し訳ないが、今日はこのままここで寝てしまおう。そして彼と一緒に朝を迎えよう。そうすればきつと、彼の中の闇も完璧に浄化されるはずだ。

そう結論づけて、カグワもまた、瞑目した。やがて緩やかな時の流れの中で、睡魔がゆっくりと押し寄せてくる。

カグワは穏やかな眠りの中へと埋没していった。

少女はその頃、この北の大地でどのような動きがあったのか、何も知らない。

北の軍国が、どのように駒を進めているのか、何も知らない。

どれだけの人間が北の国で殺されているのか、何故殺されるのか、何も知らない。

そして、今頃自室の中で、仗身である青年がどのような想いを抱いて彼女を待っているのかということさえも、何も知らずじまいであつた。



## 14、世話役の仕事

この世界を支配する全四力国の中で、極寒の国と呼ばれる北国ラウグリア帝国。その歴史は古い。しかし、千年以上もかけて守り続けて来たという皇室主権の歴史は、今、打ち崩されようとしていた。

現皇帝であるラプソディアは長年病に臥せており、とても人前に立てるような状況でさえなく、当然国政の指揮など取れるはずもない。代わりに玉座に座るのはその第一子であるシルディア皇太子殿下だ。しかし、彼も自身で政権を握ることはなく、国家の象徴として君臨するのみであった。??実際に政権を握っているのは軍隊だ。

北軍は、東国ヤンムの国土をその占領下とし、次に西国エウリアの国土をも手に入れようと企んでいた。目指すは世界制覇だ。エウリアさえ手に入れば次は南下し、南国アズニーにも戦をしかけるであろう。

ゆえに、西国の巫女を攫い、「東国を北国ラウグリアの一部と認める」という交渉を持ちかけたのも、その口実でしかなかった。最初から西国からの許可をもらおうだなんて思っていない。西国が巫女を攫われたことに反発し、北国へと戦を仕掛けてくればそれでよかった。それを引き金にして、北と西の戦争が勃発する。

??西国へ文書を届けた北国の軍が、皆殺しに遭った。喜べ、これで西への攻撃の動機が立つぞ。

軍の最高権威であるスターリン將軍はそう語った。彼は己の軍が全滅したことさえ、戦の引き金になるのなら「喜ばしい」というすなわち、最初から西国へ届けられた北軍は捨て駒だったのだ。また、軍人が命を落とした。しかしそれが丁重に弔われることはない。

彼らの命は捨てられる??。

皇太子シルディアの世話役であるオレーク・ナイザーは、仰々しいほどの溜め息を吐いて、狭い休憩所に置かれた椅子に深く腰掛けた。知らず知らずのうちに疲労を溜めていたのであるうか、体が重い。北国の冷気から皇宮を守る二重の窓が、彼の吐きだした息で曇る。青年は無言のまま、窓辺に寄りかかった。

西国の巫女がこの北国へと誘拐されてきてから、一月が経とうとしていた。しかし、この一月の間、巫女は皇宮内での自由を許されており、奔放に暮らしている。他国へ誘拐されたのだという事実さえ、忘れてしまいそうなほどに、彼女は自由奔放だ。だが、しかし??そろそろ軍が動き始める頃であろうとは思っていた。オレークは窓から見下ろした先に見える処刑場を眺め、そこに並んだ国賊たちを見下ろす。軍は、確実に、動き始めていた。

実際に、国内の反対勢力の公開処刑が始められたのは今から十日ほど前のことだ。「国賊」と呼ばれ処刑されるのは、軍に従わぬ軍人や貴族の人間だった。これ以上の戦を望まない保守派の者共は、次々に王宮内に作られた処刑台の上で、首を落とされた。そしてこれは他の軍人や貴族たちへの見せしめでもある。それは、北軍の絶対的な権力に逆らうべからずという圧力であった。

そしてその北軍にとって、「鍵」とも呼べるのが皇太子シルディアの存在である。軍事力では適わぬ不思議な『力』を持ったこの少年を、軍は恐れ、だが武器として大いに利用し、活用していた。そのために重要となってくるのが、皇太子の世話役として始終彼に付きつきりになる、オレーク・ナイザーの存在だ。軍は何かとオレークを呼び出し、彼に指示を下した。そもそも、オレークがシルディアの世話役となったのも、軍からの上意である。

オレークは寒空を見上げ、回想した。??あれは、丁度今から三

年前のこのような寒い日のことだった。

皇室の小間使いとして生まれ育ったオレークは、他国からの迎賓客をもてなす小間使いとして平和な日々を送っていた。そんな彼の平穩に突如変化が訪れたのは、今日のような冬の始まりのことだった。

??オレーク・ナイザー。皇太子シルディア殿下の世話役に任じる。

突然彼を呼び足したのは、軍の最高権威、スターリン將軍である。当然軍の最高権威になど逆らうことのできない一端の小間使いに下された命令は、破格の昇進であつた。

オレークは、素直に、仰天した。

皇家の人間の世話役と言えば小間使いの中では最も位が高い。貴族の位と照らし合わせてみれば、その権力は侯爵ほどにも値する。今までしがない下吏の一人でしかなかったオレークにとっては、有り得ないほどの出世であつた。

しかし、実際のところ、その昇進は手放しに喜べるようなものでもなかった。

今や王宮の隠し玉とも、北国ラウグリアの兵器とも呼べるシルディア殿下の世話役は、只人には務まらぬ。彼の存在自体が兵器と呼ばれるには、それだけの理由があるのだ。実際にオレークも、皇太子の世話役となつてから精神や体を病んだ小間使い仲間を幾人も知っていた。恐らくオレークの前任の世話役も、氣の病が原因で辞任したのだろう。

??何故私のような下位の人間に、そのような大役を。

命令は上意である。決して逆らうことなどできない。そうわかっ

ていながらも、問わずにはおれなかった。まさか自分にその白羽の矢が立つとは思ってもいなかったから。

??オレーク・ナイザー、お前は下位の人間でありながら、その学識は高く、特に他国の迎賓客をもてなすためにいくつもの言語を扱えると聞いた。それは努力の賜物でありながら、天性の聡明さも手伝ってのことであろう。我々は、必ずしも上位の人間を皇太子殿下の世話役にしたいとは思っていないのだ。それよりも能力の高い人間を、殿下の傍に侍らせたい。

お前の他にはおらんのだ、と將軍直々に言われては、拒否することなど当然できようはずもなかった。「ありがたいばかりです」と頭を下げて、オレークはその日からシルディアの世話役となった。

??あれから、三年もの月日が流れた。

これは、皇太子殿下の世話役を務めた年月としては最長記録なのだという。それまでの最長記録がたったの一年だったことを思えばその三倍もの年月を超過したこととなり、華々しい記録であったが、とは言え、たった三年だ。それはお世辞にも長いとは言えない、僅かな時間の経過だ。

そして、西国の巫女を誘拐してから一月。動き始めた軍は、事の詳細を教えるために、世話役のオレークを呼んだ。

「そろそろ西国への進軍の準備を始めようと思っている。故に、反対勢力をあと三日で全て始末するつもりだ。その数ざっと百には満たぬ程度だが……時に、皇太子殿下の具合はどうだ」

將軍は、オレークにそう問いかけた。その質問の意図は、オレー

クもよくわかっている。皇宮の傍で人の処刑などをして人命を奪う場合、皇太子シルディアへの影響が懸念された。

皇太子シルディアは、人の負の感情、恨みや怒り、悲しみ、そして特に人の死に過敏だった。というのも、死んだ人間の魂や心を、彼の『力』は吸収してしまうらしい。かつて皇太子は「人が死ぬと、その死んだ魂が自分の元へ集まってくるんだ」と語った。オレークは『力』を持たぬためにその感覚を理解するのは難しい。だが、確かに皇宮周辺で人が死ぬと、皇太子はたびたび情緒不安定になった。そしてその不安定さが極限にまで至ると??爆発する。『力』が暴発するのだ。自分では『力』を押しとどめられなくなり、『力』によるたくさんの障害が勃発した。

「今の所、まだ『力』の暴発の兆しは見えませんが、情緒不安定であることには間違いありません。一度に百近くの命が死ぬとなると……暴発は免れないかと」

「やはりそうか……ならばなるべく分けて殺すでしょう。その都度女でも抱かせて精神を落ち着かせろ。見目麗しい皇太子に身を捧げたいという女はいくらでもいるはずだ」

オレークは「御意」と言って下を向いた。

実際、女を抱けばシルディアの不安定が少しでも改善されるのは事実であった。だが、そんなものは気休めにしかない。結局のところ、そうして気を紛らわせているだけのことであり、そんなものでは気が紛れなくなつた時が最後、堰を切つたように暴発する。

「しかし、今回はよく保っているな……。処刑はすでに十日以上続いている。常であれば、とつくに暴発が起こってもおかしくない頃なのに」

將軍の呟きに、オレークは頷いた。

その通りであった。確かに最近の皇太子は不安定であり、度々周囲に当たり散らしてはいるものの、それだけだ。実害はない。

「……おそらく、西国の巫女君の影響ではないかと」

オレークはぼつりと呟いた。脳裏に浮かぶ、黒髪の少女はいつで

も笑顔だ。シルディアと同じ『力』の持ち主であり、国の象徴的存在であるというが、まるで彼とは正反対の少女であった。

「巫女君がお越しになってからのこの一月、殿下は比較的落ち着いておられます。時折不安定になることもありますが、巫女と過ごすことによつてしばし解消されます。それはもう、女を抱くような気休めの何倍もの効果があり……」

「ならばいっそ、巫女を抱かせろ」

將軍の言葉に、一瞬オレークは言葉を見失った。

「抱かせろ」などと將軍は軽々しく言うが、相手は隣国の宗教的最高権威、巫女の君である。そこらの侍女を抱かせるのとはわけが違う。??数日前のことであるが、実際に、シルディアの寝台から巫女とシルディアが二人で出てきたことがあった。オレークはシルディアが間違いを起こしたのではないかと、巫女の君に暴行を加えたのではないかとそれはもう顔色を青くしたが、シルディアに聞いたところ、「交わってはいない」と言う。では一体どうして二人で褥を共にしたのか。問うと彼は、「性交なんてするよりももっと、心地良い経験をした」と笑った。具体的に何をしたのか、オレークは知らない。だが情緒不安定だった彼がすつきりとした顔色をしていたことと、隣国の巫女を蹂躪するような事態は避けられたのだという事実を知って、安堵した。??だが、それをまさか將軍が望むとは。

「將軍ともあろう方が、とんでもないことをおっしゃいますな。…

…そのようなことを皇太子殿下が行えば、国際問題となります」

オレークが優等な答えを示すと、くくと將軍は喉の奥で笑った。

「お前こそ馬鹿げたことを言うものじゃない。とうに国際問題などという枠組みは越えているだろう。これから我々は戦をするのだぞ」

そう言われてしまつては、納得せざるを得ない。確かに巫女を誘拐し、戦を仕掛けようという今、もはや巫女の貞操など、どうでもいいことなのかもしれない。

「もとより巫女を返そうなどとは思っておらん」

將軍は言う。神の代弁者である巫女も、彼にとっては国策の道具でしかない。

「西の奴らの縋る神の遣い、巫女の首を我らはいずれ打ち落とす。??それがこの戦の幕開けだ」

さらりと言い放つ彼の目に迷いはなかった。巫女の命の奪われる日はそう遠くはなさそうだ。

そういうことか、とようやくオレークは軍の策略を理解した。

軍が皇太子に命じて巫女を誘拐させたのは、宗教国家である西国の心のよりどころを奪うためだ。そのために、国家権力を握る西国の「王」を誘拐するのでは意味がなかった。神に最も近い存在である「巫女」を、そして西国一の『力』を持つ「巫女」を、北軍が奪って殺すことに意味があった。北軍は神さえ殺せるのだと、その圧倒的な『力』を西へと見せつけて戦意を喪失させるためだ。

しかし、もしもここにきて巫女カグワが殺されてしまったら??シルディアはどうなってしまうのだろうか。

オレークの心の中に、不安がよぎった。

將軍の元を離れ、皇宮へと戻り、小間使いたちの使う休憩室へとなだれこんだオレークは、その窓辺の椅子に腰掛けてぼんやりと外を眺めていた。

シルディアの世話役となり三年、たかが三年であるが、王宮内で自分は彼との付き合いが最も長い。だからこそ、わかるのだ。今のシルディアにとって、あのちっぽけな少女がどれほどの支えになっているのか??オレークにはとても代替できない、輝かしいほどの支えだ。

「???オレーク!」

きいと音をたてて、休憩室の扉が開いた。飛び込んできたのは、

彼の弟分である、ユーリという小間使いだ。

オレークはゆっくりと顔をあげて、彼の方を向いた。昔、まだオレークが迎賓客の小間使をしていた頃は、毎日のように傍にいて一緒に仕事をしたものだ。オレークよりも五つ年の若いユーリは、オレークにとっては本当の弟も同然だった。

「うわあ、此処でオレークに会うなんて久しぶりだなあ……！ 大丈夫か？ 疲れてるみたいだけど」

ユーリもユーリで、オレークのことを本当の兄のように慕ってくれている。世襲で代々賄われる皇室の小間使たちは、皆親戚のようなものだ。オレークはこの少年のことを、まだ二足歩行もできないほど幼い頃から知っていた。

久しぶりに会った弟分を前に、思わず笑みが漏れる。オレークは彼の肩を労うように、はたいた。

「そういうお前も疲れているんじゃないのか？ あのお転婆巫女君の相手は大変だろう」

「まあね。でも俺が困るようなことはしないし、毎日毎日なんだかんだ楽しいよ。今日は皇宮の中庭で、雪のオブジェを作るんだって張り切ってた」

まださして積もつてもないのにね、とユーリは楽しそうに笑った。そういえば、ラウグリアの首都では、先日大雪が降ったところであった。とは言え、その後は晴れの日が続いているのでそれほど積もり残っているわけでもない。ラウグリアの冬の本番は、まだまだこれからだ。

「西国では北の方しか雪は降らんからな。巫女君のおられた後宮のある首都は、西国の最西端だ。南寄りでもなく北寄りでもない、丁度中間地点に位置している。四季の豊かな環境であるというが、雪は滅多に降らないだろう」

「へえ。他国のことまでよく知ってるなあ、オレークは」

「お前は少しは勉強しろ」

「いいんだよ。後宮では雪が滅多に降らない、ってカグワ様が直接



教えてくれたし」

「自分で仕入れた知識以外は、ガセかもしれんぞ」

「そんなことないでしょ」

「なら、西国の主食はなんだ？」

「えーと……鶏肉じゃないの？」

「馬鹿。小麦だ小麦。肉を主食にするわけがないだろうが」

「えええ、俺ずっとそうだと思ってた……！　そもそも、オレークが教えてくれたんじゃないか！」

「そんなの嘘に決まってるだろう。お前が何も自分では勉強しないから、いつ気付くだろうと思って嘘を教えたんだ」

「嘘っ？　俺、カグワ様に西国は鶏肉が主食なんですよね、って言うっちゃったよ！」

「ほう、それでなんと？」

「後宮はそんなことはなかったけれど、市民はそうなのかもしれないわね、勉強になったわ、って！　嘘教えちゃったよ！」

「なら巫女君が気付くまで黙っておこう」

「駄目だろ！　ちゃんと訂正しておくよ」

ひどいや、と嘆くユーリを見て、この弟分もまた、よく巫女に懐いていると思った。

彼も、そしてシルディアも、まさか軍があの子を殺す算段を立てているとは夢にも思っまい。そしてそれを知った時、彼らの嘆きやいかほどのものだろうか。オレークが決して軍に逆らえないのと同じように、彼らも軍に逆らうことはない。殺される少女を、彼らは救うことができないだろう。

「あ……処刑だ」

窓辺に立っていたユーリが、ふと気がついたように窓の外を眺めて呟いた。

窓に寄りかかって物思いに耽っていたオレークもまた、自分の熱で曇った窓越しにその光景を見やる。

小間使いの休憩所は、丁度王宮の処刑場の見えてしまう位置にあ

った。皇室をそのような位置に置くわけにはいかないから、彼らの部屋が処刑場向きに作られたのは自然の成り行きと言える。ゆえに小間使いたちはたびたびその光景を目にしてしまうが、当然好んで見ることはなかった。

「……嫌な物を見てしまった」

ぼつりとユーリは呟いて、視線を逸らした。人が人の命を奪う、処刑??軍国になってからというものの日常的に行われる光景であるとは言え、気持ち良いものではない。そうだな、と呟いて、オレークは目をそらさずにその光景を見つめた。目を逸らしたユーリは薄汚れた床を睨みつけて、呟く。

「軍人の神経はわからないな……戦で他国の人間を殺し、処刑で自国の人間まで殺す」

「だがこの国では、軍人が最も強いし、位も高い」

「そんな強さはいらない。どんなに位が低くとも、俺は人の世話をする仕事がいい」

窓に背を向けたまま、ユーリはそう言った。その通りであるとオレークも思う。軍人になる利点とはなんだろう。地位か、金か、権力か。オレークも、そんなものは何一つ欲しくない。だが、世話役である自分が果たして今、誰かの役に立っているのかといえば、それも定かではない。結局、軍の言いなりになっている自分もまた、軍と同罪なのかもしれない。

オレークはなんととはなしに処刑を見つめていた。巨大な斧で首を落とされるその光景は、何度見ても惨たらしい。一度では人の首は切れず、少なくとも二度は斧が落とされる。一度で死ねればまだいいが、それで死ぬことのできなかった人間のもがき苦しむ様は目も当てられない。残酷な首のない死骸が、いくつもいくつもその場に積み重ねられて行く。

(??多すぎやしないか)

ふと、オレークは気が付いた。処刑を終えて積まれて行く死骸の数が、多い。処刑の成された日のうちにその死骸は葬られるから、

積み重ねられている死骸が昨日おとといのものである可能性はないだろう。あれは全て、今日のうちに殺された残骸だ。

（……ざっと見て、五十はありそうだ）

オレークは目を細めて、その数を概算した。將軍はあと百近くの人間を始末しなくてはならないと言った。そしてそれを急いでいるとも言った。しかし將軍は、なるべく細かく分けて行うと言ったはずではないか。なのに、もうすでに半分以上の人間を一日で始末したことになる。

「……オレーク？」

窓の外、処刑場を見つめて難しい顔をしているオレークに気づき、ユーリもまた眉をひそめた。なにがあっただ、と問うてくる。オレークはゆっくりと立ち上がった。その間にも、次々に国賊たちが斧で首と落とされてゴミのように捨てられて行く。

?? 皇太子殿下は、人の死に敏感だ。

?? 死んだ人間の魂や心を、『力』が吸収してしまうため、敏感だ。

?? 皇太子殿下は近辺で大量に人が死ぬと、情緒不安定に陥る。

?? そしてその不安定が極限に達した時、『力』が暴発する。

?? 『力』の暴発は、只人には止められぬ、まるで天変地異のようなものだ。

?? それは周囲の人間さえ巻き込み、最悪、その命さえ奪う。

（厭な予感がする……）

次々に過る予感を振り払い、オレークはひとまず処刑場の方へ向かい、事の子細を尋ねようと歩き出した。が、オレークが歩き出すとした、その時である。?? 予感は的中した。

ぐらり、と突如皇宮自体が大きく揺れた。

「うわっ……なんだ？」

地震か、とユーリが辺りを見回している。それも致し方ないことだ。皇宮の中でさえ、この時折起こる天変地異の正体を知る者は少ない。

「……だから、多数殺せば免れぬと言ったのに」

オレークは小さく呟いて、休憩所を飛び出した。天変地異の正体の傍に、小間使いや女中がいるとまずい。巻き込まれる可能性がある。

「オレーク！」

驚いた顔をして、慌てて彼に続いて休憩所の外へ飛び出した弟分は、そのただごとではないという様相に気付いたようだった。そして何事かはわからないまでも、兄貴分の後に続こうとする。

「お前は此処にいる！」

「どうして！」

「付いてきたところで役に立たんからだ！」

オレークはそう叫んだ。弟分は目を丸くする。未だかつて、オレークにこうも拒絶されたことがなかったためだろう。

そんな、と衝撃を受けた彼を見て、小さな罪悪感が芽生える。別に彼を役立たずだと貶したつもりはなかった。ただ、この天変地異を前にしては、役に立つ人間などいない。当然、オレークも含めてそうだ。だが、オレークには周囲の人間を隔離するという義務がある。否、待てよ。ふと、オレークは思いついた。大抵の人間はこの天変地異を前に、役に立たない。？？だが、彼女ならば。

「ユーリ！ 巫女君は今、中庭にいるのだと言ったな？」

「え？ あ、ああ！ 行くと行っていたから……！」

オレークは上階？？皇太子の部屋のある階へと向かって走りながら、叫んだ。

「すぐに、巫女君を殿下の部屋へ呼んでくれ……！ 殿下を助けてくれ、と！」

ユーリはさらにいつそう目を丸くして、だが、即座に頷いた。「わかった！」という声とともに、彼の走り去って行く足音が響く。

いちかばちかでしかなかったが、あるいは彼女ならなんとかできるかもしれないという、一抹の期待を抱いた。

オレークは冷たい石段を駆け上り、皇太子の元をまっすぐ目指した。オレークはすでに何が起きているのか、そしてその原因が何であるかを知っている。そしてそれが起こった時の対処法も、皇太子から授かった。故に、天変地異を止めることはできなくとも、巻き込まれて害を受けることはない。だがしかし、何も知らない人間は、害を受ける。??最悪、死に至る。

そしてその死が再びこの天変地異を膨張させてしまうので、なんとしてでもオレークは被害者を出さぬよう、人々を隔離しなくてはならなかった。故に、走る。

これがオレークの仕事であり、役目であった。そしてそれ以外の何でもなかった。

## 15、距離感

その頃、己を待ち受けている運命も、そして天変地異の前触れにも気付かなかった西国の巫女は、肌を刺すように冷たい北の大地の上、皇宮の中庭にて巨大な雪像作りに励んでいた。

少女は慣れない手付きで冷たい雪をかきあつめ、手先がかじかんで感覚さえなくなっても気にすることなく、せっせと雪の山を作り上げた。

「あーもう……何回やっても丸くならないわ!」

その少女の隣に立って、彼女の動きを見つめているのはその仗身である。

「……そもそも、一体何をお作りになられているのか」

そのただの白い塊でしかない雪の山を眺めて、青年は呟いた。彼女とともに後宮で育った青年もまた、雪とは無縁の生活をしており雪像など見たこともなかったが、少なくとも像というからにはそれが何かの形を模しているであろうことはわかる。だが、彼女の手の中で作られるそれは、ただの白い塊だ。

「スノーマンよ……昔、絵本で読んだことがあるの。雪で巨大な球体を二つ付くつて、それを縦に重ねて、下を胴体、上を頭にして、木の枝とか木の実とかで飾り付けするのよ。でも、どうしてもその球体が作れないのよ!」

もどかしいとばかりに地団駄する彼女は、だがとても楽しそうだ。その手先は真つ赤に染まり、冷たくかじかんでいることが一目でわかる。以前であれば、ユタヤは「こんなに冷やして」と彼女の手を取って自分の体温で温めてやるところであつたが、今の彼にはそれができるなかった。それどころか、今の彼には必要以上に彼女に近づくことさえできない。あのシルディアに「出て行け」と言われた一件以来、ユタヤは巫女と仗身との距離の取り方が全くわからなくなっていた。??どのように接するのが、最も自然な巫女と仗身の距

離感なのだろう。

近づきたくとも近づけない。そんなユタヤの様子がおかしいとは、主のカグワも気付いてはいるようだった。「どうかしたの？」と自分に触れてこようとしたり彼女の手を、反射的に避けてしまったあの時の、彼女の面食らった顔が忘れられない。カグワからの接触を拒んだことなど、始めての経験だった。おかげで罪悪感で胸がいつばいだ。少女には何の他意もない。ユタヤが勝手に意識し、恐れているだけのことである。

「どうしたらいいのかしら……あ、そうだ！ 転がしてみようかな」

名案、と手のひらを打った少女は、きらきらと頭上からの太陽光そしてそれを反射する雪からの照り返しを受けて、輝かしい。その眩しさにユタヤが目を細めると、「ね？」と同意を求めてこつちを向いて、笑った。もうすっかり見慣れたはずのその笑顔に、何故か胸の締め付けられるような思いがする。

不思議なもので、「妙なことを考えるのではない」と自分に言い聞かせれば聞かせるほど、妙に意識しどつぼにはまっていく。自分にとって「特別」な存在であるこの少女に、自分は一体何を求めているのだろう。皇太子シルディアは、「忠義」の裏には利己の益があると言った。少女に忠義を尽くして、自分は何を得ようとしているのか。そして彼は「愛」の裏には性の欲求があるとも言った。幼い頃から彼女にある意味では恋いこがれてきたという自覚はある。だがしかし、自分は果たして、そのようなやましい感情を彼女に抱いているのか。

「外套が重くて邪魔ね……」

そう呟いたカグワは、纏っていた外套を脱ぎ捨てると、近くの木の枝にかけた。外套と触れ合ってその内側に着ていた綺麗なドレスの裾がひらりとめくりあがる。ユタヤは慌てて目をそらした。??彼女はとても危なっかしい。

以前、部屋の中でユタヤしかないからとさっさと着替えを始め

てしまったように、少女にはあまりにも分別がない。と、思っていたが、それは相手がユタヤであるからであり、絶対の信頼を抱いているからであり、だとすれば、それを「危なっかしい」などと言って意識してしまう自分の方がむしろ危険な存在なのではないかとも思う。

雪の塊を渾身の力でもって転がして行く少女は「あ、丸くなった！」とはしゃいだ。はしゃいだものの、すぐにくしゅんとくしゃみを落とした。晴れた日でも雪の溶けない北国の空気は、冷たい。重いほどに外套が分厚いのは、その寒さから身を守るためだ。

「……外套を。その格好では風邪をひいてしまいます」

ユタヤはそう言って、彼女が木の枝にかけた外套を取り戻そうとした。が、カグワは首を振る。

「大丈夫よ。動いているから体は熱いもの」

「だからこそ体の冷めた時がよくありません。風邪をひきます。外套を」

「……だって、北国の外套、重いんだもの」

エウリアの上着ならもつと軽かったわ、と少女は言うが、そもそも西国の後宮には肌を刺すようなこれほどの寒さは訪れない。ユタヤはしばし考えた後、ふうと諦めの息を吐き出して、代わりに自分のかぶっていたマントを彼女に差し出した。

「……ならば、これを。これならばさほど重くはありませんまい」

ばさりとカグワの体にそれを乗せると、彼女はこちらを向いた。

少女はぱちぱちと瞬きを繰り返す。

「でも……これ、ゆたやの防寒具でしょう？」

「私は元が獣ですから、さほど寒くはありません。いざとなれば私が貴女の外套を纏います」

瞬きをするカグワはちらりと木の枝にかけられた女物の上品な外套を見やっつて、ぷつと噴き出した。それを着ているユタヤの姿を想像したのだろう。

「大きさも装飾も、何一つ似合わないわね。着られる外套の方が可



哀想」

酷な事を言うカグワは、あははと軽快に笑った。以前なら、憮然とした面持ちで主を睨みつけるところであるが、今はそれさえできない。彼女の笑顔が何故だかとても遠く思えて、切ない。

どうしてこんなに傍にいるのに、と思う。自分と彼女の距離は何も変わっていないはずなのに。

そう考えてから、否、と青年は思い直した。よくよく考えてもみれば今までが異常だっただけのことで、本来であれば自分と彼女は獣人と巫女という近づいてはならない厚い壁を間に挟んだ関係である。それは「差別」と言うのだと皇太子なら嘲笑うだろうが、それが真実だ。これ以上、彼女に近づいてはいけない??。

そんなことをユタヤが悶々と考えていたその時である。

完全に気を抜いていた青年は、巫女を守る仗身という立場でありながら、皇宮内の異変に気付いていなかった。そして巫女もまた、然りである。二人は二人ともに己の『力』を封じられていた。ゆえに、第六感で何かを感じ取ることが今はできない。

突如、広い皇宮の中庭に、悲鳴に似た叫び声が響いた。

「……カグワ様??!!」

二人は、ようやくその声で異変に気づき、同時に顔を上げたのであった。

皇宮の窓から、中庭に身を乗り出すようにして叫びをあげているのは、この北国に来てからというものずつとカグワの世話をしている小間使いのユーリである。人なつこい性格の少年で、たった一月の付き合いであるが、今ではユタヤよりもカグワと話すのではないかというほどに親しい。その少年が、普段の小間使いの仕事では見せないような切羽詰まった表情で、カグワの名を叫んでいた。

驚いてはじかれたように飛び上がったカグワは、ユタヤのくれたマントが風を受けて飛んで行くことにも気付かずに、ユーリのいる窓の方へと走って行く。ユタヤはそのマントの飛んで行く様をしばし見守ってから、急いで自分もカグワの後を追った。

カグワはユーリの前に辿り着くと、彼の覗く少し小高い窓を見上げて、声をあげた。

「どうしたの？ 何があったの？」

今にも泣き出しそうなほどに切羽詰まったその少年の様子から、何かただごとではないことが起きているのは確かである。彼はここからかずつと走ってきたのだろ。う。ぜえぜえと息が荒い。

「殿下が……殿下が！」

息を切らしながら、彼が呼ぶのは皇太子シルディア殿下の名前である。カグワの表情が変わる。少女はぐいと身を前へ乗り出した。

「シルディアが……どうしかしたの？」

「私にも詳細は、わかりません……！ ですが、殿下を助けてくれと、カグワ様に伝えてくれと言ってオレークが……！」

全く要領を得ないその説明を聞いて、しかしカグワは何かしらぴんときたようだった。少女は皇宮の上の方を見上げて、ぽつりと呟く。

「……『力』の、暴発……」

その呟きを拾って、ユタヤは目を見開いた。

ユタヤも以前、皇太子本人からその話を聞いたことがあった？ 俺もたまに自分の『力』が制御できなくなつて困ることがあるよ。そのたびに犠牲者がでる。

具体的に『力』の暴発とやらで何が起こるのかなんて、想像もつかない。だが、そのたびに犠牲者が出るのだと彼が自分で言うからには、生易しい事態ではないのだろ。う。それは、今日の前にいるユーリの混乱具合からも見て取れる。

「カグワ様……！ とにかく……！」

「シルディアが危ないのね。わかったわ。すぐにシルディアの所へ行く。彼は部屋にいるの？」

物わかりの良いカグワは、具体的な説明の一つもされないままに、だが、しっかりと頷いた。ユーリはそれを受けてほつとしたように、「恐らく」と答える。

「……わかったわ」

カグワは再び呟くと、皇宮の中へと向かって走り出した。向かうは、皇太子シルディアの部屋だろう。彼女は中庭の雪を蹴り飛ばして、皇宮の中へと飛び込んだ。

その後ろ姿を見送ったユタヤは、刹那の間、迷った。シルディアの『力』の暴発とやらがどのようなものかはわからないが、『力』など持たないユタヤが行ったところでどうすることもできない事態なのだろう。だからこそ、オレークはカグワを呼んだのだ。？ 巫女君なら、あるいは、止められるかもしれん。そう彼が言ったのを、ユタヤは覚えている。彼は巫女であるカグワに、期待をしている。

（だけれど……巫力のない今、かぐわ様に巫女としての力はあるのだろうか）

カグワとてただの女だ、と言ったのは皇太子シルディアであつたか。とにかく、『力』の暴発という得体の知れない事態を前に、カグワを一人で向かわせることはとてもなく危険なことと思えた。

「……かぐわの君！」

次の瞬間には、本能的に、体が動いていた。皇宮の中へと戻ったカグワの後を追って、走り出す。人の形をしていても、カグワよりは足の早い自分なら、すぐに追いつけるはずだ。獣の形になれないまでも、せめて傍にいれば、盾になるくらいの働きはできるはずである。

走り去る、平和な中庭には、冷たい空気が立ちこめていた。作りかけの雪像が、むなしく空を見上げている。そしてその澄んだ空の下を、ひらりと一枚マントが飛んだ。仗身の届けたマントは主へは届かず、虚空を舞う。そして仗身の抱く想いは依然、空回りを続けるのみだ。

## 16、浄化

主の後を追って、冷たい石塔の階段を延々と昇り続ける。

迷うことなく皇宮の中を走り抜けて行くカグワは、この一月でこの皇宮内の道筋をしつかりと頭の中へと叩き込んだようであった。特に、たびたび訪れていた皇太子シルディアの部屋のある場所は、忘れられない。それに対して、カグワの付き添いなど何か理由のない限り部屋から出ることもなかったユタヤには、まだこの広い皇宮内の地理感覚がない。ゆえに、彼女の後を追って走りながらも、自分が今どの辺りにいて、どこを目指して走っているのかは定かでなかった。

そしてただ機械的に主の後を追って飛び出したのは、皇宮の中でも上の方にある広いフロアだ。他の階と異なり、より一層優然とした雰囲気立ちこめている。いかにも高貴な人間が住んでいるのであろうと予想させられるこの場所に、ユタヤは一度だけ足を運んだことがあった。??北国に飛ばされてきて、初めて訪れた皇太子の部屋のある階だ。ベッドの上に転がっている皇太子と出会い、カグワの巫力が封じられるのと同時にユタヤの獣の性もまた、その時に封じられたのであった。

(……皇太子殿下の部屋か)

カグワがまっすぐ目指して駆け抜けて行くその廊下の先には、ちゃんと控える豪華絢爛な巨扉が控えている。そしてその中にはあの少年がいるのであろうとユタヤにも安易に予想がついた。

??不愉快だよ、ユタヤ。実に、不愉快だ。

強い覇気を持つ眼差しでもって、彼にそう言われたあの日から、

ユタヤはどうにもこうにも調子が好ましくない。カグワを護るのだと誓った己の忠誠心に自信が持てなくなり、そしてシルディアの持つ強大な『力』の片鱗を見せつけられて、彼のことが恐ろしくなった。彼は眼差し一つで人を殺してしまえるほどの強い覇気を持つ。その彼の『力』が今、暴発しているという。

思わず怖じ気づくユタヤとは異なり少しの恐れも見せないカグワはすぐに廊下を走り抜けて、シルディアのいるであろう最奥の部屋の前へと辿り着いていた。その後ろ姿を見て、ユタヤも唾を飲み込み決意する。シルディアの『力』は恐ろしくとも、それに臆してカグワを一人で行かせるわけにはいかない。青年は怖じ気づく己の足に鞭打って、彼女の後を追った。

部屋に近付くと近付くだけ、何故だか少し寒気がした。それは、暴発しているという『力』による物だろうか。今のユタヤは「獣」の性を封じられているために、とても感覚が鈍ってしまったているが、もしも今「獣」の性を持っていたなら、それはそれはおぞましい気配にこの部屋に近付くことさえできなかったかもしれない。それほどまでに、恐ろしい何かが、この扉の向こうには待ち構えている。

「……シルディア！」

いくら巫力を封印されているとは言え、カグワとてそれに気付かぬほど鈍感ではなからう。しかし、カグワはそれでも欠片の迷いも見せずに、その扉を開いた。ユタヤは中に待っているであろう何かを恐れて、ぐつと歯を食いしばって身構えた。

扉が開かれた瞬間、己を取り囲む空気が、ぐわんと揺らいだような気がした。どう説明すれば良いのだろう。一瞬だけ現実世界から離れた夢幻の世界に落とされて、また現実へと引き戻されるような精神の揺らぐ感覚である。??時空間が、不安定なのだ。ユタヤはそう気付いた。シルディアは、遠い西の地からカグワを引き寄せたように、その『力』でもって、時空間さえ操る。そしてその『力』

が暴発してしている彼の元では、時空間が平常ではなかった。

「シルディア！」

再びカグワが彼の名を呼んで、部屋の中へと飛び込んだ。慌てて彼女の後を追ったユタヤは、飛び込んだその先、シルディアの寝室の中を見て唖然とする。一度だけ、獣の性を封印された時にこの部屋を訪れたことはあったが、その時とはまるで異なる地獄のような有様であった。

部屋の窓辺に飾られた美しかったのであろう花々が全て枯れて下を俯き、窓そのものが古ぼけたボロとなる。不安定な時間の中で、様々な物が劣化していくのが見えた。通常の何倍もの速度で時が流れて行き、物が古びていく。そして最後にそれは劣化し壊れ、その場に転がった。ゆえに、部屋の中は何年も人の住んでいなかった廃屋のように、荒れた様になっている。

「……巫女君！」

部屋の片隅から、凜と少女を呼ぶ声がした。その声の方向を向くと、カグワを呼べと言ったという張本人、オレークが屈み込んでこちらを見上げていた。屈み込んだオレークの足下には、一人の女が転がっている。恐らく女中なのであろうその女は、この時間と空間の錯綜する場所の中で変化に絶えられなくなったらしく、気を失っていた。

「……よくシルディアの寝室にいた娘だわ」

カグワが女を見て小さく呟いた。ユタヤはこの女中のことを知らないが、カグワは知っているのだろう。少女はちらりとユタヤを見上げると、告げた。

「ゆたや、貴方はあの娘を」

言われたユタヤは目をみはる。自分は他でもないカグワを護ろうと思ってここまで付いて来たのだ。

「しかし……！」

慌てて反論しようとする、カグワは首を振った。少女は「私は大丈夫よ」などとほざく。引き止めようとするユタヤの手を振り切

つて、彼女の向いた先は、部屋の中央に置かれた巨大な寝台であった。以前ここを訪れた際にも、その紗幕のかけられた巨大な寝台に、シルディアが眠っていた。そして恐らく今も、彼がいるのはその紗幕の内側だろう。何故なら、巨大な紗幕の外側をさらに包むように、暗黒色の空気がその場に立ちこめていたからである。

「……なんだ、あれは？」

思わずユタヤはその吐き気さえ誘われるそのどす黒い空気の流れを見て、口元を押さえた。怒りや悲しみなど、負の感情がその空気の中に渦巻いている。そして時空間を不安定にしているのもやはり、その暗黒の空気の影響だと思われた。だとすればあれは、シルディアの『力』の暴発したものか。

そうユタヤが勝手に予測したのも束の間、隣に立つ少女がぼつりと呟いた。

「……あれは……死人の、『魂』だわ」

え、とユタヤは目を見開く。ユタヤには想像も付かない答えであった。

?? 殿下は人の死に敏感でな……近い場所で人が死ぬと、それに同調して『力』が揺らぐ。そしてそれを自分では制御できないからだ。

かつてそう教えてくれた男は今、部屋の片隅で倒れた女中を前に、屈み込んでいる。世話役であるという彼でさえ主に近付けないのは、あの暗黒の空気の所為だ。あまりにも禍々しくて、ユタヤは此処から一步も動けない。その正体は、人の死んだその『魂』だということか。ユタヤにはその真偽を計ることなど到底できるはずもなかったが、とにもかくにも足がすくむ。これ以上暗黒の空気の方へと近付くことはできなかった。

?? だというのに。

「……シルディア！」

その暗黒の空気の中央にいるであろう少年の名を呼んで、駆け出して行くカグワは無敵だった。あの暗黒が見えていないはずもないのに、全く恐れる素振りも見せない。具体的にどうなるのかなんてわかるわけもなかったが、あの暗黒に近付いては危険だと本能が語りかける中、ユタヤは必死に叫ぶことしかできなかった。

「かぐわ様……！」

身を呈して彼女を護るのだと誓ったくせに、足がすくんで動けない。ただ、彼女の名を呼び、危険だから近付くなと叫ぶと、少女はちらりとこちらを振り向いた。その顔には少しの恐れもない。眩いほどの笑顔に満ちあふれている。

「……私は、大丈夫だから」

「だからその娘を」と付け足したカグワに対して、ユタヤはもはや何も言い返すことができなかった。だってその「大丈夫」は、真実だ。はったりやなんかではない。彼女は、死人の『魂』を、暗黒の色に渦巻く人の負の感情を、少しも恐れてなんていない。

「シルディア」

少女は暗黒の渦の中に手を突っ込んで、閉じられた紗幕を開いた。開くと同時に、中から瘴気のような黒い空気が溢れだす。ユタヤは絶えきれず、うっと呻いて口元を覆った。あれらも全て死人の『魂』なのだろうか。見ているだけで気分が悪い。吐きそうだ。

しかし、その空気を真正面から浴びたカグワは、ほんの少しだけ眉をひそめたが、それだけだった。そしてそのどす黒い瘴気の中央にいる、少年に手を差し伸べる。少年はゆっくりと上を向いて、少女を見つめた。その眼差しは焦点があっておらず、虚ろだ。まるで心此処にあらず？？その少年は、いつもの少年ではない。他の何かに取り憑かれたような顔をしている。

「……子供が、いるんだ……」

ぼつりと、皇太子は呟いた。壊れたねじ巻き人形のように、機械



的に口を動かす。おそらく彼自身の意思ではない。皇太子の体を使つて、何者かが喋っているかのような、そんな動きである。

「田舎に帰れば、子供がいる……養うために、入ったのさ、軍に。戦をしたいわけではない。なのに何故誰も話を聞かぬ。何故仲間に命を奪われる。子供がいるのさ。そいつに、会わなきゃいけない。まだ死ねない」

ぼそぼそと呟くその言葉は、きつとあの瘴気のような死人の『魂』だ。死人の『魂』が皇太子に乗り移り、何事かを喋らせている。？かと思えば、次の瞬間皇太子は獣のような雄叫びをあげた。悲鳴のような声で、叫ぶ。

「やめろやめろやめろおおっ！死ぬのは怖い、死ぬのは怖い死ぬのは怖い……！痛い、痛い痛い！せめて一発で殺してくれ、こんなに辛いのならば、殺してくれええっ！」

別の死人の『魂』だ。取り憑かれたみたいに、皇太子は次々に『魂』を自分の中に吸収していた。

「殺すんなら殺せばいいさ！見ていろよ、死んでも尚、必ずやこの国にまわりついてやる！こんな小さな国、怨念の一つで捻り潰してやろうとも！この恨みは深く、浄化できるものか！国家を、皇帝を、軍を、呪い殺してやる！」

「うわっ、あ、あ、ああ、そんな、つもり、じゃ、なかったんだ……！いや、だあああ、あははは、あははあ、わ、うわあ、ぎひひいっ！」

「はっ、はあ、正気の沙汰とは思えん……！まるで虫けらのように人を殺すのか！死など怖くない。だが、正気の沙汰ではない。この国は、腐っている……！」

次々に死者の『魂』を取り込んで、そのたびに、皇太子は寝台の上を転がり回る。その姿はまるで、哀れな人形であった。ユタヤは寝台から離れた所からその瘴気を見ているだけで、吐きそうなほどに具合が悪くなるというのに、それら死者の『魂』を次々に体に取り込むその苦しさはいかほどのものであろうか。寝台の上を転がり

回るのは、その苦しさ故であらう。そして、彼が暴れるたびに、暴発した『力』の影響で、部屋中の物が割れたり砕けたりと、劣化していった。

だが、その瘴気の中にあっても顔色一つ変えないカグワは、哀れな皇太子の転がる寝台の上にと、彼の顔を撫でた。一瞬だけ、彼が我に返る。瘴気が揺らいだ。皇太子に乗り移ろうとしていた多くの死者の『魂』が、行き場を失いわずに彷徨う。

「カ、グワ……」

ぜえぜえと息を切らしながら、少年はカグワの名を呼んだ。カグワはそつと彼の綺麗な金髪を撫でて、そしてまだまとわりつく瘴気を片手で払いのけた。

「シルディア……大丈夫よ、こつちへいらつしやい」

カグワがにこりと笑ってそう告げると、途端に、少年の青い瞳に雫が溜まった。それは涙となつて溢れ出し、止まることを知らない波のように押し寄せて来た涙がぼたぼたと寝台の上に染みを作った。彼はわあああ、と大きな泣き声をあげて、カグワに正面からぎゅうと抱きついた。

「助け、助けてくれえ……！ 押し寄せてくるんだ、たくさんの死者の心が……！ 俺は救えない、救えないよ！ 彼らを救えない……！ それなのに、奴らは集まってくるんだ……！」

「シルディア、落ち着いて……」

「いやだ、いやだ……！ なんて俺だったんだ、いやだ……！ 欲しくて手に入れた『力』じゃない……！ こんな『力』、ちつとも欲しくなかったんだよ！ 別に皇太子になんか生まれたくもなかった……！ どんなに『力』を持ったって、いくら皇太子だって、俺には何もできないのに……！ やめてくれっ！ 俺に救いを求めないでくれ……！」

シルディアは狂ったように泣き叫んで、少女に縋った。少女は彼を抱きしめながら、「落ち着いて」と言葉を繰り返す。しかし、弱り切った少年の耳にはまるで届いていなかった。

行き場を失い彷徨う瘴気が、今だとばかりに弱ったシルディアに取り憑かんと押し寄せてくる。少年が悲鳴をあげた。再び彼の中に死者の『魂』が吸収されようとしていた。それを止める術はないと、そう、思われた。??すると次の瞬間である。

ぱーん、と甲高い何かを叩き付けるような音が部屋中に響きわたった。

何事か、と一瞬、ユタヤにもよくわからなかった。だが、すぐに気付いた。??カグワが、シルディアの頬を手のひらで力一杯叩いたのである。

少年の頬が赤く腫れ上がっていた。少年に取り憑こうとした瘴気が、ゆらゆらと揺らいで彼から離れて行った。死者の『魂』が彷徨う。少年の目は涙に濡れて、虚ろだ。カグワは強い眼差しで彼を睨みつけると、その頬を手のひらで包みこみ、自分の方を見るように仕向けた。

「貴方は、皇太子である前に、一人の人間よ」

カグワは彼の顔を覗き込んで、はつきりと告げた。ぼろりと少年の瞳から涙が溢れて行く。叩かれた痛みからではない。死人の『魂』を吸収してしまう苦しみからだ。少女は溢れるその雫を手の甲で拭き取ると、優しく腕の中に抱きしめた。

「『力』があるから、なんなの。皇太子の権力がどうしたっていうの。貴方は、貴方にできるだけのことをやればいい……。それは、死者の『魂』を吸収して自分の一部にすることではないでしょう？」

それは彼らのためにならない」

「カグ、ワ……」

「貴方にできることは一つしかないわ。この国のために死んで行った彼らを、悼むことだけ。そうでしょう？」

少年に取り憑こうとする死者の『魂』を、カグワは片手で次々にはじきとばした。なにゆえ『力』を封印されて巫力さえ持たない今

のカグワにそのようなことができるのか、恐らくカグワ自身にもわかるまい。だが少女は自分の赴くままに死者の『魂』から皇太子を守り、皇太子である少年は、己を護ってくれる少女に縋り付いた。

「カグワぁ……」

「貴方が皇太子として君臨するから、『力』を行使するから、行き場を失った死者の魂が、貴方の元へとやってくるのよ。彼らは貴方が実は無力であることを知らないの。だから押し寄せてくるのよ」

「でも、それは、事実、だ……俺は、それでも皇太子だ……『力』だって、持っている……」

そう呟いた彼の顔は疲弊しきっていた。多くの『魂』を吸い上げて、負の感情までも吸い上げて、疲弊している。少女はそんな痛々しい少年の顔を撫でて、きっぱりと言い放った。

「彼らを、笑顔で見送りなさい」

にこ、と微笑む。その笑顔は何よりも強い、力だ。

「皇太子として、民の魂が無事昇天できるように、見送りなさい」

「見送、る……」

「そう……そのために必要なのは『力』ではないわ。貴方が一人の人間として、彼らを悼む、『心』でしょう？」

そう囁いて、カグワはシルディアを自分の腕の中から解放した。

そして涙の跡の残るその頬を拭いてやり、微笑む。つられたように、シルディアもわずかではあるが、口元を緩ませた。カグワはその笑顔を見て満足したように頷くと、彼の周りにどよめく瘴気を見回す。それは皇太子をめがけて集まったものの、行き場を失った死者の『魂』だ。

「……貴方たちは、帰るべきところへ、帰りなさい」

そう言っただけで向けられた輝かしいほどの少女の笑顔に、瘴気が揺らいだ。死者の『魂』が、揺らぐ。

「帰りなさい?? 貴方たちの『魂』を、狂おしいほど、悲しいほどに、待っている人たちがいるはずだから」

すると、緩やかに、風が拭いて木の葉が揺れるほどの緩やかさで、

瘴氣が徐々に消えて行くのがわかった。暗黒の塊が、浄化されていく。それに伴い、足がすくんで一歩も動けなかったユタヤも、ようやく身動きが取れるようになった。死者の『魂』が、彼女の誘いに従って、帰るべきところへと向かったのであるうか。とにもかくにも暗黒が、消えて行く。

「すごいな」と一連の流れを見ていたオレークが、呟いたのが聞こえた。ユタヤも黙ってその感想に頷くことしかできない。後宮にいた頃、常に寄り添っていた自分でさえ、彼女が死者を成仏させる姿など見たこともなかった。その機会がなかったのだと言うこともできる。だが、巫力の訓練と銘打って巫女修行をしていたあの頃は、「変わり者の三の君」と呼ばれる少女にこれほどまでの力があるだなんて誰が思っていたことであろう。ユタヤは、まるで彼女が別世界に住まう人間ではない何かのように思えて、そんな自分に戸惑いを覚えた。

「……すまないが、獣人よ。この娘を運ぶのを、手伝ってくれないか？」

遠い紗幕の中にある主を見つめていたユタヤに、ふと声がかかる振り返れば、オレークが床に倒れている女中を顎で示しているのが見えた。

さほど重量のありそうな娘でもなく、どちらかと言えば軽そうだ。成人した男であれば彼女を運ぶことなど造作もないだろうに何故この男は自分で運ばないのか、とユタヤが不思議に思うと、その疑問を読み取ったかのようにオレークは自分の右腕を示す。すると、上品な宮廷服が破れ、そこが赤黒く染まっているのが見えた。それは血の色だ。どうやら、右腕に怪我を負っているらしい。

「割れた窓の破片を浴びてしまつてな……俺はどちらかというとなんなもので、片手では運べんだ」

獣人であるユタヤは片手でも娘一人なら軽々運べる自信があるが、だからと言ってそれができない男を非力だとも思わない。片手が塞

がつているのなら仕方がないなとユタヤは黙って頷いて、転がっている娘を抱きかかえた。それに、この娘を救え、とは主からの命令でもある。

こっちだ、と立ち上がったオレークが、使える左手の方で扉を開き、ユタヤを誘導した。ユタヤもそれに従う。

部屋に取り残される主のことが心配ではないと言ったら嘘になるが、ユタヤが残ったところで何もできないこともわかっていた。彼女は今、落ち着いた皇太子殿下を優しく包み込んでいるはずだ。己の手の届かない場所に彼女がいることがどうしようもなく歯痒いが、どうすることもできない。

「カグワ……カグワ……！」

「大丈夫よ、此处にいるわ」

「もつと……もつと近くに来てくれよ……ねえ、俺を抱きしめて……また、この前みたいにキスをしてよ」

「……ええ、そうね」

当たり前のように彼女に甘えることのできる皇太子を、何故か羨ましく思う自分に、驚いた。今しがた皇太子がどれだけ苦しんでいたのか知らないわけではないのに、羨ましいだなんて、戯けが過ぎている。

所詮、自分のような獣人と、彼のような『力』を持つ皇太子、そして彼女のような巫女は、住まう場所が違うのだ。彼女彼らのいる場所に、自分がどんなに手を伸ばしても届こうはずもない。

そう自分に言い聞かせて、ユタヤは女中を抱えたまま皇太子の寝室を後にした。先導して歩くオレークの後ろを追って、主の元から離れて行く。否、もともとそこには覆せない距離があつたのかもしれないが。

自分こそが最もカグワの君にとって近しい存在なのだと思ってい

た今までの自惚れに、嫌気が差した。

獣人は獣人らしく、高尚な巫女からは、離れて仕えることが望ましい。

## 17、不毛な恋心

皇宮の中は広い。全ての部屋が皇太子の物であるフロアもあると思えば、カグワのような他国の賓客をもてなすためのフロアもある。そして、この皇宮に仕える小間使たちの生活するスペースも当然あった。百人単位の小間使たちが働いている皇宮であるが、その百人の住まう広さと、皇太子一人が住まう広さはさして変わらない。華やかな皇宮の中で、最も質素なそのフロアに辿り着くと、オレークがユタヤを案内したのは薄暗い倉庫のような場所であった。

窓が一つもなく、外界と繋がっているのは天井にぽっかりと空いた通気孔一つのみである。そこは扉が閉まると何も見えなくなってしまういそうなほどの暗闇で、オレークは扉の閉まる前に燭台の上に火を灯した。

「娘は、そこに」

言って、オレークの示した先には古びた木製の長椅子がある。ユタヤは抱えて来た女中をゆっくりとその長椅子の上に横たわらせた。ぎいと長椅子の足が軋んだ音をたてる。だが、気を失っている娘は一向に目を覚ます気配を見せなかった。

「殿下の『力』の暴発に巻き込まれる人間が、たまに一人二人いてな……命を落とすことすらあるが、その娘は多分平気だろう」

オレークは言いながら、倉庫の中に置かれた棚を物色している。そしてその棚の三段目の最も端に置かれた瓶を手に取ると、片手でグラスにその瓶の中身を注ぎ始めた。注がれる液体は無色透明で水のようにも見えるが、薄暗い倉庫の棚に置かれている時点で何やら怪しげだ。

「殿下にご執心だった娘でな、たびたび仕事と称して殿下の寝室に忍び込んでいたのは知っていたが、まさか彼女もこんなことになるとは思っていなかっただろう」

瓶に蓋をして棚に戻しているオレークの後ろ姿を見上げてから、



ユタヤは長椅子に寝転がる少女を眺めた。真つ青な顔色をしているが、特に怪我のようなものは見当たらない。

「……外傷はないようだが」

ぼつりとユタヤが呟くと、「そうだな」とオレークも頷いた。傷ならば、オレークの方が深いものを負っているはずだ。

「外傷はないが、殿下の『力』の暴発を真正面から食らった。俺はまだそれを経験したことはないからうまく説明できんが、耐えきれないほどの負の感情に心を支配されるらしい。そしてその娘のように気を失うか、あるいは負の感情に耐えきれなくなつて自ら死ぬ場合もある。身投げなどしてな」

ユタヤは先刻皇太子の部屋で見た、紗幕を覆うどす黒い瘴気の塊を思い起こした。あれは皇太子の『力』そのものというよりも、カグワが言うには死者の『魂』だそうだが、それを引き寄せているのが皇太子の『力』なのだから、総じて『力』の暴発と呼んで然るべきなのだろう。

「……あの、暗黒色をした瘴気のようなものを、真正面から食らったということか……」

ユタヤは足が竦んでしまつて、その方向へ近付くことさえできなかった。それでも吐き気を覚えたほどである。確かにあれを真正面から食らったら、気を失うか、あるいはもがき苦しんで身投げしてしまうかもしれない。

「暗黒色？ ……なるほど、獣人にはあれが見えるのか」

独り言のように小さく呟いたのはオレークである。「え？」とユタヤが見上げると、彼は透明な液体を注いだグラスを持つて女中の横たわる長椅子の前に膝をついて、「俺には見えん」と言った。

「俺は『力』を持たない凡人だからな。この娘もそうだ。だから、殿下の『力』が不安定であることにも気付かず不用心に近付いて、巻き込まれてしまつたんだろう」

オレークはそう説明して、眠っている女中を片手で抱き起こすと、自分の体にもたれかからせる。そして、片手でグラスに注いだ液体

を女中に飲ませた。腕に傷を負っているため、動きが不自由である。ユタヤは彼に手を貸して女中の体を支えながら、首を傾げた。オレークが『力』を持たず、この娘も『力』を持っていないため、皇太子が纏っていた暗黒の瘴気が見えなかったというのはわかる。だが、どうして獣の性を封印された自分には、あれが見えたのだろうか。

「……俺は今、獣の性を封印されているはずなんだが……」

つまり今のユタヤは、『力』を持たない凡人と同じはずである。そう思って首を傾げるユタヤに娘を任せて、オレークは立ち上がった。空になったグラスを持って、乾布巾でそれを拭う。

「お前や巫女君の『力』であつたり獣の性であつたりは、使えぬようにと封印されているだけだ。お前たちがそれを持っていることに代わりはない。だからお前は獣に変化できないし、巫女君は様々な技を使うことができないが、凡人には見えない物を見るようなことはできるんだろう」

「見えないものを見るのにも、『力』を使うのではないのか？」

「そんなことは知らん。凡人の俺より、獣人の方がわかるだろう」

そう言われても、ユタヤにだって何もわからない。後宮に入ってからというもの、獣としての力を磨くことはあつても、その『力』がなんであるのか、その『力』がどういう仕組みで作用しているのかなんて、教わったことなど当然なく、考えたことすらなかった。ただ、自分はこの『力』を主であるカグワのために捧ぐのだと思っていた、それだけである。

「しかし、やはり獣人であつても、『力』の暴発する殿下には近付けないようであつたな……」

オレークは言いながら乾拭きしたグラスを棚に戻して、自分の破れた宮廷服を引っ張り、完全に裂いた。その下から白い腕が露出する。丁度肘の関節の辺りにぱっくりと皮膚を裂いた傷が見え、茶色に近い赤い血が腕を沿って滴り落ちていた。

「凡人が近付けば、その娘のように『力』にあてられて終わりなんだが、獣人でもあれ以上は近付けないものか？」

「獣人だからかどうかはわからんが……少なくとも俺は、近付かなかった」

ユタヤはあの瘴気の放つ禍々しい雰囲気を使い出して、身震いした。あれ以上は無理だ。本能がそう語りかけるから、ユタヤは前に進むことができなかった。

だが、そこでふと気付く。今日の前にいるこの男はどうだろう。自分のことを「凡人」と呼びながら、凡人が近付けないあの瘴気に近付いて、女中を助けたのではないのか。それなのに、受けた傷は割れた窓の破片で腕を切ったくらいなもので、少しも瘴気にあてられた様子はない。

「……何故、オレーク殿はあの部屋にいたことができたのだ？」

素朴な疑問である。小間使いとは言え北国では侯爵の地位にも値するというオレークを呼び捨てには出来ず、敬称を付けて呼びかけると、オレークは特に気にした様子も見せずに、「ああ」と思い出したように頷いた。

「俺は殿下の世話役だからな……殿下の『力』にあてられて仕事が遂行できないようでは困るのだ。故に、これを、持たされている」  
そう言つてオレークは傷のない方の腕で宮廷服の胸ポケットを探り、中から手のひらに乗るほどの大きさの黒い球体を取り出した。漆黒色をしたその球体に、思わず目を奪われる。何も映し出さないそれは、沈黙の存在で、周囲の物を吸収してしまいそうなほどの黒さを持つ。なんだこれは、とユタヤは目をぱちくりさせた。

「玉音石と言つてな……これを持つことによつて、ある程度の『力』の干渉を防ぐことができるのだそうだ。初めて世話役として殿下にお会いした際に、直々に頂いた。これを持っていたても、尚、『力』に負けて逃げ出す世話役も大勢いたらしいが」

説明をして、オレークは黒い球体を再び胸ポケットにしまった。玉音石、とユタヤは口の中で繰り返し返す。初めて見るものであった。つまりその石でもつて『力』の作用から身を護ることができるということなのだろうが、皇太子と同じく『力』の持ち主である聖女た

ちの集う後宮でさえ、石など使って身を護ろうとする下働きはいなかった。それが必要とされるほど、皇太子の『力』は強すぎるということなのだろう。

「……今回のように、『力』が暴発して、それに耐えきれなくなつた世話役が、逃げ出すということか」

自分なりに理解してユタヤがそうまとめると、「いや」とオレークは首を振った。どうやらそういうわけでもないらしい。

「暴発を受けて逃げるならまだいい。中には、ただ日常的な世話をしているだけで、耐えられなくなつた世話役もいるという」

「……何故？」

「世話役は常に殿下の傍に寄り添う。すると、じわじわと殿下の『力』に精神を浸食されてしまうのだ。どう説明すればいいものか……端的に言つと、『孤独』だ」

「孤独？」

「殿下の『力』を構成しているのは、ほぼ孤独だと俺は思っている。殿下の傍にいと、その孤独が自分の精神の中にまで充満してきて、逃げ出したくなるんだ。俺はまだ逃げ出したことはないが??俺で、殿下の世話役は五十人目だからな。その効果がどれほどのものか、わかるというものだろう」

五十人、とユタヤは愕然とする。シルディア皇太子殿下は御年十七にお成りだという。十七年という短い歲月の中で五十人も世話役が代わつたのだ。代わらざるを得なかつたのだ。皇太子の持つ『力』の強さを語っている。

圧倒的に多い数字を述べたオレークは慣れた様子であっけらかんとしている。彼は裂いた宮廷服の袖の部分で自分の傷ついた腕を強く縛り上げた。止血のためであろう。

「俺は、殿下の世話役を務めた中で最長記録を持っているんだぞ。とは言つても、たつたの三年だがな」

「三年……」

「最短記録が一日だったことを思えば大したものだろう」

「……。……オレーク殿は、何故逃げ出したくない？」

「逃げ出したくなることは何度もあったさ。だが、これが仕事だからな。俺は役目に忠実なんだ。これが上意であり、国から俺へ与えられた任務なのだと思えば逃げ出すわけにはいかない。??要は、冷めているんだろ。必要以上に殿下には近付かない。仕事だと思つて割り切つて接している」

なるほどそうか、とユタヤは納得した。それは、ユタヤ以外の仗身たちと同じである。ユタヤ以外の聖女に仕える仗身たちは皆、己が仗身であることを役職として捉えていた。故に、聖女との距離もユタヤとカグワほどに近くはない。ユタヤとカグワの関係性は、異端であつた。が??。

カグワのことを思つて陰鬱になるユタヤに気付いているのかいなのか、「ところで」とオレークは止血した腕をぶらさげて問うてくる。

「お前は生まれた時より仗身として巫女君に仕えているのか？」

この男は、自分と同じく『力』ある主に仕える仗身に、興味があるらしい。ユタヤは上階で今頃皇太子を抱きしめているのであろう主を思つて憂鬱になりながら、首を横に振つた。

「否……俺がかぐわ様に仕えたのは、八つの年の頃になつてからだ。死にかけているところをかぐわの君に助けられて、それで」

「八つの頃ということは、人間から獣に変化するぎりぎりのところではないか。よく間に合つたな」

「いや、もうその時には俺は、獣に変化していた。獣に変化して村人に殺されそうになっているところを、かぐわの君に救われたんだ」

「ほう? 面白いな。西国の巫女の仗身は、生まれた時から仗身として育てられるのだと思つていた。巫女に救われて仗身となるのか」

「そうじゃない。大概の仗身は仰せの通り、生まれて間もない頃から仗身として育てられる。だが、俺の場合は特殊だつた。……俺は、

かぐわの君にとって二人目の仗身なんだ。一人目の仗身は死んでしまったというから」

それはまだユタヤがカグワのことを知らない頃、まだユタヤが普通の人間の子供として村で生活していた頃のことだ。後宮に住まう聖女であった幼きカグワは、同じく幼き仗身に身を庇われたのだという。カグワを庇った幼い仗身は、そのまま命を落としたそうだが、その詳細は聞かされていない。カグワは「よく覚えていないの」と笑ったが、本当に覚えていないのか、あるいは覚えていてもユタヤに話すようなことではないと気を遣っているのか、判断し難いところであった。

ほう、と声をあげたオレークは、ますます興味深そうに目を細める。茶色い癖つ毛がわずかに揺れた。

「では、お前のその忠誠心は、まだ自立心のない頃から先天的に植え付けられたものではないんだな。後天的に、芽生えたものなのかだとすると、ますます興味深い。お前が、命を張ってまで巫女君を護る利益はなんだ？ その忠誠心の動機付けはどのようにしている？」

ユタヤは完璧に言葉に詰まった。

つい先日、シルディア皇太子殿下にも全く同じ事を聞かれたばかりであった。お前は何故、彼女のために命を張るのか、と。ユタヤは未だに答えを見つけ出せずにいる。

黙り込んで俯いてしまったユタヤを見て、オレークは何を思ったのだろう。わずかに口元を歪ませて、呟いた。

「……不毛な恋心だな」

ユタヤはかっと目を見開く。シルディアと同じように、彼もまたユタヤのこの忠誠心を恋慕の心だというのか。そんなものではない。以前のユタヤなら、即座に否定をしたはずであった。？？だが、今は、自分の忠誠心に自信がない。

自分の前だと安心しきって服でもなんでも脱ぎ捨ててしまうカグワの危うさに鼓動を早くさせたり、彼女の眩いほどの笑顔に目が眩

んだり、あるいは迷うこともなく彼女に救いを求めて抱きしめられる皇太子を心のどこかで羨んだり、もはや、わけがわからない。そんなつもりではなかった。そんなつもりで、彼女の仗身になったわけではなかったのだ。

唇を噛み締めて苦渋の表情を浮かべる彼を見て、オレークは瞬くよもや彼がそんな風に思い詰めているとは思ひもなかったのだろう。オレークは傷を負った腕を撫でながら、困惑したように告げた。

「……別に慕情による動機付けでもいいじゃないか。主に尽くすのだという忠誠心に変わりはあるまい」

「……忠誠は、忠誠だ。誰かに忠誠を誓うのに、何故動機が必要なんだ。俺はそんなつもりで、巫女に仕えているのではない。忠心に動機はいらない」

「いらないことはない。全ての世の中の事象には、原因や動機が付随する。それは世の理だ。そして、その原因や動機に良いも悪いもない」

オレークはきっぱりと言い放った。彼の目は、どこか遠くを睨みつけているようにも見える。強大すぎる『力』を持つ皇太子の世話役を三年も続けたという傑物は、その意思もはつきりとしていた。

「俺が殿下に仕える動機は、それが上意であるからだ。それを冷淡すぎると、思いやりがないと言う輩もいるが、結果的にはそのおかげで俺は三年間も世話役を続けていられる。もしも殿下のことを慕い、近付きすぎてしまつたら、殿下の抱える孤独に飲まれて半日も保たなかったかもしれない。動機は何でもいいんだ。結果が重要となる」

「結果……」

「例えば巫女君は、我がラウグリア国に誘拐されたような立場でありながら、それでも我が皇太子殿下に良くしてくださる。己を誘拐した敵国かもしれない国の皇太子であろうとも、良くしてくださる。その動機を我々は知らないが、結果的にはそのおかげで皇太子殿下

は救われている。それは、我が北国を助けているようなものだ」

なにかしらの理由があつてカグワは北国の皇太子を救った。しかし北国にとつてはその理由などどうでもよくて、彼女が皇太子を救つてくれたという事実の方が重要となる。オレークはそう言いたいのだろう。世の中には原因と結果が幾重にも螺旋状に繋がつて渦巻いており、重要なのは結果の方である、と。

しかし、ユタヤはそうは思わない。本当に重要になるは、動機の方ではないのか。動機があるから結果が付いてくる。だからこそ、己の中にある巫女に対する特別な想いが憎らしい。こんな動機付けでは、結果的に自分は巫女を護れないのではないか。

そんな自分に比べて、カグワの抱く動機は単純明快だ。それは常に、人を救つてきた。まるで、天女そのものの動機である。

「……かぐわの君は、いつでもそうなのだ。相手が例えば敵国の皇太子であろうと、例えば忌まわしき獣人であろうと、変わらない。自分の前に現れたからには、それが運命だと彼女は思ふんだ。だから手を差し伸べる。自分の前に立つ者を皆平等に判断する」

だから、彼女は、森の奥に倒れていた穢らわしい獣人を拾つて、己の仗身とした。だから、東の君と呼ばれることにも少しの嫌悪も見せなかった。獣人であろうと、東国の生まれであろうと、同じ命であることに変わりはないと知っているからである。さしあたって皇太子に関してもそうだ。どれだけ高貴な存在であろうと、どれだけ強大な『力』を持っていようと、貴方は貴方だと言い切れる彼女の強さはそこにある。

「だが……なかなか、出来ることではない。俺は、獣人である自分と、巫女であるかぐわの君を平等になんて思えない。同じ世界に生きていることこそが奇跡だと思う。本来なら、巡り会はずがなかった」

カグワの存在を遠く感じる昨今、ユタヤは本気で、彼女と自分は異なる世界の生き物なのだと思うようになった。そんな自分がどうして彼女に恋慕の気持ちなど抱けよう。



そうして俯いたユタヤを見て、面白そうに笑ったのはオレークである。

「だが、巡り会った。結果的にお前は此処にいる。やはり俺は、結果の方が重要だと思うがな」

そう答えて、オレークは棚から離れた。そして倉庫の扉の方へと向かう。どうやら此処から出て行くつもりのようなだった。

「……なるほどな、それが巫女君の持つ不思議な能力の所以か……。殿下の『力』でさえ鎮めてしまう強さは、相手を枠組みではなく真で見極める勘の良さからくるのか」

オレークは「面白い」と呟いて、こちらを振り返った。そして依然として女中の寝転がる長椅子の前に膝をついているユタヤを見下ろして、言う。

「俺も少し見習おうか……まずは、獣人としか呼んだことがなかったが、お前の名を聞こう」

獣人、と呼ばれることに慣れたものである。それはユタヤの生まれ持ったさだめであり、厭う気もなかった。が、当然名前を名乗ることを拒絶する気もない。

「ゆたや、と申す」

「ゆたやか……ふむ、さすがに獣人であるからには東国の生まれか」

ユタヤは驚いて顔をあげた。確かに獣人の出生率が最も高いのは東国であり、それは事実だ。だが、それを知っていてさらに「ゆたや」という名前が東国の物であると判断でき、きちんと東国の訛りで発音できる人間に久しぶりに会った。久しぶりどころか、カグワ以来、初めてかもしれない。

「東国の言葉が……わかるのか？」

「最近では東国の人間も標準語を話すだろう。東国人との会話に困ったことはないぞ」

「そういうことを聞いているのではない。ゆたや、と俺の名前がわかるのか」

「ゆたや、か。作物などの実りの良いことを指す言葉であつたか」

「東国の古語だぞ？」

「俺は昔から古文書を読むのが好きなんだ。特に東国の神話は面白い」

そう言つて笑つた彼ははったりを言っているわけではなさそうだった。元より知識の豊富な切れ者だとは思つていたが、まさか他国の古語にまで精通しているとは思わなかった。オレーク・ナイザー。正真正銘の傑物である。

「では、俺はそろそろ戻るとする。殿下の『力』が暴発し、世話役としてやらねばならんことが山と残っているのだな」

そう言つて踵を返したオレークに対して、ユタヤは焦りを隠せない。この娘はどうすればいいのか。

「待て、この娘は……」

慌てて聞くと、青年は「放つておいて良い」と答えた。ユタヤは目を丸くする。確かに外傷はないものの、『力』の暴発を真正面から受けて精神に大きな損傷を食らつたと言つたではないか。

「忘却の水を飲ませたのでな」

目を丸くしているユタヤに、オレークは端的に答えた。忘却の水と繰り返すと頷く。彼の先示す先には、棚の上に置かれている瓶があつた。あの中に入っている無色透明な液体のことを示しているのであらう。

「あれを飲むと、今より一日ほど前までの記憶がなくなる。従つて、殿下の『力』の暴発のことも、精神に受けた傷も忘れる」

「そんなことができるのか……」

「『力』の使い道は様々だ。その忘却の水をお作りになつたのも、皇太子殿下だぞ。皮肉なことにな」

自分の『力』によつて犠牲になつた者を、自分の『力』によつて癒す。確かにそれは、皮肉なことかもしれない。

「俺は殿下の世話役だからな。殿下の『力』が暴発するたびに、こうして周りの始末を行う。三年経つた今ではお手の物だ」

今回は多少傷を負ってしまったがな、と自分の片腕を示して笑う彼は、倉庫の出口を開いた。開かれた出口から、日差しが暗い倉庫の中へと差し込んでくる。外はまだ昼間だ。

「ゆたや、お前ももしも、己の慕情を後ろめたく思うのであれば、忘却の水を飲んでみればいい。グラス一杯で一日分だ。後ろめたい想いも何も忘れられる。ただし、忘れたくないことまで忘れてしまふかもしれないがな」

オレークは冷めた笑いを残して倉庫を出て行った。ばん、と重い扉の閉まる音が響き渡る。

取り残されたユタヤはのろのろと立ち上がり、なんとはなしにその瓶の中身を覗いた。その中身はすでに半分も残っておらず、グラス五杯あるかどうかである。ここ五日間の記憶を失ったところで、ユタヤの中にある後ろめたい想いの消えるわけもない。

いつからこんなことになってしまったのだろうか、と思わずにはおれなかった。あの森で天女のような少女に救われた幼い日、自分はただ純粹に、彼女に命を捧ぐのだと誓ったではないか。それがいつのまにねじ曲がってしまったのか。

その答えは見つからない。恐らく永遠に、見つからない。彼に出来ることは、上階で皇太子を抱きしめているであろう少女のことを、ただ悶々と待ち続けることだけなのだ。

## 18、天女

季節が巡って行く。太陽の滞在時間が少なくなつて、朝も夕方も暗い。そろそろ西国エウリアにも冬の匂いが漂い始めた頃ではないだろうか。此処、北国には、冬が来た。

皇太子シルディアの『力』の暴発したその夜、北国の首都は大雪に見舞われた。

皇宮の窓に叩き付けられる雪の塊はとても新鮮だ。何故なら、西国の首都にある後宮では雪など滅多に降らない。もしもここにカグワがいたならば、「雪よ、ねえ、見てゆたや！」と言つてはしゃいだに違いない。それに相槌を打つて、「今夜は寒くなるでしょうから暖かくして寝ましよう」と落ち着き払つたまま答えてやるのが己の仕事のはずだった。??だが、まだ、カグワは帰つて来ない。シルディアの部屋に行つたまま、帰つて来ないのだ。

夕刻になつて、夕食の時間も過ぎて、夜が来て、降りしきる豪雪を見つめ、寒さをしのぐために暖炉の横に腰を下ろして、長い夜が過ぎていき、やがて朝が到来した。朝になつても依然として雪は北国ラウグリアの国土に降り注ぎ、そしてそんな豪雪を見上げるのはユタヤ一人である。カグワは朝になつても帰つて来なかった。

暖炉の脇に蹲つたまま朝を迎えたユタヤは、ぱちぱちと音をたてて薪を燃やすその炎の暖かさに包まれて、転寝をしていた。

??とても幸せな夢を見た。

ユタヤは、とある田舎の村に生まれた普通の少年だった。母と二人暮らしで、とても質素な、だがとても幸せな生活を送っていた。ある日、村に、天女と見紛う少女が現れた。綺麗な黒髪を持つ少

女で、太陽のような微笑みを振りまいた。少年ユタヤは、すぐに少女に心惹かれた。村一番の美女にも、村一番気だての良い女にも、他の少女になど目もくれず、その天女のような少女に心酔した。

歳月が過ぎると、ユタヤは少年から立派な青年へと成長した。村人とともに農作業をしたり、時には狩りに出かけたり、村の若衆として活躍していた。少女もまた成長し、大人びた。まだ無邪気な少女らしさも抜けきらず、だがより一層天女のように美しくなって、その不釣り合いな愛らしさにどうしようもなく胸の内がざわめく。

少女は、ユタヤの名を呼んで笑った。ユタヤの手を引いて走った。村組織という狭い世界の中を自由奔放に、駆け回った。二人ですつと駆け回っていた。

ふと足を止めて、少女が呟いた。??キスをしようか、と。驚いたユタヤは、危うく転びそうになり、だがなんとか踏みとどまった。

少女は冗談を行っている風でもなく、だが悪戯っぽく微笑んで、ユタヤの袖を引いた。ユタヤは彼女に逆らえない。天女の唇を奪うなど、とてつもなく罪悪感に駆られることだが、その罪悪感がまた心地良く、どうしようもない。

綺麗な少女に、触れたいと思った。触れて口付けをして、この小さな村でこっそりと結ばれて、やがては親になって、自分が育ったのと同じような質素な家庭を築いて、そんななんでもない幸せを構築していきたいと、思った。

そんな淡い夢を抱いてユタヤは少女に手を伸ばした。  
あと少しで唇と唇が触れ合うという、その時である。

がたん、と音がして、ユタヤは夢から醒めた。突然の現実からの呼びかけに、驚いて心臓が跳ね上がる。慌てて飛び起きたユタヤが辺りを見回すと、そこは北国ラウグリアの皇宮の一室、主力グワのために与えられた一室であった。

ユタヤは暖炉脇の壁に預けていた体をゆっくりと起こす。おかし

な姿勢で転寝してしまったせいで、体の関節があちらこちら痛む。首を押さえてはきばきと鳴らしながら、ユタヤは夢か、と小さく呟いた。??とてつもなく、幸せで、虚しい夢を見ていたような気がする。

「……寝ていたのか」

寝ぼけていた彼に直接声をかけてくる相手がいて、ユタヤは再び驚き飛び上がりそうになった。獣の性を封印されているためか、あるいは相手が気配を隠すのに相当優れているのか、全く気付かなかった。がたん、というユタヤを覚醒させた音はどうやら、この部屋の扉の開閉する音だったらしい。扉の脇に、金髪の少年、この国の皇太子が立っていた。

「……皇太子殿下」

「ごめんね、起こしちゃったみたいだ」

そう軽く謝罪する少年の顔は、今までになく清々しい表情をしていた。初めてこの国に降り立ち出会った時の病気のような疲弊の色も、「出て行け」とこの部屋で一喝された時のような苛立の色もない。まるで憑き物が落ちたかのように、すっきりと清々しい表情をしていた。

「別に起こすつもりはなかったんだけど」

「……いえ、転寝していただけですから、良いのです。どうぞお気になさらず」

ユタヤは寝起きでまだ判然としない頭を押さえながら立ち上がり、皇太子を暖炉前に置かれた座椅子の方へと招き入れた。大雪の降る寒い中、この部屋で最も暖かいのはこの暖炉前の座椅子である。

「まだカグワは俺の部屋で寝ているから、心配していると良くないなと思って来たんだ。それに君とちよつと話もしたかったしね」

「……はあ」

言いながら座椅子に座る皇太子を前に、ユタヤは複雑な心境を隠せない。彼に依然一喝された時の、殺されるのではないかという恐怖もまだ忘れられてはいないし、彼に言われた「お前は彼女に惚れ

ているんだろう」というその台詞も頭から離れない。そして、彼を抱きしめて癒した主の様子が何度でも脳裏に蘇り、そしてまだ彼の部屋で寝ているのだという彼女を思うと居たたまれない気持ちでいっぱいになった。そんなユタヤを前に、彼は今更何を話したいことがあるというのだろう。

そんなユタヤに対して、シルディアは言う。

「この前は悪かったね。実はあまりよく覚えていないんだけど……ものすごく気分が悪くて、君にひどいことを言ったような気がする。まずはそれを謝りたいと思って」

突然繰り出された謝罪に、ユタヤは目を丸くする。この前とは、「出て行け」と一喝されたあの件のことであろう。ユタヤは慌てて「滅相もない」と首を振る。実際、あれ以来ユタヤが気を病んでいるのは事実であるが、それは必ずしもシルディアの所為ではない。何故なら、彼の言ったことはほぼ真実であると、今では認めざるを得ないから。

「俺は、皇太子として生まれ、皇太子として育ち、どうせお前なんか俺の気持ちかわかるわけもない、なんて苛立つことがよくある。でもそれを言ったら、お前だって同じことで、俺には獣人であり仗身であるお前の気持ちなんて理解できない。それなのに、わかったような面をして、お前にひどいことを言った。ユタヤにはユタヤの、悩みがあるはずなのになあ」

「いいえ……私なぞの悩みなど、取るに足らないものでございます」

「だからそんなに自分を卑下するなよ……」って言ってもまあ、仕方ないか。十何年かけて植え付けられた感覚だもんな」

くす、と笑ってシルディアは首を竦めた。ユタヤは何と言い返すこともできずに、無言でシルディアの前に膝をつく。見上げた皇太子の顔には屈託のない笑みが浮かんでおり、『力』は暴発するだけ暴発し、今はすっかり落ち着いているのだなと伺えた。

「……殿下は、今朝は御気分がよろしいようで」

その顔色から思った通りのことを告げると、「うん」とシルディアは軽快に頷いた。本当に気分が良いのだろう。

「昨夜はひどい姿を見せてしまったけど……おかげで、すっきりしたよ。カグワと一緒に寝てくれたからね。彼女を抱いて寝ると、不思議なことに驚くほど安眠できるんだ。??あ、変な意味じゃないよ。物理的に、抱きしめてという意味だ」

補足される説明に、どうやって反応すれば良いのかわからない。それがどういう意味であっても、巫女であるカグワが彼を許容したのであれば、従者でしかないユタヤにあれこれ言う権利はない。

沈んだ面持ちで俯くユタヤに、シルディアはそつと手を差し伸べる。彼は膝をついた青年の顎に手をあてて、くいと上を向かせた。そして自分と目が合うと、微笑む。

「ねえ? 君はいつから、彼女を愛していたのさ?」

ユタヤの瞳が揺らぐ。顔を伏せ、目を逸らしたいのであるが、皇太子が顎を掴んで固定している以上、動くこともできない。

「そのようなこと……」

「まだしらばくれるのか。今更違うなんて言わせないよ。俺が彼女を抱いて寝たというだけでそんなに動揺しておきながら」

返す言葉もない。今ではこれが男女の間に生まれるような俗な愛情ではないと言い切れる自信もない。いや、今までだって、相手は巫女だからと己は獣人だからと、その事実を土台にして己の心を伏せていただけだ。自分がどれだけ主の傍に寄り添いたいと思ひ、そしてどれだけ彼女に恋ひこがれてきたのかなんて、隠し通せるほど小さな想いではなかったことは明白だ。

ユタヤが罪悪感たつぷりに唇を噛み締めると、シルディアはそれを見て首をすくめる。

「……別にいいじゃないか。お前が彼女を愛したって、別に彼女はお前を厭わないだろう」

「……それが問題なわけではありません」

「じゃあなんだ? 彼女が巫女だから? お前が獣人だから?」



「それもありますが……それだけではなくて」

シルディアの手が顎から離される。ユタヤはすぐさま俯いて敷かれた赤い絨毯を見つめると、ぐつと歯を噛み締めた。

いつから彼女を愛していたのかわんて、皆目見当もつかないことであつた。それはこの瞬間から、と呼べるようなものではなくて、日々寄り添う後宮の緩やかな時の中で、ゆつくりと育まれた今となつては引き返せないほど大きな想いだ。いや、あるいは、初めて獣へと変化して、森の中で倒れていたのを救われたあの瞬間から、ずっと彼女に焦がれていたのかもしれない。

とにかく、それは無意識の結果であり、そんなつもりではなかったのだ。そんなつもりではなかった。自分はただ彼女を護るのだと心に誓つただけだ。それ以上は何も望んでいないはずなのに。

「?? 彼女は、私の前に降り立つた天女なのです」

ユタヤはぼつりと呟いた。「え?」とシルディアが目を丸くする。思いも寄らない返答だつたのだろう。ユタヤはぼつりぼつりと吐き出すように、続けた。

「巫女であるとか、獣人であるとか……もちろんそれが無関係であるとは思いません。ですが、そういうことではないのです……。彼女は天女だ。巫女も『力』も関係ない。私の前に降り立つた、天女なんだ」

初めて彼女を森で見上げた、あの死を間近に控えた絶望の淵で、「天女だ」と思った瞬間から、ユタヤの心は変わらない。彼女は天女のように美しく優しく、慈悲深い。ユタヤに生きる意味を与えてくれた。そして今も、自分は彼女のために生きている。

それなのに、いつから自分は彼女に俗な愛情を注ぐようになってしまったのだろう。

苦りきるユタヤを見下ろして、シルディアは「天女ねえ」と小さく呟いた。まるで呆れているようにも聞こえるその声色の意味は、

本気で悩んでいるユタヤには届かない。

「まあ、それも愛情なのかな。俺は誰かを天女みたいだなんて思ったことはないけれど」

思っても言わないけどね、と付け足して、シルディアはすらりと足を組んだ。彼は今度は己の顎を撫でて、ちらりと窓の外を見る。降りしきる雪で景色も見えない窓の外を見てから、少年は「そうだね」と言葉を続けた。

「天女かどうかはともかくとして……お前の言いたいことがわからないわけでもない。俺はカグワに抱きしめられて初めて、『愛』の意味を知った気がする」

言われて、ユタヤは顔をあげた。すっきりとした笑顔を浮かべ、遠い窓の外を見やる皇太子は、以前、「無償の愛」を真っ向から否定した。人を愛するからには必ず何かしらの見返りを求めているのだと、彼は語った。だが、今の彼は、何かを悟ったかのように改めて「愛」についてこう語る。

「不思議だね。別に何をするわけでもない、男女として交わるわけでもなんでもないのに、ただ寄り添うだけで、とんでもなく安心するんだ。そして、俺自身も、優しい気持ちになれる。愛は伝染するのかな？ 誰かから愛を受け取れば、その愛を他の誰かに注ぎたくなるような？？そんな感覚だ」

皇太子は言って微笑んだ。色白で華奢な少年は、毒のない笑みを浮かべればそれはそれは美しい様相をしている。ユタヤは初めて、この少年の本来の姿を見たような気がした。

「だからきつと、そんな風に俺に愛を注いでくれたカグワも、今までたくさんの愛情を注がれて生きてきたんだと思うんだ。だから、迷わず俺を抱きしめられる。？？彼女に愛を注いできたのは、お前か？」

どうやら、彼の質問の真意はそこにあったらしい。故に、「君はいつから、彼女を愛していたの」と問うてきたのかとようやく氷解する。

しかし、ユタヤが彼女に慕情を抱いていることは今や認めざるを得ないものの、ユタヤが彼女に注いだ愛情が、それほどまでに大きく彼女に影響しているとは思えなかった。カグワはカグワだ。ユタヤが彼女にどれだけ恋い焦がれようと、変わらない。

「かぐわの君は……そういうお方なのです。私が彼女を愛していたからとか、そんな理由ではありませんまい」

「ふうん？ そうなの？」

まあ俺にはよくわからないけどさ、と軽い口調で言っただけで、シルディアは座椅子から立ち上がった。ユタヤは膝をついた姿勢のまま、彼を見上げる。くるりとこちらに背を向けた彼は、どうやらもう帰るつもりらしい。

「カグワがずっと此処にいられたらいいのにつて、俺は思うよ」

背中越しに吐き出された言葉に、啞然とする。カグワは西国の巫女だ。「そういうわけには」と慌てて口を挟むと、シルディアはくすくす笑った。彼は「わかってるよ」と言う。

「カグワがずっと此処にいられないことは、わかってる……。そして、西国と北国の間に何が起きようとしているのか、そのために西国の巫女が何をしなくてはいけないのか……」

ぼそぼそと紡がれる言葉に耳を傾けながらも、ユタヤには深意が解せず、眉をひそめる。

シルディアにはしかしそれを説明する気はないようで、部屋の扉に手をかけると、それを開いた。そして今までになく寂しげな笑みを浮かべると、こちらの方を振り返った。

「生まれついた定めというのは、悲しいものだね……。君が獣人であることをどうあがいたって変えられないのと同じように、俺はどうあがいたってやっぱり北国ラウグリアの皇太子なんだ。そして、カグワは西国エウリアの巫女だ」

それはそうだろう、と釈然としないままユタヤが頷くと、「うん」とシルディアも頷いた。

「定めは変えられない。それは、君も俺も、同じことだね」

少年はその一言だけを残して、部屋を去って行った。取り残されたユタヤの中には、妙なわだかまりだけが残される。

誰もいなくなった部屋の中で立ち上がり、ユタヤは暖炉の脇に再び移動すると、シルディアが来る前まで転寝していたその場所に再び腰を下ろした。腕組みをして目をつむれば、再び睡魔が襲いかかってくる。

?? 定めは変えられない。

それはその通りであると、ユタヤもよく承知していた。だがしかし、皇太子の述べた「定め」というのが何なのか、判然とはしないカグワがずっと此処にはいられないことが、自分が北国の皇太子であることが、あるいはカグワが西国の巫女であることが、それとも何か全く別の事を示唆しているのか。

強大な『力』の持ち主であるというシルディアならば、巫女の技の一つでもある先見の技、すなわち未来予知をするのも、朝飯前であろう。おそらく彼の言う定めは、彼の見た未来の一つだ。彼は未来の光景の中に、何を見たのだろう。

何やら、あまり良くない予感がした。そもそもいつまで北国の軍は、西国の巫女カグワを此処に幽閉するのだろう。西国は、北からの文書を受け取ってどのように返事をしたのだろうか。北国では、西国では?? 今、世界では何が起こっている？

皇宮の中に閉じ込められたユタヤには、果たして外の事情が全く聞こえてこない。だが、北国に攫われもう一月以上が過ぎるという頃、何かが動き始めているであろうことは想像に難くなかった。

(とにかくにも、何があるうとも、俺はかぐわの君を護ろう)

例えその動機が純粹ではなくとも。例えそれが彼女へ注ぐ不純な愛であつても。

ユタヤの心は、やはり変わらない。己の決意の動機さえわからない今でも、変わらない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9892x/>

---

西国の巫女

2011年11月4日15時23分発行